

62-353



獨逸文學史

目次

東京大学文学部
第一回三年



緒言附古代文學略説	一
近世文學	六一
第六期 (一七二五—一七七〇)	六一
第一章 當期の特質	文學諸派
論争	ゴットシマド
ポードメル	スキスライツィヒ兩派の
ブライトインゲル	
説作者	ハルレル
ハーゲトルン	散文小説
イム及び其の朋友	頌詩作者
散文化小説	六—
第二章 普魯士のフリードリヒ二世	歴史家
通俗哲學	
者	唯理論者
美學の著者	キングエルマン
	八五

第三章 シロマンティック レッシング キーランド..... 一一三

第七期(一七七〇—一八三〇)..... 一九五

第四章 ゲーテが青年時代 宗教政治及び文學 『ストゥルム、

ウインド、ドラング』 ハーマン ヤコビ ヘルデル.....

..... 一九五

第五章 『ゲッツ、フォン、ベルリヒンゲン』 『エルナルスライデン』

激動突進派 『ハインプンド』 散文作家 カント

..... 二三〇

第六章 『エグモント』 『イヒゲニア』

『タムン』 『ヘルマンとドロテア』..... 二五六

第七章 『ファウスト』..... 二八〇

第八章 シルレル及び其の著作..... 二九〇

目次

近世獨逸文學史

五十嵐 力 講述

緒言

(附古代獨逸文學略説)

文學史を講ずるの途數多あるが中に、其の主なるは、年代の序を逐ひてむねど作家を傳し名作の梗概を紹介する敘述的方法と、時勢の推移思想の傾向を根據としてそが文學に反映したる有様を説明する批評的(又精神的)方法との二つなるべし。前者は讀者をして作家と著作とに就きて着實なる知識を獲しむるの益あれども、其の知識は統一なき斷片たるを免れ難く、後者は時勢思潮に就きて概念的知識を得しむるの効あれども往々空論に流れて其が根據たる重要な事實を看過するの弊あり。蓋し敘述的方法と批評的方法とは二者共に至れるものにあらず。最良の方法は二者の中を取りて且つ敘述し且つ批評し、讀者をして各時代に於ける思想の傾向文學の精神を知らしむると共に作家と著作とにつきて主なる事實を會

得せしむるものならざるべからず。予は獨逸文學史を講述するに當たり、則を茲に取りて、一方に於いては作家の略傳を述べ名著の梗概を紹介して突飛の空論に流るゝを防ぎ、他方に於いては時運と文學との關係を叙して統一的知識を得しむるを力むべし。

獨逸國民はアリアン人種の一派なり。彼等は中央歐羅巴の大部を占領し、人種に於いても國語に於いても純乎たる一國民を形づくりて十二世紀以來自ら稱して「アインツェン」と云へりき。高地獨逸語(獨逸語に高地獨逸語と低地獨逸語との別あり前者をば南獨逸語又は上獨逸語とも稱す茲には其が説明を略す)を以て文學上の用語とす。高地獨逸語は紀元後六世紀より現今に至るの間著大なる變化を爲し、が之れを別かちて上古、中古、近世の三となすことを得べし。上古の高地獨逸語は六世紀より十一世紀に至るまでの文學に用ひられ、中古の高地獨逸語は十字軍より宗教改革に至るまでのに用ひられ、近世の高地獨逸語はルーターテルが聖書翻譯に用ひられてこのかた文學上の用語とせらるゝに至りき。而して上古の高地獨逸語の現今の獨逸人に解せられ難きは、猶ほアルフレッド王朝の英語の現今の英人に於けるが如く、十三世紀の

詩人ワルテルの詩に用ひたる中古の高地獨逸語のゲーターに異なるは「チーサー」の「テニス」に於けるよりも甚だし。但し其の文學上に用ひられたる時代より云ふときは上古の高地獨逸語は之れを中古と稱すべく、中古の高地獨逸語は後の中古として之れと區別するを得べし。

文學に於ける獨逸諸州の功績は一様ならず、而して北方諸州の文學上の功績は其の數量に於いても又其の價值に於いても遙かに南方諸州の上に在り。あらゆる學問に於いてプロテスタント(新教)諸州の「カトリック」(舊教)諸州を凌駕せりといふは公平なる批評として認許すべし。世界に影響せし獨逸近世文學の大部分は實に普魯士(プロイセン)とサクソニー(ザクソン)に屬す。千七百四十年より千八百四十年に至る一百年間に存せし百七十名の著作家中、六十名は普魯士に屬し三十名内外はサクソニー及び「フュルテムベルヒ」に屬し、十名若しくは十二名は「ペツリア」及び「バイデン」に屬し、僅々二三の著作家は「埃太利」に屬しき。又獨逸に於ける十九の大學の中、其の十三は「プロイセン」及び北方獨逸聯邦に屬す。教授及び著作の數に於ても亦然り。要するに北方諸州は獨逸文學精華の存する所なりとい

ふも不可なし。

獨逸人は多感ならず、快活ならず、情熱少なくして其の言語文章に於ける發表亦平易流暢の趣を欠くと稱せらるれど、他方に於いて教育ある獨逸人は其が深遠なる思索、撓まざる勤勉、及び五官界を離れて自家心中の理想界に安んずる力の大なるとによりて推重せらる。我が心は我れに取りての王國といひけらしカントは晩年に至るまでケーニグスベルヒに蟄居して遂に其の郷里を出でしことなく、人間の社會に對する義務に就きて幾多の著作を爲し、フヒテ、ヘーゲルまたそが最高の生活、無上の悅樂の自知と冥想とに存するを説きし。縱令此等二三の偉人は國民を代表する者にあらずとするも強大深奥なる思索的傾向の哲學、神學に於いて許多の退守的偉人を生ぜし獨逸人に存すること誰れかまた疑はん。之れに關聯して獨逸文學に於ける最も著き外部の疵瑕といふべきは文牀の明瞭と優美とを欠きたることなり。但し文牀の曖昧なるは一つには其が思想の深幽なるにもよるべけれど、無味曖昧なる文牀は必ずしも思想の深玄を證するものに非ず、假令之れに對する幾多の辯護の理由ありとも曖昧と無味とは遂に疵瑕たるを免れざるべし。

其の他獨逸人の性癖に就きて注意すべきは彼等の從順に、謹慎に、且つ忍耐なることと是れなり。彼等は自家を株守せずして能く他の長に順へども、之れと共に注意周到にして他に盲従することなく、其の一理想を立つるや常に精進して屈撓することなし。此等の特性や實に獨逸國民をして今日の隆盛あらしめたるものなり。彼等が他の國語を學ぶや許多の困難に耐へて善く聽き善く勉め終には説話文章に於いて本國人をすらも驚かすに至る。彼等はあらゆる外國の文化を翻譯輸入して是ることを知らざる概あり。而も廣く知識を需むるの餘り自家を棄て、他に盲従するに至らず、また學に淫して國家と社會とに對する義務を忘却するとなし。彼等は自家を確立し他を咀嚼して自ら大にし、高くせんとする人民なり。その昔爭奪遊獵を事とせし粗暴勇敢なる民族が羅馬教會に感化せられて漸次野蠻の境を脱し遂に文明の指導者たるに至りたるはこれによる。蓋し十七世紀の末に至るまでの獨逸文學は形に於いても精神に於いても常に所動の地に立ちたりしが十八世紀のはじめレンシク等が國民文學を唱へ出づると共に獨逸の文學は

一體能動の地に立ちて世界に雄視するに至りぬ。之れを宗教界がルーテルに於いて、哲學界がボエーティ、ライプニッツ等に於いて能所其の位置を轉じたるに駢へば獨逸の文學亦頗る刮目すべき壯觀あり。特に諸國の思想、諸種の文學の輻湊し來たれる我が邦現今の學者に取りて獨逸文學の研究は一層多趣味有益なるものなるべし。

獨逸文學史を大別して七期とし添ふるに現今の文學を以てして之れを第八期とす。即ち

第一期 は紀元後三百六十年(乃至三百八十年)即ち聖書の大部分がゴス語に翻譯せられしより十一世紀に至るまでを含む。獨逸人民の移住後、彼等の國語は僧侶の手によりて上古の高地獨逸語と稱する文章用の語に化せられたり。此の上古の高地獨逸語にてもせられたる文學の吾人に知らるゝは唯だ僅少なる異教の歌謡、教條、祈禱、拉丁の讚美歌及び聖書の斷片的翻譯あるのみ。六世期より十一世期に至る第一期文學の特質は總べて寺院的なりき。

第二期 は一千百五十年より一千三百五十年に至る二百年間を含む。此の期

に於いて上古の高地獨逸語轉じて中古の高地獨逸語となり、同時に文學は貴族及び諸侯伯(特に埃太利及びバトルリッゲン)の朝廷に於いて新保護者を得たり。

第三期 は一千三百五十年より一千五百二十五年に至る。此の期に於いて文學は貴族及び諸侯伯に棄てられ新に保護者を市民の間に得たり。韻語は詩歌との聯絡を脱して教訓諷刺の性質を帶ぶるに至りしが、散文は漸次に發達し、特に神秘教徒ミステックと稱せられたる信仰家の述作に於いて發達せるを見る。

第四期 一千五百二十五年に其の稿を起して一千五百三十四年に大成せしルーテルが聖書の翻譯は爾後近世の高地獨逸語をして文學上の用語たらしめき。是れ一千五百二十五年より一千六百二十五年に至る第四期の文學史に於ける最も重要なる事實なり。

第五期 は一千六百二十五年より一千七百二十五年に至る百年間を含む。所謂三十年戦争の時代にして、其の間殆ど純文學の見るべきものなく、唯多少の讚美歌の存せしのみ。然れども作詩の術はオピッツ及び其の徒弟等の間に於

いて著く進歩せり。

第六期 一千七百二十五年より一千七百七十年に至る間に於て文學に關する論争の盛なりしと國民文學の先驅と稱せらるゝレッシングの出でしとを此の期に於ける重要な事實とす。

第七期 一千七百七十年より一千八百三十年に至る、即ち文學、技術、哲學のひとしく復興擴張せし時代なり。ゲーテ及びシルレルの二大詩人が其の豊富なる作によりて獨逸文學の眞價を發揚せるを此の期に於ける主要なる事實とす。

第八期 一千八百三十年より現今に至るまでを含む。此の期に屬する作家は現今尙ほ生存するもの多く、彼等が文學史上に於ける位地亦未だ定まれりといふべからず。此の期に就きて、講者は慎重なる事實の報導を爲すを以て満足すべし。

獨逸の文學史は(上は三百六十年より下は現今に至るまで)殆ど一千六百年間の長きを含めど、其の間幾多の罅隙あり、聯綿不斷の發達を成せるにはあらず。嚴密に

いふ時は第六期以前に於いて吾人の注意すべき文學を有せるは特り第三期あるのみ、十四世紀の後半より十八世紀の初めに至る數百年間は獨逸文學史に於ける一大罅隙なりといふも不可なかるべし。もとより其の間多少の教訓詩、諷刺詩、劇詩、物語類等の僅に一縷の命脈を繋げるものなきにはあられど、作の小なる品の下れる特に獨逸の文學なりとして掲ぐべき作物あるを見ず。要するに獨逸古代文學の價値は當代の眞相の、其のうちに現はれたる邊に存す、而して之れを研究することの必要なるは、そがいと幼稚なるにも拘らず、兎に角近世文學の根本を成せればなり。すなはち歴史的價値、當代の反映なりといふ邊を離れ、又文學史的價値、後代文學の地を成せりといふ邊を離れて、單に詩的價値の邊より觀察を下す時は、獨逸古代の文學は恐らく吾人の一顧を價せざるものなるべし。以上の理由によりて予は獨逸文學史を講ずるに當たりて、古代の文學はなるべく簡畧に敘述し、當時の文學の特質と重要なる作者及び著作等を紹介するをもて足れりとし、千有餘年を一過して、ついに第六期すなはち十八世紀の新天地に入るべし。此の期に及びては詩人の輩出、思想の偉大、詩篇の豊富、また古代文學界の寂寞たるに似ず、熟慮

精評すべきもの隨處に充滿せるを認めべし、されば茲に至り顧みて眼を古代の文學に注がば先きに見て拙劣なる片碎と爲ししものまた捨つべからざる深意義を合著せるを發見せん。蓋し予の獨逸古代の文學を詩的價值なしといふは敢て無意義なりといふ意にはあらず、精確に近世の獨逸文學を識らんとする者の古代文學を考覈する必要あるは智者を待ちて後に知ることにあらざるべし。いでや進みて古代獨逸文學の大要を叙せん。

第一期 (紀元後三百六十年乃至八十年より十一世紀に至る)

に於ける獨逸文學の特質は要するに宗教的なりといふを得べし。ゴッス語及び上古の高地獨逸語を以てものせる文學の今日に存するものを見るに、いづれも四世紀より十一世紀に至る間、基督教の漸次に布及して教會の威權益々中央歐羅巴に盛なるに至りし有様を叙せるにあらざるはなく、當時文事に従事せる者亦概ね僧侶なりき。ゴッス族はチロントン種族中最も早く基督教の感化を受けし者にて、僧正ウルフラス(Uthas)が聖書の翻譯(カルフラスは聖書の全部を翻譯したリし斷片の現今に存するは新約書の一部を翻譯したリし斷片)

なり)を今日に存する唯一のゴッス文學とす。獨逸の言語學者がゴッス語に關する知識は概ね此の書の供する所なり。又上古の高地獨逸語及び其の僅少なる文學の今日に知らるるはセント、ガルレン、及びブルダ兩寺院の僧侶の功に歸せざるべからず。件の兩寺院は當時の宗教文學に於ける教化を司れる主要なる學林にして、兼ねて文事に従ふ者の發淵なりき。彼等は當時人民の殺伐なる氣風を矯正せんが爲め古來の異教歌謠を撲滅せんと企てたれども、また人民の言語を研究するの必要より之れを保存せる者もありき。文事に熱心なりしシャレマイン大王亦た學者をして古代の歌謠を編纂せしめしき。吾人が當時の文學に就きて知り得るもの、一に此等の事業に負ふ所なりとす。

上古の高地獨逸語は六世紀より十一世紀に至る間に用ひられき。此の間に現はれたる文學の重なるはセント、ガルレン院の僧ケロ(Kero)七百六十年頃の人)がベネチクト法則及び讚美歌の翻譯、同じ寺院にて八世紀にもせられたる使徒信條の翻譯、ルツドギヒ王の命令の下に成れる『ヘリアンマ』(Heliant)即ち基督傳、フルダ寺院に學びし僧オットフリード(Othried)『七七六—八五六』の『基督』(Krist)九百三十

年に逝りし一僧侶の作なりと傳へらるる『*Undwigslied*』*Undwigslied*三世の戦勝を詠ぜる歌『狐狼物語』當時に於ける獨逸文學の代表とも見るべきセント、ガルレン院の僧、ノットケル、*Nokter*。一〇二二死[†]*Teutonians*と續名せらるるが讚美歌及びアリストテレースの翻譯等なり。

十一世紀は暗黒時代にして文學的著作の更に見るべきものなかりき。唯當時に在りて注意すべきは十一世紀より十二世紀の初めに至る間に上古の高地獨逸語廢れて中古の高地獨逸語の用ひらるゝに至れることなり。獨逸に於ける最初の女性文學者なりと稱せらるるフラウ、アブ[†]*Frau Ava*一一二七死此の語を以て『耶蘇傳』をものしき。

國語の變遷に伴ひて他の主要なる變遷の看過すべからざるは十字軍なり。十字軍は中古の武士を覺醒して新思想を得しめ、新生活に入らしめしめしと共に僧侶及び貴族をして特殊の階級を成して自ら高うするに至らしめき。僧侶の文學を忽諸にするや、彼等と人民との關係やうやくに薄らぎゆき、彼等の愈、富み、愈、生計に饒かなるに従ひて、其の知識と道德とは日に月に衰へ行きぬ。要するに十字軍は教會

に裨益し且つ損害せり、即ち教會は之れが爲に富み又た之れが爲に知識道德の退歩を招きたり。是れと共に爾來武士大に崛起して僧侶の專横を制抑するに至り、先きには僧侶の專有に歸して寺院の中に潜みたりし文學も、今や漸く王侯の宮城に移り、其の性質また著く變化するに隨ひ、文學分かれて二種の階級を成しぬ。曰はく庶民の文學即ち諸國を遍歴する樂師等の歌ひし古話、曰はく歌曲[†]と傳奇[†]とより成れる者即ち王侯貴族に保護せられたりし新文學是れなり。當時古語の湮滅に歸せんことを憂ふる者多く、作家の立ちて諸外國の古傳奇を或は改作し或は編成せしものもありしが、時勢漸く移りて異教的傳奇の改作はもはや上流社會の好尚に適せざりき。彼等の殺伐なる軍國的氣象も漸次基督教の爲に和げられたりし故なり。

第一期の獨逸文學は要するに宗教的なり。一方に於いては殺伐なる異教的歌謠あり、一方に於いては之を感化せんとして諸種の宗教的著作の現はれたるあり兩々相觸れて基督教は漸次に中歐に流布したりき。之れを此の期に於ける時運と文學との關係なりとす。

第一期 (一一五〇—一三五〇)

一四

一千百五十年より一千三百五十年に至る二百年間は獨逸一般の歴史に於けるか
如く其の文學史に於いても暫時光明を放ちたりし時代なれど、件の光明は幾ばく
もなくまた晴黒の蔽ふ所となりき。一千二百六十八年コンラヂンがチーブル
スに處刑せられしは、一階級に限られながら尙ほ多少の光彩を放ちし文學が將に
衰頽せんとせし時なりき。此の期の文學につげるものを十四、五世紀に於ける野
卑陋劣なる文學とす。

『獨逸文學史』の著者ゴスト井ック此の期の特質を論ぜし大意に曰はく

當代の特質は要するに夢幻的なり。吾人は容易に十六世紀を理解することを得、また
遙かに溯りて往古の時代をも理解することを得れども、一たびホーヘンスタウヘン朝
(一一五一—一二五二)に入るに及びては其の夢幻的光景の充ち満ちたるに驚かざるを得
ず。甲冑せる武士が罪業を贖はんとして聖地に旅し、サラセンの強敵と戦ふかと思へば、
またミンネリイアン(Minnelieder 戀歌の義)の如き華繊細巧なる歌を詠下て其の閑を消す
るあり、或は外國の傳奇を涉獵してバルツィファル、アーサー王、トリスタン及び他の夢幻的
勇者の冒險談をもつるあり。當時の實際は此等の物語の如く夢幻的なりき、而して

十字軍は實行せられたる當時の傳奇なり。

云々と。要するに當時は民心の内を離れて漸く外に向かひたりし時代なり。彼
等は教會の感化を受けて稍、野蠻の習俗を脱するに至りしかど未だ自ら顧みて宗
教の根底の自家の心裡に在るとを悟らず、是を以て夢幻的なる十字軍も能く彼等
をして夢幻の裡に狂奔せしめき。彼等の好尚は稍、發達して多少他國の詩歌を味
ふに至りたれども、未だ顧みて自家の脚下に詩題を獲るに至らず、是を以て彼等の
作するや、材をアーサー朝の古話及びブーシャルの作等に借りて未だホーヘンスタ
ウフェン家の諸王と法王との紛争、王位中絶して無政府となりし有様、及び十字軍等
現在の活事實を取ること能はざりき。當時の傳奇、抒情詩はた作者等の國民的感
情に欠乏せりと見ゆるも畢竟以上の理由あるが爲めならん。されど國民の特質
は其の材の何たるに拘らず遂に其の中に現はれざるべからず。次ぎに掲ぐる『ニ
ハルンゲンリッド』の如き、或は『バルツィファル』の如き、其の材を他國或は古代に取り
しにも拘らず、また基督教的武士時代的習俗の外被を纏はしめたるにも拘はらず
剛毅或は兇暴殺伐とも云はるべきなる國民の特性の紙背に活躍せるを見るべし。

然れどもこは間接なり、事實に於いて直接に當時の状態を見んと欲せば、吾人は少時此等の詩歌傳紀に背きてヘルトルド兄弟の説教集若しくは所謂神秘教徒の教訓的散文に向かはざるべからず。

シイレメン大帝の世より十二世紀に至るまで文學は概ね僧侶の手に在りしが十字軍以後は小貴族代りて文學を保護するに至りぬ。當時の市民は殖産興業の畫策に忙しくて力を文學に効すこと能はざりき。

當代に於ける最良なる想像の作を『ニベルンゲンリッド』(Nibelungenlied)及び『グンドルン』(Gudrun)の二國民的敘事詩とす。『ニベルンゲンリッド』が十二世紀の末に成りしことは明かなれど其の作者の誰れたるかは知るに由なし。此の詩は材を古話傳説に取りたるものにして基督教渡來以前の真相を保ちたると共に又武士時代の被衣をも加へたり。然れども基督教的特質は其の外被を透して明かに見たるに止まりて古代の歌謠に存せし異教的特質は其の外被を透して明かに見ることを得べし。但し此の詩は當時の他の物語的詩歌と同じく各部の調和を欠ける所あれど、緩漫なる敘事、無趣味なる譬喩なく、事件の秩然と進行して脈絡貫透せるは他の當時の作に於いて見るべからざる所なり。

『ニベルンゲンリッド』は二部に分かれ、前半はヨングフリッドの死に終はり、後半はクリームホルドが復讐に終はる。此の作は第二期の文學に於ける精華にして延いては古代の獨逸文學に於ける最大の詩篇なるを以て左に其の筋の梗概を述べべし。

ライン河の時、ナルムスの城に嬖妬たる一公主住めり、クリームホルドをてパーガンテ
一王ケンテルの妹なり。また同ト河の下流に沿ひたる他の城にシーケフリードてふ
勇者住めり、ニールンゲンと稱する此の世ならぬ種族と戦ひ勝ちて夥多の金銀財寶
を獲、また或時龍を殺して其の血に浴せしより肩先なる一點の個處を除きては全身不
死身となり、殺龍者と稱せられき。
彼れいさしくクリームホルド姫を戀ひ、其の戀愛の不幸に終はるべき前兆見えし
をも厭はで、婚を求めんとしてナルムス城に來たりぬ。殺龍者ナルムス城にて厚く款待
され且屢、比武に拔群の武勇を顯はしけれども、いさしと思ふ姫には一歳經れど合ひ
見るこゝを得ず、唯或仕合ひの折柄、居間の窓よりかいま見居たりし姫が彼れの捷らし
を見てうち笑みきと傳へき、て姫の稱讃を得たることを知りしのみなりき。さかく
する中、其の年の末に至りケンテル王に盡くし、稀世の軍功によりて殺龍の勇者は首
尾よくも姫と相見ること許されやがて僧老の契りを結びぬ。件の軍功の顛末は材

を北方の神怪談に取れりとおぼしく頗る荒唐不稽なるものなり。海の彼方イーセンランドといふ國にブルンヒルテといふ勇婦ありしが其の身に優れる武勇の士に嫁ぐべしと定業によりて定められたり。グンテール之れを慕ふの意切なりけれども獨力に勝たんことの覺束なきに、シーケフリードを具して遙く彼の地に赴き、さて二人の勝負を決するに臨みて殺龍者隱身の術を以つて人知れず王を助けしかば、ブルンヒルテ遂にうち負けて王の意に従ひぬ。かれナルムス城に伴れ歸りてパーガンデー女王となりしが、やがて殺龍者夫妻の聲譽を思ひ終ひに意を決してシーケフリードを殺さん計り、パーガンデー國士の精華を稱へられし忠臣ハーゲンに意中を告げて其の身いたく殺龍者夫妻に凌辱せられたりと言ふ。君家の屈辱は臣下の義として報いさるべからず、されど勇敢なるハーゲンも公然たる闘にてシーケフリードを仆さんことの難きを憂ひ、遂に臣下として女王に對する忠義を立てんが爲めに人間として行ふべしと云ひければ、計策は露知らぬクリムヒルド姫はハーゲンが厚誼の嬉しさに夫の外套の肩に印を附して不死身ならぬ局部を知らせき。幾ほごもなくハーゲンは遠からぬ森林に獸獵すまでシーケフリードを招げり。是れより先き彼れが枉死の前兆とも見るべき許多のまがことありしが、當日の朝もクリムヒルド姫は獵に急ぐ夫の袖を引き止めて思々しき前夜の夢を語り此の行是非に思ひ止まりて諫むる

を慰めすかして出で行くさきの獵場には猪よりも畏るべき敵待てりとは知らるりけり。森の中に清かなる泉あり、シーケフリード馳騁に疲れ喉渴きハーゲンを伴ひ來たりて泉水を掬げんさせるとき、ハーゲンの抛げし鎗は過たず姫自らの手もて印し置きし盾先の尖處に中たりぬ。クリムヒルド夫の屍骸を見て消え入るばかり痛悼せしが、柩の吟味(謀殺者傍に至れる時屍より血流るゝことによりて下手人を知る往古の習俗)によりて遂に尊敵のハーゲンなることを知り姫が胸中に充ち満ちしシーケフリードに對する戀愛の情、今や其の形を復讐さかへて凡べてのパーガンデー人がハーゲンと共に死せざるべからずとも遂には不倶戴天の讐を報うべしと決心し、十數年間ナルムスの城裡に恫せき月日を送りき云々。以上を此の篇前半の梗概とす。

ハーゲン、クリムヒルドが財を散らすを慕りて復讐を企てんことを恐れ悉く其の財寶を奪ひて密にライン河畔に埋む。姫此等の虐待を默受すること十有三年、復讐の好機の來たらんを待ち他びし折から、メンガリー王エツェルの使臣リューテゲル(篇中にて最も高尚なる人物)を遣して殺龍者の寡婦と婚せんことを求むるに會ふ。かれ今は王侯の榮華も欲しからず、孤棲を倦ぶるあだし心もあらぬ亡夫の讐を報うる術もがなき直に之れを諾し、リューテゲルに伴はれパーガンデーを離れハンガリーに入りて女王さかしづかれき。かくて數年を経つ。女王復讐を遂げんの志止み難くエツェル王にグンテール及び其の臣下の勇士を招かんことを請ひて權力ある家人の妾を訪ふことなくばハンガリーの士民が妾に對する思はく後ろめだしと云へば王許しぬ。招待の使は

發せられき。ハーゲン其の意を察して是れ正しくハンガリー女王の復讐を企つるなりと察す、その他夢に事實に兇兆を示すもの多かりければ王は遂にハーゲン及び一隊の兵士を率ゐてナルムスを發し、途すがらリューテゲルを其の居城ハッヘラレンに訪ふ、リューテゲル厚く之れを遇す。茲にてグンテル王の小弟ギーセルヘル、リューテゲルの女を婚す。王ベッヘラレンを去るに臨みリューテゲルの軍ゲルノット公に劍を贈り、ハーゲンに盾を贈りぬ。

ハーゲンデー人がハンガリー王の居城に達するや、女王はハーゲンの來たるを見て殘酷なる微笑を洩らし、其の家人に應對するに當たりても、亡夫の殺害に與らざりしに小弟ギーセルヘルにのみ接吻の禮を行ふ。之れを見しハーゲンは我れ知らず兇の緒を固め其の友フォルケルに語るに不慮の變あらんことを以てし、他の國人の寢に就ける後も二人の勇士は夜もすがら立ちて警衛せしかど、何事もなくて數日を過ごせり。幾くもなく王宮に大饗宴あり、ハーゲン及び其の友等が王城の一間に宴せし時、彼の室に在りしハーゲンデー人が不意の攻撃を受けたり。此の報ハーゲンに達せし時、彼れ恰も王と共に宴せりしが之れを聞くと直に劍を抜きてエツェル王が幼子の首を斬りぬ。之れを始めとして兩國の士入り亂れて闘ひしが偉大なる義士リューテゲルは嚴然として此の争鬪に與ることを拒みき。そは彼れが其の王エツェルの爲めに殉ふべき本よりなれども、先きにグンテル及び其の従者を導くに當たりて彼等に忠實なるべきを誓ひたればなりけり。此の篇の結果の殺伐なる往々吾人を酸鼻せしむるものあれ

どもベツフラルンの義士(リューテゲル)の高潔なる志行は此のいまはしき徑行に對して大に光彩を與へたるを見る。女王のリューテゲルに命するに兵を集めてハーゲンデー人を撃つべきを以てするや彼れが胸中の苦悶一方ならず王に請ひて曰はく陛下願はくは臣に與へたる凡べての物を剃ぎ臣をして此の事に與らざるを得しめよ。王の意や動きければ女王がハーゲンに對する復讐の志は遂に枉ぐべくもあらず、而してハーゲンデー人は忠義に結ばれて一休を成せるが故ハーゲンを殺して亡夫の讐を報ぜんませば凡べてのハーゲンデー人を殺さざるべからず。されどかれは女王なり、リューテゲルは義として之れに従はざるべからず、彼れは妻子を女王に托し遂にグンテル、ハーゲン等を撃たんとて出で行きぬ。グンテル、リューテゲルの來たるを見て、あはれ、此の地に吾れを導きし汝に向かひて劍を抜かざれば叶はぬとば「さ歎すれバ、リューテゲル曰ひけらく我れ痛く公を茲に導きしを悔ゆれども女王の命を如何にせん」と。ハーゲンの曰はく「ベツフラルンにて貴下の贈られし盾は已に數多の襲撃を防ぎたれども今は已に碎けぬ」リューテゲル曰はく「さらば我が此の盾を進ぜんに、首尾よくハーゲンデー人に持ち還られよ、我れは此の末ながらふべき望みなし〇さばれ今は女王の命否むべからずいざ此盾にて拒がれよ」として自らの盾を與へ、やがて戦ひに時を移してリューテゲルは遂に變はらざる交誼の證にきて自からゲルノット公に贈りし劍の下に斃れけり。エツェルの將ハレンのドイトリツヒ、リューテゲルの死を聞き勇將ヘルデブランドを遣してハーゲンデー人を撃たしむ、ヘルデブランド單身遁れ還りて援をトイトリ

ツヒに請ふ。激戦數回、已にしてパーガンデー軍皆死して僅かに残れるグンテル王ハ
 ーゲンもまた疲れて靡さなりぬ。さて王は幽せられハークンは女王の面前に引き出
 ださる。女王ハークンを詰りて「我がニーベルゲンの寶を返せ」と云へるに、ハークン聽
 かず拒みしかば、女王怒りてギンテル王の死に處せらるべきを命じ、さてハークンを
 願ひ、我れに猶ほ一つの貴き遺物即ちシューグフリード自らの劍丁ありと翰より抜ける
 間もなく傷つき疲れたる勇士は刎れられき。ヒルテラント惜しむべき勇士が一女
 子の手に失せしを怒り斬者の女王たるこさをも打ち忘れてクリームヒルドを殺し了
 りぬ云々。

以上は獨逸古文學の最大産物『ニーベルンゲンリード』の梗概なり。本より之れに
 よりて原作の妙趣を味ふべくもあらねど、其の結構及び特質のおほかたは窺はれ
 ぬべし。思ふに其の末段の殺伐殘忍なるは讀者の同感を殘ふべきものなれども、
 二つの高尚なる動機の全軀を貫けるありてさすがに詩趣の棄てがたきものある
 を見る。其の一はクリームヒルド姫が變はらざる情操なり。姫はシューグフリー
 ドが美貌、愛情のいみじき外に超自然の不可思議力あるを見、またハークン等の如
 き尋常武夫の全軀にも換ふべからざる價值あるを認めたり。かれは亡夫の爲め
 に生涯を抛ち其の誓を報いんが爲めには至親を滅し全國民を殺すことをたも辭

せざりき。縱令復讐以外に何等の高尚なる目的なかりきとするも此くの如き堅
 固なる情操は永く吾人の歎美を價すべし。其の二はハークン、リューテゲル等が狂
 ぐべからざる忠義心なり。ハークンのシューグフリードを殺し、や聊かも私慾を
 遂げんの意にはあらで、ひとへに女王の凌辱せられしを信じつればなりき。パー
 ガンデー人が夥多の凶兆に接せしにも關せずして深く敵地に入りしは其の行か
 ざるべからざる義務あるによりてなりき。リューテゲルの涙を揮うてハークン等を
 撃ちしまた然り。縱令彼等の赤心は其の用を誤りきとするも、其の高く固き忠義
 心は長へに賞歎を博すべき價值あらん。ハークンはパーガンデー女王に對する
 義務としてシューグフリードを殺さざるべからず而してクリームヒルド姫が亡夫
 に對する情操は遂にハークンを殺さずして止むこと能はず、かくしてハークン、リ
 ューテゲル、一切のパーカンデー人及びグンテル王すらも遂に此の葛藤を和ぐるの
 犠牲に供せられき。美德の衝突因をなして慘憺たる大破裂を成す、優に好悲劇た
 るに足れりといふべし。要するに『ニーベルンゲンリード』の價值は其が悲劇的結
 構の壯大奇抜なるに在り、事件人性の發展の秩然たるに在り、當時の獨逸國民延い

ては獨逸國民全般の特性の現れたるに在り。此の叙事詩の上代に存せしを見て近世の獨逸人が沙翁のハムレットを絶賞するに思ひ及はば獨逸國民性の片影を窺ふを得んか。『ニーベルンゲンリード』は史的價值よりいふも文學的價值より見るも慥かに稱するに足るべきものなり。

「戀愛は常に悲哀に終るとは『ニーベルンゲンリード』の根本思想にして、變はらざる戀愛は遂に報いらるとは『グッドルン』に貫通せる觀念なり。家庭的趣味、婦人に對する尊敬、全篇を貫ける一致、文體に於ける進歩等によりて案するに『グッドルン』は十三世紀の半ば以後に成れるものにして材を古代の說話に取れるが如し。(シエラにすれば、グッドルンには一千二百年の頃、時の藻才ある一詩人の手に成りしものにして爾後幾多の詩人に加筆せられて今日に傳はれり。而して多くの批評家は此の追加せられたる部分を取り去ることに力めたりしが、其中最も有名なるをカルル・ミューレンホッフ Karl Müllenhoff とす。)全篇三部分に別かれたれ、而して最後の一卷のみ女主人公グッドルンの事に關せり。『グッドルン』の要はいはく、

デンマルク王ヘッテル、愛蘭王ハーゲンの女ヒルデミ希して一女を娶ぐ、グッドルン姫といふ。シーランドのヘルボッヒに許婚せしが、海賊を業とせるノルマンディー王ハルトムート父ヘッテルの不在に乗じて姫を奪ひノルマンディーに連れ行きぬ。(初めヘッテル、

ヘルボッヒの求婚を拒みたりしが、ヘルボッヒ怒りて戦を宣するに及(ヘッテル兵を率ゐてグッドルン姫彼れが雄壯なる武者振に感して遂に其の意に従ひき)ヘッテル兵を率ゐて之れを追ひしが、烈しき戦ひの後遂にハルトムートの父ルドガッヒの手に罹りて、ギョルムンサントの濱に墜れ、從者また概れ死す。姫携へられてハルトムートの家に行きしが、固く彼れが求めを拒みて婚を許さず、彼れはた痛くも強ひずして其承諾せん日を待ちぬ。さるほどにハルトムートの母怒りて姫を匿して婢となし、洗衣の業に携はらしめしが、姫怒りて之れに従ふ。かくて三月の或朝、姫他の婢と共に海岸に衣を干しつゝありし時、恰も姫を救はんとしてヘルボッヒ、其兄オルトギン及び數多の將士來たり。ヘルボッヒ密に其の妻を奪ひ去るを卑怯なりとし、ハルトムート等とバルチック海濱に戦ひ、ルドガッヒを殺し、ハルトムートを虜にして、芽出度グッドルンと婚す。

『グッドルン』の旨味は其の意匠結構にあるよりも寧ろ場面の新奇なると巧に人物を描けるどに在り、詩中に現れたる戀愛の觀念の如きは後世の詩歌傳奇に現れたるものよりも高上清潔にしてヘルボッヒ、グッドルンの交情の如きは情慾によりてよりも寧ろ誠實、節操、忍耐によりて繋かれたり、而して詩中に現れたる習俗、感情の如き『ニーベルンゲンリード』の比して著く武士的また基督教のとなれるを見る。人物性格の發展はた、全躰より見て明瞭に且つ一致を保てり。

『ニーベルンゲンリード』及び『グッドルン』の外幾多の國民的物語の十三世紀に成れりと

を降しきものあれを深く注意するに足るものはなく、到底以上の二大叙事詩に比すべくもあらず。其の主要なる一二を擧ぐれば『ビテロルフ及びティートリープ』(“Biterolf und Dietlieb”)『ローゼンガルトン』(“Rosengarten”)『ホックンリート』(“Hohenlied”)『ローテル王』(“König Rother”)『オルトニート』(“Ortnit”)『フッンマイヤー』(“Hugd ietich”)『ザンマイヤー』(“Wolfdietrich”)等にして此等何れも吾人の研究に値するものなけれど、一度は大に歓迎せられしものにして其の一部は十五、六世紀間に出版せられし『ヘルデンブーヒ』(Heldenbuch 豪傑譚の義)に載せられたり。

上に述べたる二つの國民的叙事詩は本國の事柄を叙せるものなるを以て特に注意を惹くべき價值あれども十三世紀に於ける獨逸文學の特質を明かにせんには更にアーサー王に關する古話を材とせる武俠傳奇及び他の詩歌物語等をも觀察せざるべからず。中に就きて特に注意すべきは『バルンツィファン』(“Parzival”)及び『トリスタン』(“Tristan”)なり。『バルンツィファン』

基督が其の弟子と最後の晩餐に用ひし器は金色の寶石もて作れるものにてグラル(聖餐器)と名づけられ、死を起し病を癒やす靈驗ありと傳へられたり。また此の器を保

護するこゝは人間最高の光榮にて赤心よりの國侮と謙遜とのみ此の榮耀に堪ふべしとせられたりしが、アリマタヤのヨセフを護りて以來之れに次ぐべき人なく、終にバルツィファルの祖ティトロール之れを保護することゝなれり。バルツィファル幼にして父を失ひ母の手に育てられしが母は彼れに世を知らしめずして清淨なる生涯を送らせんとて人里遠き山林に隠れ住みしを、稚き時は、よく其の望みに添ふべう見えしが或日林中にて三人の武士に遇ひて知らざりし浮世の榮華を耳にし遂に伴はれてアーサー王の朝に往きぬ。彼れ茲に教育せられて拔群の武士となり功名漸く高かりしが胸中常に安んぜざる所ありて竟にそこもなき旅路に上りき。長き漫遊の後或夕つ方山ふところの湖畔に至り、漁夫に途を問ひて山上の城中に行き宿りを請へるに厚く款待せられて茲に怪しき儀式を見たり。廣き殿上に四百の武士ありて王を護衛し、盛裝せる數多の少女銀燭を持ちて玉座近く侍りしが、最後に麗色威嚴共に並びなき少女聖餐器を捧げ來て王の前に置きぬ。されど王は恭しく打ながめしのみそを味ふべからざる運命を享けたりき。王は傷を受けたりとおほしく、衰服せる侍従が鮮血滴れる鎗(王の傷を受けし)を持ち來たりし時一座の者皆首を垂れて哀を表せり。また室の彼方には白髮の老翁の死に垂れんとして床上に横はれるあり。バルツィファル驚き怪れども其故を問はず、王彼れを玉座近く招き、王權を讓る暗示として寶劍を與へたれど彼れ遂に一事をも問はざりき。翌朝暇を告げて歸れるに門卒其の前夜間を發せざりしを責め、途上また一婦人の同卜く儀式の意義を尋れざりしを咎むるにあひ驚きて急ぎアーサー王

がナンテの城に歸りしが、ケラル城より使者來たりて公衆の前にバルツィファルが不義不信を罵りしかば彼れ遂にナンテ城を辭して再び漫遊の途に上れり。かくて彼れは數年間數多の危險を冒せる後、胸中不安の情尙ほ去らず、今は神をも天道をも信せざるに至りしが一日(Good Friday)彼れも同ト家系に屬する隱者に遇ひしに、驛しく先きの怪しき儀式に就きて彼れに教へ、負傷せし王は肉慾に墮落して聖職に堪へざるに至れるにて、汝の叔父我が弟なり、ケラル盃を捧げし王女は汝が母の妹、白髮の老人は汝が祖、ティヴィレルにて切に汝が到らん日を待てり、告げぬ。其の後バルツィファルは多くの艱難を冒し、印度の異教徒と戦ひて其の王ファイレンフイツに勝ち二人相携へてケラル城に至り、バルツィファルは王冠を戴きてケラル盃保護の職に就き、ファイレンフイツはケラルを捧げし王女を戀ひ遂に相婚して印度に歸りぬ。云々

『バルツィファル』は材をアールサー王及びケラルの二つの古話に取れるもの、中世紀に於ける最大詩人の一人、ゲルフラムフォン、エッシュエンベーン(Wolfram von Eschenbach)十二世紀より十三世紀にかけて生活せり(の作にして『トリスタン』(トリスタン及びゾールト)の戀愛を描けるもの、完成するに至らずして著者逝りき)はゲルフラムの敵ゴットフリートフォン、ストラスマルク(Gottfried von Strassburg)ゲルフラムと同時代人の作なり。思ふに件の二作ばかり其の性質の相反せるものはあらじ、『バルツィ

ファル』には道義的熱誠、充ち満ちて往々禁欲主義に近つかんとし、『トリスタン』は讀者を喜はしむれども其の描く所はあくまでも浮世的なり。前者は人生を以て修養の場所となし、後者は之れを嬉笑の樂地となす、前者は欲を絶ち俗を超して聖境に至らんことを勧め、後者は俗と共に彼を揚げて情慾の誘致に従はしむ。音作の上に見はれたる差異のみならず、彼等は各、其の主義を異にし、ゴットフリートはゲルフラムを嘲りて、彼れは傳奇の名の下に註解説明を要する書をもつと云へりき。蓋し作意の高尙にして筆致の嚴かなるは『バルツィファル』の賞せらるべき點なれども、其が各部の調和を欠きて作者が眞意の明かならざるものあるが如きは、其の欠點なりと云はざるべからず。其が描く所の人物多くは譬喩にして其の裡には深き第二の意義の含まるゝある(例へばケラルを捧げし王女は、基督教の精神を表はし、印度の王は異教徒を表はし而して彼れが王女を愛せるは眞信仰の勝利を表はす)にも拘はらず、往々件の本義を破るべき部分の存するが如きは是れなり。『トリスタン』は能く此の弊を脱し、脚色明瞭、文章流麗にして、人物性格の發展はた自然なれども、その骨髄を成す所の戀愛は利己背義、肉慾的にして、讀者の眉を顰めしむるも

の少なからず。要するに二者の長短は相半ばせりとすべし。

上に述べたる二作者と時を同じうしてハルトマン・フォン・オエ(Hartmann von Aue) 出で『イザイム』(“Iwein”)『エルク』(“Erk”)『グレゴリウス』(“Gregorius”)等々のせしが 其の作の最も有名なるを『デル・アルメ・ハインリッヒ』(“Der arme Heinrich”)とす

シユアピアにハインリッヒといふ徳望ある富豪住みしが癩を患ひてサレルノの醫院に行 けるに、汝は癒え得れども癒ゆるを得ず。學問上汝を癒えしむべき薬品は存すれども 其の薬品は得ること能はず、また得べからざるものなればなり。若し係累なき小女の 進みて汝が爲めに死するあらば汝は癒ゆるを得べし云々との言に絶望し歸りて家事 を人に任せ自らは其の小作人なる一貧家に退きて病を養ひしが、僅に十二歳なる此の 家の少女が命を捨て彼れを救はんとして遂に父母に説き、固く辭むハインリッヒをも従は しめ、四人相携へてサレルノに行きしが、醫士の刀を取りて腹を露はしたる少女の胸 に擬せる時、ハインリッヒは胸に充つる側隱の情に私慾の念忽ち失せて醫士の手を止め 四人相共に歸る途上、不思議にも全く癒え、歸りて少女の父母に多くの財産を與へ、其の 身は少女と婚しき。云々

此の物語は教訓的にして趣構亦頗る新奇なれども、脚色不自然にして餘りに人工 らしく人物性情の發展はた穩かならず。批評家の之れを稱揚せるも少なからぬ

「其の作意は善し而も巧妙なる手腕すら一通りにだに描き得ざる難題目を取れる なり」と云へるゲーテ等が説を正當なりとす。

此の他カーロルギンツァン朝の古話に基けるものにてはコンラツツ(Konrad)が『ロー ランツリーク』(“Rolandslied”)コンラツツ・フォン・クニツ(Konrad Fleck)が『ノローン及びブランシヒ フルン』の戀愛譚(“Flore und Blanschefur”)あり、他の古話に據れるものにはラムブレン ロフ(Lamprecht)が『歴山王』(“Lamprecht”)ハインリッヒ・フォン・ヘンリッヒ(Heinrich von Veldeke)が『ヒナイ ト』(“Aeneid”)或は“Eneid”)ハインリッヒ・フォン・ヘンリッヒ(Konrad von Würzburg)が『イロイ 戦争』及び『ヘルテチ・シムル』(“Goldene Schmiede”)等あり、基督教或は寺院の古話に よれるものには、ヴェルナー(Werner)が『聖母マリア傳』(“Die Marienlegende”)コンラツツ・フォン・ヘンリッヒが『アレクシウス』(“Alexius”)『シルヴェスター』(“Silvester”)十二世紀に出でたる大僧 正アンノの頌徳詩、及び『カイゼルクロニク』(“Kaiserchronik”)等あり、また人口に 膾炙せる物語にては『サロモン及びモロフ』(“Salomon und Morolf”)とす、諷刺滑 稽物語、ヴェルナー・フォン・ヘンリッヒが『ヴェルナーの庭園』(“Der Garten”)が『マイヘル・ヘンリッヒ ンロフ』(“Meier Helmbrecht”)『ヒルメーリッヒ』(“Der Stricker”)アーミン・フォン・ヘンリッヒ

事をものせるものといふ滑稽物語、及び『ラインハルト、ツィンク』(“Reinhart Fuchs” 狐狼物語)等あれど今は之れを詳説せず。

第三期の文學に就きて尙ほ一の看過すべからざるは、ミンネゼンゲル(Minnesänger) 即ち戀愛の詩(Minnelieder)を自ら作り自ら歌ひし者是れなり。當時ミンネゼンゲルと稱せられたる一種の詩人は自ら歌を作り自ら之れを歌ひて諸方に歴遊せしが、其の歌ふ所多く戀愛に關せしを以て四時に於ける天地の現象及び道德、政治、宗教に關する抒情歌をも總稱してミンネリイデル、といひ之れを歌ふ者をミンネゼンゲルと稱するに至りき。ミンネは戀愛の義なり。彼等の吟詠したる詩歌數多ある中其の主なるは概ね所謂『巴里寫本』の中に收められたり。ミンネゼンゲルの中最も大なる者をヴルテルフォンデルフォーゲルヴィエテ(Walther von der Vogelweide)とす。彼れは外相の美を斥けて内心の美を稱し、虚儀を卑しみて摯實なる信仰を尊べり。(彼れはエルサレム安慰を得んが爲めなり云ひ、士民の十字軍に義捐するの不便に詣つるは衷心の可なるを説き、また大膽に法王が政治に容喙するに反對しき。)彼れが作け其の詞句の流麗高雅なるのみならず、思想の廣き道念の高き一世に絶せりと稱せらる。其の詩の教訓的趣味を帯びたる點に於いてヴルテルの徒と云

るべきはデルマルネル、プロイテル、エルンヘル、ラインマル、フォンツェーテル、ヴルテルが來世を尊び現世を卑しめるに反對して固く現世の尊ぶべくまた世界を蔑視するの不敬なるを主張せしフリートリッヒ、フォン、ソネンベルヒ、及びエーベルハルト、フォン、ザックス等なり。又ヴルテルと流派を異にせる者にて有名なるはウルリッヒ、フォン、リヒテンシュタイン(Ulrich von Lichtenstein)。其の作に彼れの自叙傳とも見るべき“Freundienst”ありニタルト、フォン、ロイエンタール(Nilhart von Renenthal)ハイムリッヒ、フ라우エンロフ、レーゲンボーゲン、農夫の外凡べての社會を攻撃せることに於いて有名なるフリーゴ、フォン、トリムブルク(Hugo von Trimburg)トヤマン、ツィンク、レ、ウルリッヒ、ポイチル等なり。

第二期の文學につき尙ほ一の看過すべからざるは散文なり。但し當時の散文は其の數少なけれども頗る趣味ありて且つ直接に時代を反映せるものなるが故に當時の獨逸國民を知らんと欲する者は必ず之れに頼らざるべからず。當時の散文々學の主なるものをフランススカン派の僧徒ブルードル、ベルトルト(Berthold Teich、一二二〇—三〇間に生る)の説教及び有名なる神秘家ハインリッヒ、エックハルト

(Heinrich Eckhart 十三世紀の半頃に生れ一三二九以前に死す)の思索的文章とす。蓋し當時法を述べ道を説ける幾多の徒之れを大別して浮世を其のまゝに忍べる者、そを厭離せる者、及び世を高上なる生活に導かんとせる者の三種となすことを得べし。而してベルトルト及びエックハルトは共に第三種に屬して鋭意世間の道徳を進めんとせる者なるがゆゑに其の懷抱と實世間と兩々相對して其の文辭自ら光彩あり當時の社會はたありく其の中に現れたり。蓋しベルトルトとエックハルトとは哲學、宗教、文學の諸方面に於いて細敘すべき價值ある者なれども、本略史の講ずべき際にあらねば略しつ。

第三期 (一三五〇—一五二五)

夢幻的なりし第二期の文學は未だ隆盛を極むるに至らずしてはや已に衰頽の運に向かひき。蓋し當代文學の特質は一言夢幻的傳奇的ロマンチックなりといふべけれど、其の夢幻的傳奇的なる裏には深く大不平大不満足の潜みなるものありき。精神と肉體、理想と運命、宗教と日常の生活、此等二元の衝突は其の影を潜めながらあらゆる當代の文學に行き亘れり。所謂教訓詩、諷刺詩及びエックハルト等が散文、文學は

ふまでもなく國民的敘事詩より延いて材を他國に取れる傳奇物語に至るまで、この面影の顯れざるはなかりき。而して此の不平不満足は第二期の末に至りて尙調和融合せられず、更に明かなる形を取りて第三期の文學に現れたり。但し不平の宿れると二元の衝突の行き亘れるとに於いては第二期と第三期と其の傾向略々相同じ、唯其の異なる所は後者は前者に比して稍明かなるにあり、前者に於いては深く其の影を藏したる暗潮が後者に至りて其の聲を揚げ、其の形を現したるにあり。されど第三期に於ける不平衡の發現も要するに茫漠たる若しくは粗暴なる發現たるに止まりて未だ明瞭確實に其の形を現すに至らざりき。件の大不平大不満足の明瞭に大膽に發表せられたるを第四期に於ける宗教革命とす。第一期より第四期に至る思潮の大勢を略言すれば第一期は粗樸強固なる自然兒が基督教の文化に觸れておひく其の野蠻的習俗を脱する時なり。第二期は舊來粗樸の状態を脱して人心漸く外に向かひながら、唯基督教の文化に酔ひたるに止まりて未だ自らを知り他を解するに至らず、従ひておぼろなる調和は成りながら、やがて内外其他の衝突の起こらんとして猶ほ明らかになり起こり敢えざりし時なり。

『ニールンゲン』、『グートルン』及び『バルツォン』等が基督教的習俗の外被を纏ひながら裏に殺伐なる氣風を藏し此等の調和せんとして未だ調和せざる趣あるもの、一に此の思潮の行きわたれるに因る。第三期は苟且なる調和遂に成らず潜みたりし不平衡漸く其の影を現し其の聲を大にしながらなほ所謂不平衡の起因性質歸着等を明かにするに至らざりし時なり。此の故に當期に於ける文學は教訓詩諷刺詩より延いては一切の叙事詩、叙情詩、劇詩に至るまで唯大膽に嘲罵し若しくは諷刺するのみにて其の嘲罵諷刺する所以明かならざりき。第四期は第二期に於いて其の影を潜め、第三期に於いて漸次に其の聲を高め來たれる不平衝突の明かに其の影を現し明かに其の性質歸着を示したる時代なり。無心なる調和其の緒を解き衝突其の極に達して茲に漸く自家を認知しそめたる獨逸國民が更に堅固なる地盤に立脚して他國の文學を咀嚼し遂に燦爛たる國民文學を成して世界の文壇に君臨するに至るといふを第五期以下獨逸文學の消長とす。一千三百五十年より一千五百二十五年に至る間は一般の歴史に於いては新世界の發見、印刷機の發明、文藝の復興、大學の設立等數多の興味ある出來事に富める時

代なれど、獨逸の文界は文學的價値の邊より見れば一言暗黒といふも不可なき有様なりき。當代文學の最も著き特質は諷刺的と云はんよりは寧ろ嘲罵冷笑的なると是れなり、是れ要するに前に所謂不平衡衝突が淺はかなる形を取りて外面的嘲罵に現れたるに外ならず(社會の改良の深く人心の根柢より始めざるべし)當時の一人が其の著の中に「鄙陋粗野は方今世人の神聖視する所なり。最も目やすからぬ諷刺をもし得る者(特に眞面目なる題目につきては最も大なる天才として尊はるといへるもの實に當代の眞狀を穿てるものなり)。

當時の文學に就きて先づ述ぶべきは「マイステル、ゼンゲル」のとなり。當時大市府に住する人民は封建貴族の暴戾を防がんが爲め、及び商業保護の爲めに商會を組織せしが、文學また其の中に保護せられて靴工、織工、仕立師、陶工等何れも詩歌を弄せる傍、時日場所を定めて相會し各自の作を誦し、審判者を設けて之れを批評せしめ、其の尤なる者一人を撰びて「マイステル、ゼンゲル」最も秀でたる歌人の義と呼び之れに花冠を贈るを例とし、其の撰に中たるを最大の名譽としたりき。此の種の吟社はウルム、ニールンベルク等幾多の市府に設けられ、後者は一千七百七十年まで

繼續しき當時有名の詩人亦ちほむね籍を此に置けりき。當時の叙事詩、抒情詩にて茲に其の名を掲ぐべきは、前にも云へる『狐狼物語』、イシシミリアン帝の案に據りて待臣のものせし『トイヘルダンク』、『Theuerdank』、『ライムスチーニヒ』、『Weisskunig』、『ヘルマン、ンギン、ザンゼンハイト』(Hermann von Sachsenheim. 一四五八死)が『マイ、メーリッ』、『Die Morin』及びオスワルト、ンギンザルケンメクティン(Oswald von Wolkenstein)の抒情詩等、また時事を記し、點に於いて注意すべきは、ミンヘル、スハイト (Michael Beheim. 一四七四死)が『ブロン、ファン、チン、ギーネルン』、『Buch von den Wienern』、『スロー、テハ、チル、ス、ハン、ギルト』(Peter der Suchenwirt) が『ホー、ン、ン、ノ、ム、ン』、『Ehrenreden』、『ノ、ム、イ、ム、ー、ベル』(Veit Weber)が『ムル、テン、戦争』及び其の戦争を詠せる歌等、劇詩にては、『ムラウ、エ、マ、テン』、『Flan Juten』、『ノ、ム、スト、ナ、ン、ツ、ム、ロー、ン』、『Fastnachtspiele』等、翻譯小説にては、『七賢人』及び『ゲ、メ、ス、タ、ロ、マ、ノ、ノ、ム』、『Gesta Romanorum』等あり。されど嚴に謂ふ文學的考覈を價するものとは殆どなし。

諷刺滑稽物語が第二期文學の骨髓を成すことは已に述べたり。ヨハン、ネ、ス、マ、ウ、リといふ僧侶が一千五百二十二年に出版せし『諷刺滑稽物語集』の忽にして三十版を重ねたる、セ、メ、ス、チ、ン、プ、ラ、ントの『愚物の船』が一千四百九十四年より一千五百二十二年に至る迄に十版を重ねたる、若しくは當時の僧侶が其の説教のうち世間の僧侶に對する嘲罵をまじへたるなど、以て當代思想の一斑を窺ふに足るべし。

當時の諷刺物語の作家の中に就きて最も著名なるをセ、メ、ス、チ、ン、プ、ラ、ント(Sebastian Brandt. 一四五八——一五二二)及びト、マ、ス、ム、ル、ネ、ル(Thomas Murner. 一四七五に生れ少しく一五三七に先たちて死す)とす。有名なる説教者がイ、ン、ル(Dr. Geilar. 一四四五——一五一〇)がフ、ラ、ント等の所作を取り入れてものせる諷刺的説教、亦時代の反映として注意するに足るものなり。フ、ラ、ントが特色とも云ふべく、また彼れが當代に持て囃されたる所以とも見るべきは其の諷刺の洒々として厭味なき所にありき。其の有名なる『ダ、ス、ナ、ル、ン、シ、フ』、『Das Narrenschiff』。『愚物の船の義は世上の癡愚を百十種に別かちて描き出だせるものにして、彼れは自らをば、讀み且つ解し得るよりも多くの書籍を購ふ愚物の中に列せり。此の書は、各部の調和を缺きて一貫の趣構なく、諷刺はた淺膚、文學上の著作としては本國より價值あるものにあらざ。彼れは當代亂離の狀を見ていたく浮世をはかなみ、また一千五百二

十九年世界は再度の大洪水の爲めに滅すべしといふ流言を信じて遂に憫むべき最後を遂げきといふ。トマス、ムルネルは諸邦を遊歴し休む時なき争論に生涯を終へたる僧侶にして當時に於ける不平、不満足の權化とも見るべき者なり。其の嘲罵の激烈にして廣く凡べての階級に及びしや僧正、僧侶、改革者、貴族、狀師、農商等何れも彼れの筆頭に弄せられざるなく、彼れと主義を同じうせる者も猶ほ其の熱罵を免るゝこと能はざりき。彼れルーテルに對して烈しき攻撃を爲したる後、英王ヘンリー八世に招がれ英國に行きて『虚誕者は英王かたルーテルか』をものし、後ストラスマルグに歸りて彼れが激烈なる嘲罵を印刷する出版者なかりし爲め自ら活版所を起し、がやがて暴徒の爲めに破壊せられきといふ。彼れが作の有名なるは『アイ、ナルレンベシ、ギールンク』(『Die Narrenbeschwörung. 愚物降伏の義』)、『アイ、シムメンマンント』(『Die Schelmzunft』)及び『エクトル、ムルネルに降伏せられたるルーテル的大愚物』等にして此等は當代を知らんとする者の必ず一讀すべきものなり。以上の外に其の名を掲ぐべき滑稽物としては唯『アイ、シルドビュルケン』(『Die Schildbürger』)及び『ムルネルの出版せる』(『Oehlenschläger』)、『エンレンスピゲル』(『Eulenspiegel』)

等あるのみ。當時の嘲罵滑稽は要するに皮相的なり、熱あれども光薄く、烈しけれども根據弱し。所謂大不平は當代に於いて未だ明かに其の形を現さなければなり。』尙ほ一の注意すべきは編年記録なり。當時の編年記録家の中最も早く出で且つ最も有名なるをストラスマルグの僧侶フリッチェンローゼネン(Fritzsche Closenier. 一三八四死)とす。彼れが簡潔なる散文もて當時の主要なる出來事に就きてものせし記事は、其がまばくの地震に關する件を除きては、頗る信憑するに足るものゝ如し、中につき、黒死病の流行、猶太人の處刑、フラマエルランツ(鞭教徒)に關する記事最も趣味ありと稱せらる。ペーテル、エッシュンローヘン(Peter Eschenloer)が『ウムブルク編年誌』、『ドレスラウ史』著者不詳の『コローン聖府誌』つぎて注意すべし。ソロート、ホルト、シルリング(Diebold Schilling. 一四八五死)及びルーツェルネのディ、ボルト、シルリング(一五二〇の頃死)は當時瑞典史家の巨擘たり。ユステインゲル(justingier)、フリックハルト(Frickhard)、メルキオラ、ヌス(Melchior Russ)、ヘーテルマン、エーテリマン(Petermann Esterlin)等また編年記録家として名ありき。

最後に述べべきを神秘家の散文とす。此等冥想家の論述の特に注意せらるべき

は、彼等が所謂改革事業の、深く人心の奥底殊に改革者自身の心底より始めざるべからざることを知りたる、彼等が言論の外面的ならずして真情より發露せる、及び彼等が散文の進歩せる等の數點に在り。當時の神秘家の巨擘を一千二百九十年ストラスブルクに生れて一千二百九十年に逝りしドミニカン派の僧、エックハルトの弟子ヨハンネス、タウレル(Johannes Tauler)とす。彼れ深く哲學神學を攻め、著述に説教に論述する所頗る多く、聲名夙に遠近に高かりしか、一日パーセルのニコラウスに其の説教の價值なく、其の神學に關する知識の單に知力的にして精神的ならざることを誡められ、教壇を退きて言論を廢すること二年、かくて再び教界に現るゝや、彼れが神秘説は燃ゆるが如き熱誠と相和して、其の深き思想、切なる感情は一世を風靡しきといふ。數多き説教集の外、彼れが著述の主なるものは『謙和の徳に於ける基督の模倣』(Die Nachfolge des armen Lebens Christi) 及び『チルマンランクフルラ、ン』(Der Franckforter) ノーテンが後に“Eyn deutsch Theologia.” の名を與へしもの等なり。タウレルに次ぎ、茲に其の名を掲ぐべきは彼れが友ハインリヒ、フン、ネー、ル、ドリンゲン(Heinrich von Nördlingen)、ハイム、ロ、ス、マン、ト、イ、ゼ(Heinrich der Seuse) 及びタウ

レルの友にして『マス、ブ、フ、ン、フ、ン、デ、ン、ノ、イ、ン、フ、ル、セ、ン』(Das Buch von den neun Felsen.) 九巖の書の義の著者ル、マン、メルズ、ギ、ン(Rulman Merswin) 等なり。此等神秘家が當時の國民に及ぼせし影響甚だ著大にして、宗教改革の後長く其の餘波を止めたりき。

さきに所謂二元の衝突は當期の末つ方に至りて益々著くなりき。僧侶と俗人、貴族と平民、學者と黔首、此等は皆其の類階を異にせるのみならずして、今や全く相分離するに至れり。かくて第四期は胚胎しぬ。

第四期 (一五二五——一六二五)

予はさきに不平不満足の行き亘れるは中世紀の特質なりと云へりき。されどこは上層の社會、換言すれば社會の耳目たる人々に就きていへるのみ、下層凡俗の社會に於いては此等の不平衝突に氣つかずして、醉生夢死せる者ありしといふまでもなし。さきにも云へる如く、第四期は一面より見れば所謂二元の衝突、其の當に到るべき極に達して、大不平の大膽に發表せられし時、他面より見れば衝突の餘調和の漸く成らんとして、之れに關する論議に汲々たりし時なり。蓋し十六世紀に

於ける論争は神學教會にのみ關せるものに非ず、其の改革的潮流はた決して不平僧侶の熱誠によりてのみ成れるものに非ず、思潮の大勢より觀る時は宗教改革の如き本より當世に漲れる大流の一波たるに過ぎざるなり。此の思想の充ち満ちて破壊と建設との間に橋梁をなしたること、是れ獨逸の十六世紀を大ならしむる所以の異彩なり。所謂衝突(破壊)調和(建設)とは何の謂ひぞ。曰はく宗教改革は舊來の形式的束縛を破壊して自由思想の礎を成せるものなり。ルーテルが聖書の翻譯は學俗二語の對立を破りて新高地獨逸語なる普通語を成立せしめたり。其の他文學が寺院、宮廷、貴族の手を離れて大學の手に移れる、モデル、シナイ、ソール、ラッス、ト等のユートピアを畫せる學者ありし、若しくは神學者、宗教家の盛なる論議、等何れか之れを證せざるものぞ。然れども當時は要するに衝突未だ終らずして建設漸く緒に就かんとせる時、故を以て其の論議畫策するや大膽に熱誠なれども精細緻密は之れを缺けり。従ひて當時の文學は教學に關する論其の多きに居り、純粹に詩歌の範圍に屬するものとても頌歌の如きもの、若しくは宗教的臭味を帶べるもの多かりき。而して此等何れも真情流露の掬すべきものありながら表現の法甚

だ粗笨にして質形と伴はざりき。

當期の文學に就き、主として述ぶべきは宗教改革、ルーテルが聖書の翻譯(即ち新高地獨逸語)の成立、神學者三派の論著、ルーテル風の頌歌、及びハンス、ザックス等の諷刺詩、是れなり。而して此等は何れも宗教改革を中心として成れりといふを得べく、之れを大にしては十六世紀思想の所産なりしこと勿論なり。

十六世紀の標章たる宗教革命の大事業は此の略史に於いても細叙すべき價值あるものなれども普通の列國史に詳しければ略しつ。さて一千四百八十三年十一月十日アイズレーベンに生れて一千五百四十六年二月十八日に逝りし宗教改革家マルティン、ルーテル(Martin Luther)が獨逸國文學にいたし、大功二あり。其の聖書翻譯によりて新高地獨逸語を文學上の用語たらしめしこと、及び新に高雅雄麗なる頌歌をものせしこと、是れなり。彼れと時を同じうしてウルリッヒ、フォン、フッテン(Ulrich von Hutten、一四八八——一五二三)あり。愛國の心深く、獨逸國民をして政治上、宗教上、羅馬の羈絆を脱せしめ、また諸侯伯の跳梁を抑えて其の獨立を全うせしめんとしき。彼れ初めルーテルの改革運動を見て單に僧侶等が神學上の小論

争に過ぎずと爲し、が已にして此の運動の國民の獨立に大關係あるを見、在來用ひ來たりし拉丁語を捨て新に獨逸語を學び大に力をルイテルに添へんとしき。されど其の運動の餘りに激烈なりしと、劍によりてルイテルが言語によれるに反し、改革を遂げんとせしとにより、遂に異教徒、反逆人として國外に逐ひ拂はれたり。是れよりさきフッテン、獨逸兩語の分立(十六世紀に野卑なるまで獨逸語を用ひて二者並立せる)が大に文化の普及に害あるを見、獨逸語を以て書を著して一般の人民に讀ましめんと企てしが遂に成功するに至らざりき。ルイテル一千五百二十一年の冬聖書翻譯の稿を起こして同二十二年新約書の譯を終へ、後更に舊約書に着手し一千五百三十四年遂に聖書全部を譯了して之れを公にせり。ルイテルが此の大譯述を爲すや、高きと、低きと、學者と俗人との凡べてをして了解せしめんことを目的としき。而して其の世に出づるや直に人民の書として重んぜられ、一千五百五十八年に至るまで聖書全部は三十八版を、新約書は七十二版を重ねるに至りき。かくて新高地獨逸語は漸次に文學上の用語とせらるゝに至りぬ。

次に述ぶべきは、神學者の論著なり。當時の神學者は其の主義の異なるに従ひ

て之れを三種に區別するを得べし。直受派、正統派、及び自由討究派、是れなり。直受派とは聖書其のまゝを信じて、宗教の極致は聖書を基として成せる教義の組織にも存せず、また人間理性の指示する所にも存せずと説けるもの、羅馬加持力教會の學者之れに屬す。正統派とは之れに對して起これるルイテル等の一派にして聖書の中に明かに現れたりと自から信ずる教義に依れるもの、彼等の中には聖書の解釋に於いて若しくは極致たる教義を選ふ點に於いてルイテルと意見を異にせるもあれど、其が宗教的立脚地の聖書以外に出でざるとに於いて其の主義を同じうせる者なり。自由討究派とは神秘家、ヴィゲルの徒、或は敬虔家パイイスマなど稱せらるる者にして一定の主義によりて一派を成せる者の謂ひには非ず、唯理性の指示する所に従ひて各自の信仰する所に赴くとに於いて其の見を同じうせる者を總稱せるなり。第一派の神學者等の著書には獨逸語を用ひたる者甚だ少なし。其の主なるはカニシウス(Canisius, 一五二一—一五九七)及び『獨逸神學』の著者ベルトルト(Bertold)等、第二派に屬する者の主要なるは教義の正統に關して久しくルイテルと争ひしウルリッヒ、フンク、及びウルリッヒ(Ulrich Zwingle, 一四八四—一五三一)及びルイテル等

なり。第三派に屬する者にて茲に其の名を掲ぐべきはヨージマンマテシウス(Johann Mathesius) ヨージマンマン(J. Arndt) ヨージマンマン(J. Agricola. 一四九二——一五六六) ルーテルの論敵『逆理』『俚諺集』『獨逸國民編年誌』等の著者にして論鋒の鋭利明晰なることによりて名ありしセバスタアン、フランメン(Sebastian Franck. 一五〇〇——一五四五)及び一千五百七十五年、シレツアなるアルトサイマンズルヒに生れ六百二十四年に死せし獨逸神秘派の泰斗ヤコブ、ボーム(Jacob Böhme)等なり。當時の歴史家には『マツリア編年誌』の著者ヨージマン、タルマイル(J. Turmain. 一四七七——一五三四) ヴァレリウス、アンシムス(Valerius Anshelm.) ヨーキテウス、チヤム(Aegidius Tschudi. 一五〇五——一五七二) ヨージマン、ケスレル(J. Kessler. 一五〇二——一五七四) ハインリッヒ、ブルリッゲン(Heinrich Bullinger. 一五〇四——一五七四) シリスタ、マン、ヘーレン(Christoph Lehmann. 一五六八——一六三三) ツァン、ハリアス、テオマン、ト(Zacharius Theobald. 一五八四——一六二七)等あり。

當代に於ける最も好き抒情詩は宗教に關せるものにして中に就きて最なるをルーテル風の頌歌とす。蓋しルーテルが當時會堂にて唱和する歌曲の組案なるを患ひ自ら一鉢を創して數十篇の頌歌をものせしを中心とし時の詩人の之れに倣へるを稱してルーテル風の頌歌とはいふなり。此等頌歌をものせる詩人の主なるはハッセル、スペラー、ファス(Paul Speratus) ニコラウス、デッ、ウス(Nicolaus Decius) ニクラス、ヘルマン(Niklas Hermann). ニコラウス、セルネッカー(Nicolaus Selnecker.) ヒリッ、ニコライ(Philipp Nicolai) 等にして、調の高雅なる、意の幽遠なる、及び熱誠の發露せる等の點に於いて今に至るまで内外に尊崇せらる。ルーテル時代の抒情詩と次期なる抒情詩との間に介して二者の橋梁を爲したるをケオルグ、ルードルフ、エックヘルリン(George Rudolf Weckherlin. 一五八四——一六五一)とす、彼れの詩は風調律格の優雅なる點に於いて第五期の詩人オピッツのに比せらる。また當時に行はれたる酒醜、軍事、狩獵に關する俗歌、及び歌謠、滑稽物語等は、おほむね『アムブラーゼル、リーデルブーン』(“Ambraser Liederbuch”)に收められたり。

當代の詩界に於ける精華として上はウルテルに比せられ、下はオピッツに比べらるゝを一千四百九十四年ニルンベルヒに生れ六十餘歳の高齡を以て逝りしハンス、ザックス(Hans Sachs)とす。彼れ靴工を業とし、傍ら文筆に従事して遂にマイステル、

マングルとなりしが、其の巧みに世態人情を寫せるや、野卑なる人生觀を有し、自負傲慢にして滑稽諷刺を好みし當代人民の習癖は、戯るれども卑しからず、鋭けれど毒なき彼れの筆によりて隈なく描き出だされたり。其の作る所、抒情詩、諷刺詩、劇詩、物語歌等合はせて六千餘篇、半ば滑稽諷刺的に、半ば教訓的なる物語歌最も傑出せりと稱せらる。『聖、ピーターと山羊』等最も名高し。彼れと時を同じうして物語歌を物せる詩人に、ブルクハルト、バルタース (Burkhard, Waldis. 一四八五—一五五八) エラヌムス、アルベルス (Erasmus Alberus. 一五〇〇—一五五三) 等あり。ルーラルの歿後、十六世紀の後半に及びては、爭論嘲罵の氣風やうやくに衰へ行きしが、エスイト派新に起こりて盛に新教を攻撃するに及び、諷刺家ヨーハン、フィッシャルト (Johann Fischart. 一五五〇—一五八九) 出で、烈しくエスイト派を嘲罵せり。當時に於ける嘲罵論争の痕跡は、時の劇詩特にニクラウス、マヌーエル (Niklaus Manuel. 一四八四—一五三〇) の劇詩に於いても見ることを得。

所謂宗教劇は此の期に至りて見るべき進歩を爲せり。其の作者の重なるは、ハッル、レーブマン (Paul Rehrum.) ヘルトロウメス、クリューゲル (Bartholomeus Krüger.) 等に於いてハンス、ザックスも亦此の種の劇をもつせり。また當時の劇界は英國喜劇家と稱せる輩によりて大に革新せられたり。ヤッコブ、アイレン (Jacob Ayler.) ハイブリヒ、ユリウッス (Heinrich Julius) 一五六四—一六一三) 等は所謂英國喜劇家の重なるものなり。

所謂「人民の書」の中最も廣く行はれたるは、一千五百八十七年に初めて出版せられたる『ファウスト物語』(Dr. Faustus.) なり。此の魔力的物語の大に行はれたるは、魔力を信し神秘を好める當代の人心に合ひたればなり。フィードマン (Wiedmann) 及びクラム (Wickram) 等の作亦人民の書として持て囃されき。

第五期(一六二五—一七二五)

第四期に於いて大膽に發表せられたる衝突は、其の末年に至りて益々其の勢を逞うし、更に第五期に入るに及びては、潰裂四出また收拾すべからざるに至りき。ルーテル派、カルヴィン派の意見の分離、南獨逸に於けるエスイト派の布教、諸侯伯の爭權、外邦の干涉等、此等宗教、政事、兵馬に關する烈しき争ひは、今や滔天の勢をなして獨

逸を襲へり。絶対権の下に統治せられたる舊組織は己に破れて跡なく宗教改革に次げる幾多の政治的運動は些の統一、自由を國民に與ふるの望みなし。是に於いてか多感なる若しくは思慮ある人々は時世の旦夕に濟ふべからざるを見、現世を厭離して希望を他界にかけ、志を政權兵馬に絶ち、退きて慰樂を文藝に求むるに至り、宗教家は讚美歌の製作に熱衷し、他の教育ある人は或は獨逸語學研究會を組織し或は文學會を設立して以て自ら慰めたり。是を以て當時の文學は時事に就きて多く語る所あらず、慘怛たる三十年戦争に就きてすら其の傳ふる所はなはだ稀なり。

當期の時事に就きて記臆すべきものは、三十年戦争にして當代の文學に就きて特に傳ふべきは諸文學會の組織第一シレツァ文學會の設立者オピッツの詩及び所謂敬虔家の讚美歌なり。

當時勃興せる文學會の重要なものを擧ぐれば曰はく、成果會、「ベクニッツ文學會」(一六四四設立)曰はく「第一シレツァ文學會」、「索遜文學會」、「ハムブルク文學會」、「第二シレツァ文學會」等是れなり。「第一シレツァ文學會」はオピッツ之れを率ひ、「索遜文學會」

はパウルフ・レミングによりて、「ハムブルク文學會」はツェーゼン(Zesen)によりて、「第二シレツァ文學會」はホフマンズブルダウによりて代表せられき。

作詩の術、聲調律格の研究はオピッツ及び其の徒弟等に革新せられて見るべき發達を爲しき。されど其の進歩は形式の上に止まり思想内容の點に於いては唯外國文學を模倣せしのみ。また彼等の作の最も見るべきは抒情詩、讚美歌等にして叙事詩に至りては一の注意すべきものなかりき。

當代第一の詩人として時の文學に大なる形式的進歩を與へたるを「第一シレツァ文學會」の創立者マルティン・オピッツ(Martin Opitz)とす。彼れは一千五百九十七年シレツァなるアンツラウに生まれ、一千六百三十九年疫に罹りて逝りき。彼れ一千六百十八年拉丁語にて『獨逸語に對する輕蔑に就きて』なる論文をもし、其の作詩に對する意見を公にせしが其の最も重要な著述を『獨逸詩書』とす。此の書は一千六百二十四年より同六十九年に至るまで九版を重ねて廣く世に行はれ、かくて漸次に韻文改良の實行せらるゝに至れり。蓋し是れより先き三百年このかた作詩術の衰頹せるや作者唯綴字を數ふるの外何事をも辨へざるに至りしが、オピッツ

は句格、韻律の重要なを説き兼ねて純良なる言語を選擇せざるべからざること
を論ぜり。彼れが學才の高くして特に拉丁韻文に秀でし技倆ありしより彼れの
論は大に學者の注意を惹き、茲に「第一シレツァ文學會」を組織して作詩の改良に従事
するに至りぬ。但しオピッツの文學にいたせる功績は唯詩形の上に在り詩の精神
内容の如何に就きては彼れ殆んど知る所なかりき。彼れが詩の整正優雅なれど
も摸倣たるを免れず、神來の聲にあらざして彫琢の結果なるか如き觀あるも自
然のことなり。其の抒情詩の尤なるものは彼れが『戰亂の間の慰藉』(一六三二)の中
に見ることを得、『心の平和』、『田園生活の頌』、『フェスノウス』(“Vesuvius.”)等また誦せ
らる。

オピッツの徒弟或は摸倣者の作に就きては特に述ふべきことなし。精神内容を外
にして聲律調格にのみかゝづらひし者が其の師以外に機軸を出だすこと能はざ
りしも本より其の所なり。批評家の彼等を評して「ハムブルクより伯林に至る垣
々たる大道もオピッツが摸倣者の作(の變化なき)に比すれば平かならず」と云へるも
のよく穿てり。

此の時代に用でたる詩の最良にしてまた最も確實なるは讚美歌特に敬虔家パイイスマの讚
美歌なり。オピッツの新詩法を用ひて抒情的熱誠を歌ひたる最初の作家はヨハン
テス、ヘーホルマン (Johannes Heermann. 一五八二—一六四七)にして其の詩はちほむね
宗教上の不満足を言表せるものなり。シモン、ダハ (Simon Dach. 一六〇五—一六五
九) ロバルト、ロバルテン (Robert Robertin. 一六〇〇—一四八) マンヤン、マヌ、グリュウ
(Andreas Gryphius. 一六一六生)及び其の子、クリスチャン、クリヒウス (Christian Gryphius.
一六四九—一七〇六)等また名あり。所謂バイテ、スツの開祖をヒリッ、プ、ヤー、コ、フ、ス
ペー、チ、ネ (Philip Jakob Spener.) 云々。ハイライ、スツは神秘派の一種にしてルーテル派
教會の正統派に對して、神秘派の羅馬教會に對するが如き位地を取れる者なり。
此の派に屬する頌詩作家の重なるはハッ、ル、フ、ン、ミン、グ (Paul Fleming. 一六〇九—一六
四〇) グルハルト、テル、ステー、ゲ、ム (Gerhard Tersteegen. 一六九七—一七六九)等なり。其
の他フリッ、ドリ、ホ、ス、ペー (Friedrich Spee. 一五九一—一六三五) グオル、グ、ノイ、マル、ク (Georg
Neumark. 一六二一—一六八一) ハッ、ル、ヤ、ン、ハ、ルト (Paul Gerhardt. 一六〇六—一七六) ヨ、ハ
ン、テ、ス、シ、ホ、ン、ン、ン (Johannes Scheffer. 一六二四—一七七七) クリ、ス、チ、ア、ン、ク、ノ、ル、フ、ン、ロ、ー

ゼンハルト (Christian Knorr von Rosenroth. 一六八九死) シュリヌス、クローマン (Quirinus Kuhlman. 一六五一生等) また頌詩作家として名あり。此等の頌詩作家は其の主張傾向、詩格等に於いて各、特種の趣を具へたれども、教會の意見を述ぶるよりは寧ろ個人的感情を抒べし點に於いて皆相一致せり。

先きに述べたるフレイミングとクリスマチヤン、ギンテル (Christian Günther 一六九五—一七二三)とは群作家の中に在りて少しく注意すべきものなり。フレイミングの詩は只管文學を弄せる當世作家の通弊を脱しおほむね時事に關係せるを以て他に見難き興味を有しギンテルの詩は概ね彼れが短生涯の中に起これる不幸を歌へるものにて讀む者をして涙を催さしむる妙なり。二者の間ヒリップ、フォン、ツェーゼン (Philipp von Zesen. 一六一九—八九) ロッパンハルステルンホル (P. Harsdörffer 一六〇七—六七) ベルトルト、ブロックス (Berthold Brookes. 一六八〇—一七四七) キンマン、フォン、ホッフマンズドルダウ (Hoffmann von Hoffmannswaldau 一六一八—七九) 等あれども茲に特筆するの要なし。

教訓詩は此の期に至りて益々無趣味のものとなりしが諷刺詩は其の材料選擇せられ記事の短縮せられたるが爲めに少しく發達せり。當時の教訓諷刺詩作家の中最も秀でたるをフリードリヒ、ロオガウ Friedrich Logau. 一六〇四—五五)とす。オピツに反抗せるハンス、ギルムゼン、ラウレンス (Hans Wilmsen Laurenceberg 一五九〇—一六二九) オピツの徒ヨアヒム、ラハール (Joachim Rachel 一六一八—六三) シリスマチヤン、ヴェルニッケ (U. Venicke. 一七二〇死) ベンヂヤミン、ノイキル (Benjamin Neukirch. 一六六五—一七二九) 等とす。劇詩また當期に於いて何等の進歩をも爲さざりき。當期の劇詩界はアンドレアス、グッヒウス (Andreas Gryphius. 其の著に "Papinian," "Karl Stuart," "Horribilicribrifax" 等あり) ダニエル、カスバル、フォン、ローヘンシタイン (Daniel Caspar von Lohenstein. 一六三五—八三) 及びクリスマチヤン、ワイゼ (Christain Weise. 一六四二—一七〇八) によりて代表せられたり。

翻りて當時の散文文學を見れば韻文に比して更に粗笨蕪雜なるものありて或は半ば外國の語を用ひ或は虚飾、術誇の風の行き亘れるなど、文學的價値の立場より見る時は本より顧みるに足るものなし。唯其の時事に關係して獨逸の十七世紀に於ける暗黒時代の影を寫せるを以て、少しく文學史家の注意を惹くあるのみ。

散文小説にて注意すべきはハムス、ヤークン、クリストフ、ノット、シリムス、ムス、ハッ
ゼン Hans Jakob Christoph von Crimmelshausen. 一六二五—一七六六)が『シマンリシタミス』
("Simplicissimus.") キムルハルト、ホルキス、ハンク、(Eberhard Werner Happel.)が『アムダ
ル』("Mandrell)及びヨーハン、シカエル、モーゼン、ロマン、(J. M. Moserosh. 一六〇一—一六
九)アンドレアス、ハインリヒ、ブーノン、ホーレン、(Andras Heinrich Buchholtz 一六〇七—一七
一)ハインリヒ、マンゼルト、(Heinrich Anselm 一六五三—一七九七)劇詩家ロー、ハムシ、グ
ン等の小説なり。又歴史の著述にてはヨーハン、ヤークン、マス、コフ、(J. J. Mascoy. 一
六八九—一七六一)が『獨逸人民史』シム、ム、ド、ノ、ク、ン、(Sigmund von Birken. 一
六二三—一八一)が『アウストリヤ家の歴史』コ、ト、ノ、リ、ト、ア、ル、ド、(Gottfried Arnold.)
が『教會史』等あり。また三十年戦争に關するものにてはロリ、ン、ン、ン、(Friedrich Frisius)等の
著あり。また教訓的散文バイテイ、ズ、ム、及び言語に關するものにては、ケ、オ、ル、グ、シ、
ホ、テ、ル、(Georg Shottel.) マ、ウ、ン、ス、テ、ム、ヘ、イ、ン、ン、カ、ル、ン、(Angustin Egenholf.) ハ、ル、マ、
シ、ハ、ン、(Balthasar Schupp 一六一〇—一六一六)バ、ル、リ、ド、メ、ー、ケ、ル、ン、(Ulrich Megerle 一六四

二—一七〇九)シ、リ、ス、チ、ア、ン、ト、マ、ウ、ス、(Christian Thomasius. 一六五五—一七二八)ロ、リ、
ツ、ヤ、ー、コ、ン、ス、ペ、ー、キ、ル、(Philipp Jacob Spener. 一六三五—一七〇五)ア、ウ、グ、ス、ト、ヘ、ル、マ、
ン、ン、ラ、ン、ク、(August Herman Francke.) 一六六三—一七二七)ヨ、ー、ハン、ダ、オ、ル、グ、キ、ヒ、テ、ル、
(J. G. Gichtel. 一六三八—一七一〇)等あり。哲學者にてはコ、ト、フ、リ、ド、非、ル、ヘ、ル、
ム、ライ、ン、ニ、ア、ン、Gottfried Wilhelm Leibnitz. 一六四六—一七一六)及びクリ、ス、チ、ア、ン、ザ、ル、
フ、Christian Wolf 一六七九—一七四五)あり。されど此等は何れも純文學に縁遠き
もの、此の略史の講ずべき際にあらず。

以上予は第四世紀より十八世紀の初めつかたに至る獨逸古代文學の要領を講じ
了へつ。顧みれば千有餘年の獨逸文學に於いて特に稱するに足るべきもの、唯一
つの『ニールンゲンリド』ありしのみ之れを除きては片々たる幾多の作物と累
々たる數百の小詩人の頭顱との存せしに過ぎず。もとより歌曲、小説、劇詩、頌詩、諷
刺詩、教訓詩、滑稽詩、物語歌、説教集さては人口に膾炙せる御伽物語等の歴史上の價
値興味あるなかりしにはあられど詩歌的價値の立場より見る時は殆ど落葉荒涼
たりきとも稱すべき有様なりき。また神學者、哲學者等が拉句語にてものせる著

述、論文等は枚擧に遑なきほど多かりしかど、かゝる述作は獨逸の國文學特に詩的文學に對していささかも裨益する所なかりき。要するに十七世紀に至るまでの獨逸は特に國文學と稱すべきものを有せざりしなり。然るに十八世紀の初めに當たりて一道の光明は獨逸の文學を照らし、其の光はやがて天に沖して世界に光被するに至りぬ。光明とは何ぞ。クロップストック、ギンケルマン、ギョーランド、レッシング、ゲーテ及びシルレル等の相つきて出でたることは是れなり。

此等諸文豪の輩出するに及びては獨逸文學ははや已に舊時の面目に非ず。精緻なる美學研究斬新なる文學批評、深遠高雅なる抒情詩、叙事詩、劇詩等其の光彩の陸離たる、文質の相和せる何れも吾人の耳目を新にするに足らざるなし。未の一轉機を境として是れより以後をば近世獨逸文學を稱す、便宜の爲めの區劃たること固よりなり。今や予はものうかりし斷片的古文學を講じをへてやうやく讀者と共に近世文學を考覈することとなりぬ。いでや新文學勃興の由來を説き進みてゲーテ、シルレル等に及ばんか。

獨逸文學史

近世文學

第六期 (自一千七百二十五年至一千七百七十年)

第一章

當期の特質 文學諸派 ス井ス、ライプチヒ兩派の論

争 ゴットシェット ホドメル フライティンゲル 小説作者 ハル

レル ハーゲドルン 索遜派 グライム及び其の朋友 頌詩

作者 散文小説

ギンケルマン、クロップストック、レッシング及びギョーランド等が獨逸の文壇に馳騁せし時代はオピヅの時に比して遙かに時世を隔てたるの觀あり。レッシングが起ちて國民文學の改革を唱ふるに至るまでゾルフが在世の間(一六九七—一七五四)に於ける獨逸文界の進歩は吾人をして前期と當期との間に數百年の歲月の経過しつらんとおもはしむるほどなりき。蓋し改革家の名はレッシングに取りて決して過高の稱にあらざ、彼れが自國の文學にいたし、功勞は啻に形式の上に止まらずして之れに與ふるに新精神を以てし之れに吹き込むに新活力を以てしたり。かく

して獨逸の文學は最早や模倣的ならずして其の特質を具ふるに至り、單に知識學問の排列に止まらず活動的生命を根據としてあらゆる材料を咀嚼するに至り、また其の特質を固持しつつ、廣く世界の文學の華を吸収するに至りぬ。但し近世の獨逸文學を大ならしめたる此等の思想はもとより彼れに次ぎて起これる幾多の文士によりて擴張せられ、また彼れ以前の學者にして多少之れを豫想せし者なきにはあらねど、盛に之れを唱導し之れを以て獨逸の文學を鼓吹せる者は特にゴットホルト、エフライム、レッシングなりとす。彼れは當代の文界に於ける第一流の人物なれども要するに時世の見たるを免れず、從ひて此の大事業は彼れ一人によりて成し遂げられたりとは云ひ難し。また一方より見れば彼れが成せる事業は初めより彼れが爲めに備へられたるものゝ如く、其が成功の次第を明かにせんには、文運の興起に便りよかりし當世の事情を詳かにせざるべからず。いでや少しく彼れに先きだち若しくは彼れと時を同じうせる群小作家を敘述しゆく傍ら當期に於ける文學隆興の因縁を討ねん。

右に謂へる因縁の中には文學に對する國家の保護を含めざるべし。一千七百二

十五年より同七十年に至る五十五年の間述作に従事せし最良なる作家の數者は普魯士に屬し、また當時に於ける歴史上の大事業といふべきはフリードリヒ、ギルヘルム第一世及び其の子フリードリヒ大王の治下に在りし普國國權の擴張せることなれども、國權の擴張と文學の進歩との間には何等直接の關係の尋ねべきものなればなり。當時柏林の朝廷に於いては文學の進歩といふが如きことは殆ど全く齒牙に懸けられず、フリードリヒ、ギルヘルム第一世の文學、哲學を蔑視せしや其の文學者及び大學教授等と遇すること歌舞音曲の藝人ウツクシに異ならず、其の宮中に招致せられし唯一人の師傳と史官とを兼ねたる學者の如き殆ど幫間同様の待遇を受けき。大王フリードリヒ二世は武を尙ひ兼ねて文學をも嗜みたれど聊かも自國の言語を修めて文をものせんの心なく、其の佛蘭西語にて『獨逸文學論』を著すや其の中には一たびもクロッパストック、レッシングの名を記さず、また人ありて『ニバルンゲンリッド』を獻せしや彼れは、一彈丸にも値せずとて之れを斥け、また此の書の書庫に在るを見るや直に命じて之れを取り去らしめきといふ。要するに彼れは文學上に於いてはあくまでも佛蘭西人なりき。彼れの友ブルテールがベ

ルツンの朝廷にても、のせる文に、此處に在る手は猶ほ佛蘭西に在るなり。我等は皆我等自らの國語(佛語)を用て談話し、ケーニグスベルヒにて教育ある人々は眞情もて多く我が詩を記憶す、獨逸語は唯兵士と牛馬とに用ひらるゝのみ、我等は旅行する時の外に此の語を用ふるの要なしと云へるもの、よく王の嗜好を表すると共に當時文界の一方に佛國文學の盛行せる有様を明かにするものなり。王は此くの如く獨逸語にても、のせる文學を蔑視したれども猶ほ間接に國文學の發達を助けたるものあり。何ぞや彼れ自らの強大なる精神を國民の性質中に吹き込みたると及び國威を發揚して誇るべき或物を國民に與へたることは是れなり。王の文學に對する意見嗜好及び其の政策の非難すべきと否とに拘らず、國民は一身を國權擴張の犠牲に供したる王の生涯を仰がざるを得ざるべく、王の事業性行の國民を感化することなかりせば國文學の復興亦遂に見るべからざりしならん。

十八世紀に於ける國文學の勃興は已にオビッツ、トマッウス、シラプ、ライプニッツ及びブルフ等によりて始められたる事業の連続なりといふを得べし。當期に於ける政事上並に社會上の有様は前期の比して大に文學の興起に利するものありき。

此の時に至りては三十年戦争を去ること已に七十餘年殺伐の氣風や、和ぎ宗教に關する紛争憎怨亦著く薄らぎて人民漸く其の塗に安んずるに至りぬ。かく兵亂争擾打息みて人々衣食に安んずるを得、國威の發揚するにつれて後顧の憂ひなきに至れるより、生來政治に趣味を有せざる者若しくは小邦に生まれて政事に與ること能はざる人々は心を文學の研究に委ねて他に得べからざるの快樂、自由を求むるに至れり。是に於いて文學的盟社は此處彼處に起こり雜誌、通信、論議等によりて其の意見を闘はし、素蓬、普魯士、瑞西等の諸州は文學によりて其の氣脈を通ずるに至りぬ。

前世紀の諸文學會は國文學の發達に關して全く功勞なかりしにはあらず、されど其の功は唯韻文界より佛語を驅逐せるに止まりて彼等がものせる詩歌は何れも模範を佛蘭西の詩歌に取れるものなりき。十七世紀に起これる此等諸文學會の一にして當時なほライプツヒに存せるものありしが一千七百二十七年ゴッドシニツト半は其の組織性質を改めたり。之れに先だつと六年ばかりツィーリヒの歴史教授ポドメル及び其處なる牧師ブライテンゲルの二人詩歌の研究改善を目的と

して定期刊行の雑誌を起こしき、是れ所謂瑞西派の萌芽なり。ハルレの文學盟社は一千七百三十四年より同三十七年まで存したりしが、其を代表せし重なる者はサムーエル・ランゲ(Samuel Lange)及びヤーコプ・ピラ(Jakob Pyra)にして後に二人のハルレを去るや同會は俄に有るか無きかの有様となりき。更に重要なを一千七百四十四年幾多少壯の人々によりてライプツヒに起こされ後に瑞西派と稱せられたる盟社とす、彼等は初めはゴッディットの説く所を奉じたりしが、やかて彼れに背きてポドメルに左祖するに至りき。ポドメルは詩歌に關して組織的なる學説を有せざりしかど其のゴッディットが究屈頑固なる説に反對して想像の自由なる飛躍の詩歌に欠くべからざるを説き、また佛國詩人よりは英國の詩人を貴べる點に於いて注意せられたり。

ライプツヒ及びツューリッヒの二派は詩歌に於いても批評に於いても共に當時の文界の牛耳を握れりしが、幾くもなく他の文學盟社は伯林及びハルベルスタットに於いて形つくられたり。詩人クライム猶ハルレに學生たりし時已に其の友ウーツ・ゲッツの二人と文學小會を催したりしが二青年詩人クライスト及びラムレルの

之れに入るに及び普魯士派として世に知られき。ラムレル後伯林に往きレッシンク・メンツェルゾーン・ニコライ等數友の贊助を得て別に一の盟社を形つくれり。クライム友を諸派に求めて交遊する所甚だ廣かりしが後一費をハルベルスタットなる己が家に設けて多くの青年詩人を養ひしがヤコビ・ミカエリス・シュミット・ハインゼ等其の尤なるものなりき。以上略、文學諸派の起源沿革を説きたれば次ぎに此等諸派の代表者に就きて一言すべし。

ヨートハン・クリストフ・ゴットシェット(Johann Christoph Gottsched)は一千七百年を以てケルニクスベルヒの近傍に生れ、同二十四年ライプツヒに行き、其處にて國文學の研究を目的として一盟社を組織しき。彼れ先づ文學的事業の手始めとして評論の筆を第二シレンツァ派の浮誇、虚飾の攻撃に向けたりしが、此攻撃に名聲を博するや更に進みて詩歌の製作に嚴格なる法則を置きぬ。彼れの主張せる三條の則に曰はく、詩歌は基礎を自然の模倣に置かざるべからず、知力は想像の上に立ちて之れを制御せざるべからず、詩歌の最好の模範は佛蘭西の文學に求めざるべからずと。此の時に當たりて幾多の英詩翻譯の現れたるなり、ミルトン特に多くの獨逸人間

に賞讃せられしが、最も熱心に彼れを賞揚せしは一千六百九十八年ツィーリヒに生れし『失樂園』の翻譯者ヨトハン、ヤーコプ、ボヤメン(Johann Jakob Bodmer)なりき。彼れ詩歌に於ける驚異するべき事柄に就きてなる論文に於いてゴットシミットが非難に對してミルトンを辯護せしが、かくて批評界に生氣を興へ、また他の其結果を生ぜし盛なる論争は始まりぬ。十八世紀の新文學の興起せしは實に此の論争の中よりなりしなり。此の論争(特に劇詩に關する)に於いて、まばしが程はライプツヒの批評家の勢力頗る強く、女優カロリチ、ノイベル及び其の妻ルイゼ、フィクトリア、ゴットシミット(Luise Victoria Gotsched)の共に彼れを助けて佛國風の模倣を改めんとする諸運動に反對せるあり、ゴットシミットまた彼等及び其の他の小部下を率ひてまばし勇ましく瑞西派に對抗したりしが、彼れ氣漸く驕りて、今しも日の出の勢なりしクロッペンストックを非難するに及び彼れが黨與はなべて彼れに反きたり。ゴットシミットはクロッペンストックの著『メシヤス』(Messias)を評して以爲へらく、其のいたく不規律にして無價値なる到底クリストフ、オットー、シーナイヒ(Christoph Otto Schöniich)が新作の敘事詩『ヘルマン』(Hermann)に比すべくもあらざると。されど公衆並に多

くの批評家は『ヘルマン』を斥けて散漫沒趣味にして讀むに堪へざるものとなしき。劇詩的文學に於いては彼れまたクリスタフ、フェリックス、ワイゼ(Christian Felix Weise, 一七二六——一八〇四)によりて烈しく攻撃せられたり。ワイゼは熱心に劇界の改良を企てたる者にて、殊に輕快なる滑稽樂劇(オペラ)及びメロドラマを入れてゴットシミットが『死するクート』の如き重も苦しき悲劇を排せんと企てたるものなり。ワイゼが樂劇の場に上さるゝやゴットシミットは己れを侮辱するものなりとしていたく憤りき。されど彼れの否運は猶ほ茲に止まらず、先きに彼れに従ひし流行女優カロリネ、ノイベルは今や新派に黨してゴットシミット自身に關する滑稽劇をライプツヒ座にもものし、彼れを助けし妻はた革新派に與して彼れを非難しぬ。其他の批評家世間の攻撃の烈しかりしかはいふまでもなく、中には『惡魔よりゴットシミットに與へし書』といへるを草し處々に配布して彼れを辱むるものさへあるに至り、曾て一派の領袖として批評界の全權を握りし者今や全く世間に見棄てられておまなくも草莽の中に沈みぬ。されどゴットシミットが獨逸文學にいたし、功は遂に没すべからず、假令彼れの功は第二シレンツァ派を攻撃してローヘンシュタインを抑え

し他にこれなしとするも、此の一事能く彼れが名を侮蔑の中に救ふを得べし。彼れの著「詩歌の批評的理論」は詩歌の眞性質に就きて發明し得たる所なけれども、作詩の術、言語の發表等に關しては見るべき説少なからず。彼れは要するに文學外面の改革者なり、而して其の功勞は尤重に消極的方面に在り。

ボドメル及び彼れの率ひたる一派の詩歌論の成功は、其の論敵ゴットシマットの如く積極的方面に於いてよりも寧ろ消極的方面に存したりき。彼等が其の論敵に對して佛文學の模倣の終極の目的とすべからざるを論じ、ミルトンを侮蔑するところが批評家の判断の正しきことの證據とならざるを説けるが如きは何れも正當なる意見なれども、其の進みて自家の詩歌論を發表するに至りては其の説く所ゴットシマットの如く比して少しく廣きものあるに過ぎざりき。彼等は以爲へらく詩歌は自然の模倣ならざるべからず、言語にてもものする繪畫の一種類ならざるべからず、(繪畫の丹青を以て自然を模する如く)其の目的は實用に在らざるべからずと。又彼等は驚くべきこと及び出來得べからざることすらも詩歌の原素として容さるべきことを痛論せり。實用的驚異的二條件は一見調和すべからざるが如く見

ゆれど、彼等は、其の事柄の虚誕にして道德的訓誡を目的とせる「エニッパ物語」に於いて二者の調和を見るべしとなし従ひて此の種の物語は大に此の派の人に尊崇せられき。かくてゲルレルト、リヒトエル、プフ、ニッフェル等幾多の作家は件の格言に準ひて其の小説をものしき。

クリスチアン、フルヒテゴット、ゲルレルト (Christian Furchtegott Gellert. 一七一六—一六九) は小説、頌詩等の作家として大に成功したる瑞西派の一人なり。其の言語文章の通俗なれども明瞭正確なる、其の教訓的趣味の程よく用ひられたる及び其の信仰の狭からずして且滑替の才ありし等の故を以てあらゆる社會の熱心なる賞讃を受け名聲遠近に噴々たりき。其の多くの人に歡ひ迎へられしヤフリードリヒ二世は彼れを見んことを望み會見するに及びいたく其の談話を喜び、彼れを評して「獨逸の教授中最も理論的なる者の一人なり」と云ひ、また或賤の男が彼れの詩に感ぜるの餘り一輛の貨物を贈りて謝意を表せしことありきといふ。されど彼れの成功せるは主として其の教訓的、諷刺的なる點に在り、燃ゆるばかりの狂熱はもとより彼れに於いて見るべからず、其の想像はたさまで逞しからざりき。他の小説

作家 マグヌス、ゴットフリート、リヒトマン (Magnus Gottfried Lichtwer. 一七一九—一八三三) 及びゴットフリート、コンラッド、マフティン (Gottfried Konrad Pfeffel. 一七三六—一八〇九) また教訓的實用を主とし想像を犠牲に供することに於いてケルレルトと其の軌を同じうせり。此等の作家に就きては特に云ふべきことなし。アフミフェルは明を失ひて其の長き生涯の半ば以上を盲目にて過せしが、死に至るまで遂に文學並に公務を謝することなかりき。

文學的批評の方面を離れ單に叙事詩、物語等に就きていふ時は、上に述べたる作家等は其の聲望及び價値に於いて遙かにポドメルを凌駕せり。ポドメルが作につきては『Nochide』の一篇を記すれば足る、但し此の篇とて本より作家としての彼れが位地を高むるに足るものに非ず。要するに彼れの文學にいたせる功績はゴットシットの固陋なる詩論に反對せると獨逸古文學研究の復興を企てたるに及び英國文學の趣味を輸入せるとに在り。彼れ一千七百五十七年に『ニールンゲンリト』の一部を出版し、同五十八年ミンネリッテルの集を出版せしが彼れの唱導せし此等の傾向は一千七百八十三年彼れの逝りし後にも姑く存在しき。彼れの友

ヨーハン、ヤーコフ、フライティングル (Johann Jakob Breitinger. 一七〇一—一七六六) また瑞西派の領袖にしてポドメル等と共に文學の批評研究に従事せる一人なり、彼れ一千七百四十年『詩歌術の批評的研究』を著して其の詩歌に對する意見を公にせしが所論おほむね穩當なれども其の詩歌に下せる定義に至りては頗る狹隘なるものなりき。フライティングル性高雅にして博學、ゴットシット、ポドメル等の如く争を好まざ、論争に熱せずして寧ろ眞理を獲んことに専心せりき。彼れが所論の中或ものは彼れ自身の主張せる定義、理論以上に出で、後の詩歌論を豫想せるものあり、其の詩歌に關する疑を述べて事物のたゞの模寫が、律語にてもせられたるの故を以て詩歌と呼ばれ得べきものなりやと云ひ、又詩歌の本領を論して詩歌の眞正の目的は、其の物語的なる、抒情的なる、劇的なるを問はず、性格及び情の種々の様に於いて人間の生命を表現すべきものなりと云へるが如き是れなり。史家シエラーはポドメルとフライティングルとに就き述べて曰はく、

ポドメルは性急にして野心あり且つ論争を好める文學的布教者なり。フライティングルは資性温良、思慮周到なる獨創的思考家なり。前者は史家にして翻譯

家を兼ね詩才に缺けたれども其の健筆驚くへく言ふ所概ね嘲罵諷刺の氣味を帯び且つ絶えず他の作家を非難し、後者は神學者にして語學に通じ、博學にして其の言ふ所或方面には重大なる勢力を有しき。二家は其の好尚を同しうし事業を同しうして相共に週刊の雑誌を發行し、また美術に關する理論の發達に於いてどもよく運動せり云々

また二者がゴットシットに對する關係を述べたる要に曰はく、ライプツィヒ、スハスの兩派は共に韻律に重きを置かざりき、彼等が論争の主眼と爲せるは詩歌に於いていかに想像力の許さるべきかに關してなり。されどゴットシットは其の述作の大に明瞭ならんことを求めまた術の許すかぎり其の文章を莊大にせんと力めたりき。彼れは詩歌を以て組織的教訓によりて達せらるべき術なりとし其の準據すべき鑄型を希臘詩歌の規則に求めたり。ツトリヒの作家は之れに反し其の述作は行文形式の上に於いては甚だ粗笨なれど、思想の上に於いては大に深遠なるものありき、彼等の主張せる理論はゴットシットの比しては組織的ならざれども、其の目的とせる所は詩歌の種々なる

階級に對する處方録を作るにあらざして詩歌美の源泉を發見せんとするに在りき。されど彼等は其の目的を成就するに至らず、また彼等の主張はゴットシットがゆくりなく説き出でたる所に現れたるを見る。

兩派の一致せる所は曰はく、詩歌は自然の模倣(吾人は寧ろ復現といふべし)なること、新奇にして尋常以上のもののみ美にして復現する價値あること及び詩歌の最高なる職分は驚異的^{マイミクス}事物の描寫にありといふこと是れなり。されど驚異的事物を摸寫するに當たりて詩人は有り得べきことの範圍を起えて架空の妄想を描くべからず、而して如何ばかり驚異的なることが有り得べきこととして許さるべく従ひて詩に入るを許さるべきか、例へばホメーロスの詩中に在る三脚の供物臺の事若しくはミルトンの惡魔の如きは正當に詩に入るべきものなるかといふこと、是れ即ち兩派論争の燒點なりき。而してゴットシットに於いては詩に入るべき想像の範圍いたく制限せられ、ツトリヒの作家にとりては廣く詩中に入ること許されたりき。(此等の論争が現今我が國の小説家批評家があせりつゝある性格論及び自然不自然の論等に如何ばかり似通ひたるか、及び其の論争の如何に決せら

るゝかを見よ)。

ス井ス、ライプツィヒ兩派の論争はいたく當代文士の詩歌的文學に對する注意を惹き又レッシングの偉大なる批評力を喚び起こせり。クロプストック、井ーランド、ホドメルに負ふ所少なからざりき。知るべし今や漸く忘れし兩派の論争とレッシングが先驅となりし新文學勃興との間には甚だ密接なる關係の存するものあり。ゴットシット及びホドメル等が名の重きを獨逸文學に成せるは之れが爲めなり。

上に述べ來たれる論争に關係せず當期の初めに現れて後の文體の發達に寄供する所ありし二律語作家をハルレル及びハイゲドルンとす。アルブレヒト、フォン、ハルレル (Albrecht von Haller. 一七〇八—七七) は知名の學者にして主として心を解剖生理の學に傾けたりしが、また文學的著作にも従事し其の短歌及び抒情詩は嚴かなる品格と深遠なる思想とにより愛重せられたり。彼れの作にはまた多くの教訓詩、諷刺詩及び『アルプス山』と題せる敘景詩(彼れが此の種の詩にて最秀とせられたるものあり)。詩歌論に關して彼れがフライテインゲルの進歩せる思想に反對せ

し事は其の教訓的小説『フビュス及びケーター』に記せる所にて明かなり。其が『永遠に寄する歌』の如き頗る生氣あり威嚴あるものなれども其の題目の抽象的なると理屈めけるとの故を以て上乘の詩に班せらるゝこと能はず。

ハルレルの詩に比して一層快活に一層優美なる抒情詩はハムブルグの人にしてまばらしく倫敦なる和蘭公使館に秘書官たりしフリードリヒ、フォン、ハイゲドルン (Friedrich von Hagedorn. 一七〇八—五四) によりてもせられたり。彼れが抒情歌の主題となれるは重もに酒、友誼及びホレニス等の唱へたる實際的知識なりしが、小説及び物語に於いては彼れは半ばラフォンテーヌ及び其の他の佛國作家に倣ふ所ありき。されど此の時に至りては佛國作家の模倣せらるゝこと漸く衰ひ英國作家代はりて模倣的作家の尊崇する所となりき。アルノールド、アーベルト (Arnold Ebert. 一七二三—九五) はヤングの『夜思』 ("Night Thoughts") リチャードソンの小説數篇及びマックハーンソンの『オッシアン』 ("Ossian") を譯せしが、やうやくにして『英國がりといふ一種の流行を成すに至りき。ヤングの『夜思』が獨逸の詩界に影響して憂鬱多感なる風調を養ひしは面白き事なり。またミルトン、ポープ、トムソン等の翻譯は

幾多の喜ぶべき影響を及ぼしき。ポーンの傑作『The Rape of the Lock』の影響が井ルヘルム、ツッパリヒ (Wilhelm Zacharia. 一七二六—五九) をして幾多の嘲笑的叙事詩をもせしめ、トムソンの『四季の歌』が多くの作家を喚び起こして叙景的詩歌をもせしめたるが如き是れなり。一千七百五十九年の戦に斃れし普魯士の陸軍少佐エヴルド、クリステイアン、フオン、クライスト (Ewald Christian von Kleist. 一七五一—生) は此等英國詩人の影響を受けたる作家の精華と稱せらるべき一人なり。彼れが傑作『春』の歌は曾て普く人口に膾炙せし作にして半ば叙事的性質を帯びたり。此の詩は戦亂の慘状を目撃せし作者が経験より起これる真情を吐露せるものなるを以て語句活動頗る興味を擲すべきものあり。ハルレル、ハーゲドルン及びクライスト等以下の小詩人に就きては特に述ぶべきことなし、彼等の功は要するに章句形式の上に止まればなり。

次に述ぶべきは索運派なり。カール、ゲールトキル (Karl Gärner. 一七一二—九一) 之れを創立し『ディー、ブレン、メム、バィト、レーゲ』(『Die Bremer Beiträge』) なる機關雜誌を發行しき。此の派に屬する作家の主なるはゲールトキルの外上に述べたるゲ

ルレルト、ツッパリヒ、エーベルト及び率強なる規則に反對せし劇詩家エリクス、シュレーゲル (Elias Schlegel. 一七一八—四九) 其の弟にして有名なる、シュレーゲル兄弟の父たるアドルフ、シュレーゲル (Adolf Schlegel) 牧師にして頌詩翻譯家なるクライメル (Cramer) 諷刺家クストキル (Kästner) 劇詩家クロイック (Croneck) 及びアイレンホッフ (Ayrenhoff) 等なり。此の派に屬して彼等よりも更に重要なるはゲーテがいみじき滑稽の才を具へたる人と評せし温和なる諷刺家ゴットリッパ、ラペーキル (Gottlieb Rabener. 一七一四—七二) なり。彼れが諷刺滑稽は穩にして忌味なくまた間々時弊に適中せる言を爲せり。彼れがクエルレクイッチなる一小村の浩漭なる歴史を假設し其の批評に擬して當時の史傳の緩慢冗長なるを諷刺せる文に曰はく、

此の史家先づ筆を起こして曰はく「究めく、て世界の原始に遡れば、吾人は最初世界に住める者のアダム、イヴなる唯一組の夫婦のみなりしを見る」と、さて後に悠々ミカルデア、アッシリア、埃及、猶太、希臘及び羅馬等の歴史を舒説し、やうやくにして本題なる一小村の歴史に還る云々

當時の諸文學派の中、グライムを首領とせしハルベルスタットの詩派の如く自足逸居せしものなし。ヨーハン、ギラーム、グライム (Johann Wilhelm Gleim. 一七一九—

一八〇三資性温良、獨身にして相應の財産を有せしが、いたく文學を好み少壯詩人の爲めに研究所を其の家に設けたり。初め彼れの小會をハルン(Halle)に開くや、員に備はれる者唯ヨーハン、ペーテル、ウーツ(Johann Peter Uz)一七二〇—九六)及びヨーハン、ニコラウス、ゲッテン(Johann Nikolaus Götz. 一七二二—八一)のみなりしが二者の長所は何れも思想の上に在らずして重に文詞發表の上に存しき。クライムが作の最良なるは其の愛國的詩歌なり。彼れは尙ほ其の他多くの抒情歌を詠じまた『ハルラダット』(“Halladatt”)と名つくる一教訓詩をものしき。彼れ常に曰へらく余は若かりし時より聖書の如き書を物せんとの考を懐けり。されど此の倨傲なる企望の結果は道德に關する陳腐凡庸の言を並べたるに止まりて些の創意なきものなりき。要するにクライムは唯文學者の信切なる朋友保護者として記憶せらるべきのみ、到底詩人として傳へらるべき者に非ず。彼れの詩人を歡待せしや、多くの小詩人(稀には秀でたる詩才もありしかど)は思ふまゝに夫子ペイグクライムの家にて、百十有八名の詞友の肖像を掛けたる大なる一間に會して快く其の所思を談せり。思ふに古來世に現れたる如何なる大詩人も曾てクライムのそれの如く幸福なる

生涯を送れるものなかるべし。彼れは曾て一たびも其の朋友及び徒弟の作を非難せるとなく、また日毎に若しくは週毎に多少の詩を物する者をば何人と雖も之れを保護し、此等の人々に擁せられて樂しく其の生涯を送れり。彼れの友にして有名なるは不幸なる女詩人アンナ、ルイゼ、カルシエ(Anna Luise Karsch. 一七九一—死)初めには見るべき作なかりしも後ゲーテを學ぶに及びて詩境大に進みしヨハン、ゲオルグ、ヤーエヒ(Johann Georg Jacobi. 一七四〇—一八一四)及びカル、井ルヘルム、ラムレル(Karl Wilhelm Ramler. 一七二五—九八)等なり。ラムレル撰筆をホレーヌに取りて短詩、抒情詩を作りしが大にゲーテの賞讃を受けき。彼れしばし伯林の兵學校に教授たりしが其處にて國王の軍功を頌するの短歌を作りき。レッシングも曾て其の詩の批評をラムレルに乞ひしことあり。

短詩及び頌詩作家の一向に摸倣を事とせし者に就きては委さにこゝに叙述するの要なければ、中に就きて主要なる作家のみを掲ぐべし。索遜派の一人なるヨハン、アンドレアス、クライメル(Johann Andreas Cramer. 一七二三—八八)がものせるものにては其が讚美歌の翻譯の方、自作の頌詩に比して遙かに價值あり。其の他の

頌詩作家はおほむねゲルレルトの詩風に倣ひし教訓派及び敬虔派(同胞協會に屬せし作家をも含めて)の二派に屬す。自然神學を尊奉するの傾向はハムブルクの牧司クリストフ・シュタム(Christoph Sturm. 一七四〇—一八六)がものせる頌詩及び散文に於いて見ることを得、彼れはクロッパストックの摸倣者等と比肩すべき詩人にして『神の事業に業に於ける黙想』と題する彼れが散文中の最も傑れたる著作は英語及び他の國語に翻譯せられて大に人々に膾炙しき。多くの敬虔的頌詩家の中其の作の最も多かりしは『同胞協會』の創立者ニコラウス・ルドヴィヒ・グラフ・フォン・ツィンツェン(D. Niklaus Ludwig Graf von Zinzendorf. 一七〇—一六〇)なり。彼れは宗教上の迫害を避けて故國を遁れしモラヴィアの同胞に自らの所有地を與へて其處に寺院を設け、之れを中心として傳道士を諸國に派遣しき。彼れが頌詩の多くは其の單純素朴なるによりて名高し、されど其の中には彼れ自ら後に排斥せし痴情的性質を帯びたるものあり。

思想の上にも發表の仕方にも何等の進歩發達の跡を現さざりし幾多の小詩人につきてはこゝに敘述せざるべし。さて韻文界を去りて眼を散文小

説に於ては當代に於ける注意すべき作としては、やがて説き出づべき井ーランドの小説のみなるを見る。ヨハン・ティモトイス・ヘルメス(Johann Timotheus Hermes. 一七三八—一八二二)がリチャードソンに摸倣してものしたる『ソフィアの旅』は唯中流社會の生活を寫せりといふ點に於いて注意せらるゝのみ、其の他の關係に於いては全く無意義の作なり。風景畫家サロモン・ゲスネル(Salomon Gessner. 一七三〇—一八六)は丹青の餘力を以て文筆に従事せしが其の文學に於ける成功は繪畫に於ける成功に比して覺束なかりき。彼れが作『アーベルの死』は獨逸及び英吉利に於いて大に賞翫せられき。

井ーランド。レッシング等に先だち、或は時を同じうして力を純文學(律語散文)の方面にいたし、廣き意味に於いて、彼等の事業に資し、國民文學の興起に影響せし作家等のおほかたは上に述べつ。蓋しライプチヒ、ハルレ及びハルベルシュタット等の諸派に屬する多くの作家が詩人と稱せられ得るは最も通俗なる意義に於いてなり、詩人など云はんよりも更に低く小やかなる名こそ彼等には至當なるべけれ。彼等の作するや言はざるを得ずして言ひ、言ふどころ即ち詩を成すにあらず。言ふ

べきもの甚だ僅少に、托すべきこと皆無なるに當たりても彼等は美しく之れを言ひ現さんと力めたり。されば彼等の詩の多くは英吉利及び佛蘭西の作物より用ひ陳し、題目及び感情を引き來たりて章句按排の練習を爲せるに過ぎず。是を以て當代に於いては抒情的なると、叙事的なると、はた劇的なるとを問はず、あらゆる詩形(讀むに堪へざる形式すらも)は此等の詩人によりて試みられ、『牧場の灌溉』(理性の權利)等の題目に就き律語もて無味乾燥なる教訓詩をものせるさへあり、こゝにはありふれたる些事が、屢、個性特色の發現を以て肝腎なる要素となすべき抒情詩の主題とせらるゝあれば、かしこには友誼、酒、自然美等多くの變化なき慣用せる題目の繰り回さるゝありき。物語的詩歌に於いては幾多の作物語フエテラの讀むに足るものあり、少なくとも其の意義を有する點に於いて千篇一律なる短歌に優りき。ポーアの傑作『The Rape of the Lock』は大に當世に持て囃されて幾多の模倣的諷刺詩を生む。劇詩に於いてはレンシングが國民的劇詩をものせし前、グイゼ、ニコライ、エリクス、シレーゲル等が多少の改良を爲したるありき。またオピッツ等が唱導せし韻律の法則は當時に於いても多く従はれ又擴張せられしが彼等は競ひて形式の

新を求めたるより、ちのづから古代の律語を學び來たれり。おもふに此等の事業は當代文學の進歩に於いて多少の功績ありしには相違なし、されど美はしき發表の形式に結び付くるに大なる思想を以てせし詩人等と等しき班位は到底此等模倣的小詩人に與ふべくもあらず。

第二章

普魯士のフリードリヒ二世 歴史家 通俗哲學者
唯理論者 美學の著者 エンケルマン

フリードリヒ二世の時代に於ける律語作家が取るに足らぬ詩題を追うて汲々たりし時に當たり散文作家の論説し描寫すべき主題は甚だ多かりき。されど今しも起こりつゝありし價值ある出來事をいみじく描寫し得べき手腕ある歴史家及び政法記者無かりし爲め、當代の快事業もあはれ之れに伴ふ史筆を得ずして止みぬ。此の時代に於いて散文々學の見るべきは道德及び美術に關する論文なり、道德及び社會生活に關する多くの價值ある論文は通俗哲學者と稱する一派の文士によりてものせられ、美術評論の方面に於いては世界の文學に於いて最

も重要な産物に列なるべき『古代美術史』及び『ラオコオン』の二篇亦此の時に
出でたり。

獨逸語にてもせられたる歴史的著作の中最も價值あるものゝ一ともいふべき
は一千八百三年まで存せし監督牧師の管轄地なる小邦オスナブリックの歴史なり。
蓋し宗教改革後相次ぎて起こりし最も重要な事件に付き歴史家及び政論記者
等の絶えて之れに關する注意すべき著作を出ださざりしは甚だ怪訝すべきこと
なり。然れども當時文學に従事せる人々はおほむね時世に暗くしてシレンツァ戰
争の如き運動の重大なる所以を解し得る者甚だ稀なりき。されば此等重要なる
出來事に關する價值ある記録を見んと欲せば吾人は群小作家の著より眼を轉し
てフリードリヒ大王自身の著作『フランケンブルク史補遺』『七年戦争史』及び彼れの
時代に關する王の自著を顧ざるべからず、而して偉大なる國王、偉大なる將軍、偉大
なる政治家なるフリードリヒ大王が此等の著作は几べて佛蘭西語にてもせら
れたりき。されば歴史としては無上の價值ある此等の著作も、其の國文學に對す
る關係としては唯文學者に對して彼れの冷淡なりしを辯護するの料たるに過ぎず。

蓋し多くの作家等が道德若しくは美學上の論争に攻々たりし時は是れ方に塊太
利及び佛蘭西が獨逸の聯合を破り普魯士を顛覆せん、の謀計に汲々たりし時なり、
而して時の多くの文學者等は王が慘憺たる經營を顧みずして陳腐なる主題の吟
詠に餘念なかりき。フリードリヒ大王が國文學を保護せざりしことは文壇の一
大愁訴たり、されど吾人は之れに加へて、佛蘭西文學を崇拜しデルテールに師事し
て國文學につらかりし大王が慘憺たる事業なくして、獨逸國民及び其の文學が十
九世紀の末葉に於ける盛運を見るべかりきや否やを思はざるべからず。

フリードリヒ大王の著作に比ぶれば、彼れが時代に於ける歴史上並に政事上の著
述は殆ど一顧するの價なし。唯これらと等しなみに見るべからざるは先きにも
云へる『オスナブリック史』(Osnabrück)なり。此の史の著者ユストゥス、メーゼル(Justus
Möser)は一千七百二十年をもてオスナブリックに生れき、彼れゲッティンゲンにて法
律を研究し、後其の故國に歸りて暫く辯護士の業を執りしが、一千七百六十三年オ
スナブリックがフリードリヒに屬して以來略二十年間は此の管轄地に總務として政
事上の萬機を處理しき。メーゼルに取りては文學は唯國家隆榮の爲めに用ひら

るべき器具に外ならず而して彼れが主要なる著述『オスナブリック史』はよく著者が主義識見、愛國心等を現せり。彼れが奉じたる格言中の格言ともいふべきは政治上の組織は凡べて人民の歴史に據らざるべからずといふに在り、彼れは更に抽象的理論を顧みず、また紙上に經書せられたる若しくは外來の權力によりて人民の上に加ふるが如き政府の組織に耳を傾くることなかりき。彼れは機械的、專制的なりとして凡べて之れらを斥け一意歴史及び古來の習慣に基ける組織を主張し、また全く古來の事實に依りて組み出だされたる法律を得んと欲せり。彼れはいみじき滑稽の才ありて又諷刺にも巧なりしが、其の金錢を用ふることに反對せる論文に曰へらく、其を海に投ぜよ、然らざれば懲罰の方便として之れを汝が敵に與へよ、金錢なるものは數ふべからざる害惡を伴ふことなくして如何なる國にも用ひらるゝこと能はずと。篇を終はるに及ばずして止まらん讀者は必彼れを以て狂人と爲すなるべし、されど彼れは終りに臨み簡單に其の本意を説明して曰はく「かくの如きはソフホストが宗教の原理に對して用ひつべき議論なり」と。以て彼れが諷刺の才を見るべし。

彼れが道德上の目的、論題の範圍及び其の著書の毎頁に映れる不羈の性格に關してはユスト、ス、メーセルは人民の爲めに物せる著作家の模範と稱せらるゝを得べし。彼れが著『オスナブリック史』若しくは『愛國的空想』を讀まん者は何人と雖もゲテが彼れを稱へて『双びなき人』と言へることの無理ならざるを知るならん。『愛國的空想』は曾て新聞紙に掲載せしを集めたるものにして實用を主としてものせる多くの短論文及び物語を含めり。彼れはまた當時獨逸の上下を風靡せし佛國的好尚の流行に對していたく反對を試みき。

フリードリヒ、カル、メーセル(Friedrich Carl Moser. 一七二三—九八)のこゝに傳へらるべきは唯其の性質の愛國心に富めるのゆゑを以てなり。彼れは甚だ精勵なる政論記者なりしも其の著作文章の体裁に至りては亂雜にして見るに堪へざるものなりき。彼れの文を作るや場所をも選ばずして如何なる事柄をも挿入せり、是を以て其の『獨逸國情』『政治の眞理』若しくは『主人と奴僕』等の題目に就きて論するや幾百部の書籍雜誌を引き來たることを辭せざりき。彼れが諸王侯の宮廷に關する知識は半ば實際の觀察に基けるものなりしが、其の同時代の一歴史家を評して

「善良に、柔順に、可憐なるイゼーリン、あはれ彼れは唯肖像によりて諸王を知るのみ」と云へるが如き彼れが諷刺に在りて最も見るべきもの一なり。メーセルの爲めに此くの如く難ぜられし歴史家イザアック、イゼーリン (Isaac Iselin. 一七二八—一八二二) は『人類の歴史につきての臆測』及び『愛國心論』を著し、が此等の著作は後にヘルデルの唱導し又半ば成就せるが如き歴史の哲學的討究を豫想せるものとして推重せらる。彼れの議論は常に重複に流るゝの弊あり。

此の時代に於いて歴史政治の述作に従事せし散文作家等は實用を旨とする傾向に於いて等しく相一致せり。トマス、アプト (Thomas Abbt. 一七三八—一六六) は特に熱心に凡べての文學が實用の爲めにもせられざるべからざるを唱導しき。「人民の爲めに物せよ」とは彼れの堅く執りし規則なりしが、ヨハン、フンツェル (Johann Hitzel. 一七二五—一八〇三) は之れを奉じて『哲學的農夫の經濟』と題する一書を著せり。此の書はパウエルといふ小農夫の個人的生涯を基礎とせるものにして、著者は田舎のソークラテースとして彼れを描けり。ホルツェルが著作の半ばは歴史に屬するものなれども彼れは寧ろ此の時代に於ける謂はゆる通俗哲學者の中に班せらるべきものなり。謂はゆる通俗哲學者とは哲學的天才若しくは大家といふほどにはあらねど、優れたる才能を有し、其の論述嚴かに且つ明瞭にして一般に利用厚生を主眼とせる一派の學者の謂ひなり。彼等が宗教に關し及び道德の根據に關する意見は一般に後世唯理派ラシオナリストと稱する學者の唱へしが如きものなりき。

謂はゆる通俗哲學者の中最も秀でたる者の一人をモーゼス、メンデルゾーン (Moses Mendelsohn. 一七二九—一八六) とすイスラエル族にして、さきにレッシングの友として其の名を掲げしものなり。彼れは教訓を主眼とせる多くの著作を爲し、が、其の最も名高きは靈魂の不滅に關する對話篇『ヘードン』(“Phaedon”) なり是れ半ばプラトーンと同じ對話篇に本づき多少著者の意見を加へて敷衍したるものなり。メンデルゾーンは固く最高なる實用の道德哲學の中に見出ださるべきことを唱へき。彼れ其の著の一篇に於いて曰へらく、

佛國の一著述家が「蠅蠅の汚れより毛布懸掛を守るルームールの骨折はライアニツカ道德に關する凡べての思想よりも遙かに歎美すべき價值あり」と云へる論に對し、余は其の妄を憫むこゝまなくして之れを讀むこゝま能はず、是れまさしく家々のあだなる虚飾を以て吾人自らの靈魂若しくは神性の高貴なるよりも更に重しきなすものに非ずや、

之れに反して余は斷言せん。欲す鍊金者が首尾能く其の志を遂げて地上なる凡べての石塊を黄金に變ぜしめたりとも、若し彼等にしてかゝる事業を見るに哲學の完成及終極の勝利を以てせば其はいみじき過失なるべし。

クリステイアン・ガルフェ (Christian Garve. 一七四二—一七九八) また所謂通俗哲學者の一人にして、其の文牀に就きていふときは十八世紀に於ける散文作家の中にて最も秀でたる者の一人なりき。彼れ道德及び文學的研究(特に文牀)につき多くの短論文をもものせしが、後フリードリヒ二世に用ひられてシセロが『人生の義務』に關する著作を翻譯せり。彼れまた利用厚生を主眼とし、久しく艱苦に堪へたる忍耐と其の溫良節制の徳とによりて世に知られき。カントの著述に關し彼れ曾て曰へらく「予はよく哲學に於ける高尙なる領分を咀嚼すること能はず、余は到底或實際的事物を目的とせざるを得ず」と。彼れは實に彼れ自ら限なく了解しぬるとおぼしき主題に就きてのみ筆を下せり。『山里の景色』と題する美はしき論文に於いて、彼れはカントが新美學説につきて何事をも言はず、また巨大なる外界物が、凡べての自然に比して強大なる道德的威力といふ意識を刺撃することに於いて大に力あることにつきても何事をも言はず、唯曰はく「山景色の人心を感せしむる主要な

る原因の一つは、吾人が同一の廣袤面積ある平地に於いてよりも山岳に於いて多くの物を見ること是れなり」と。以て其の學風の大體を察すべし。

明瞭にして通俗なる文牀を用ひたることに於いてガルフェが最高の敵手たりし一人は同じく通俗哲學者にて、家庭小説『ローレンツ・スマルク』(“Lorenz Stark.”) 及び、敎訓を主とせる他の物語の著者ヤーコプ・エンゲル (Jakob Engel 一七四一—一八〇二) なり。彼れ一千七百七十五年より同七十七年に至る間に『世界の爲めの哲學者』と題する論文、漫筆、物語等を載せたる續きものを發刊せしが、メンデルゾーン、ガルフェ、エーベルハルト等之れに寄する所ありき。蓋しエンゲルが著作に従事せし年月は一千七百七十年(第六期)以後に渡れど、彼れは通俗哲學者の派に屬し又明かに彼等が實際的傾向彼等が嚴格なる風及び彼等が自足の特質を表せり。彼れが散文にてもものせるフリードリヒ大王の頌は流暢にして誦すべき作なり。

通俗哲學の義甚だ漠たり而して此の派に屬すべき作家の範圍を限定すること亦はなはだ難し。著名なる説教者にして實際的宗教につきて述作する所ありしゲオルク・ヨアヒム・ツォルリコーフェン (Georg Joachim Zollikofer 一七三〇—一八八) 其の著『ソ

クラテスの辨護』に於いて異教徒の靈魂が天に入るを許されずといふ教義に反對したるヨーハン・エーベルハルト(Johan Eberhard. 一七三九—一八〇九)及びビエティスマに反對し論理を宗教の根據なりと説きしヨーハン・スパルディング(Johann Spalding. 一七一四—一八〇四)等の神學者また其の中に數へらる。已に詩人として掲げたるゲルネルトまた通俗なる文牒にて道德哲學をものしたるのゆゑを以て通俗哲學者と稱せられ、ハンノーフェルの朝廷に醫師たりしヨハン・ツィムメルマン(Johann Zimmermann 一七二八—九五)また時として此の派の中に數へらる。ツィムメルマン初め『幽寂につきて』なる一書を著して其の名を知られしが、後フリードリヒ二世が臨終の記事に托して自らを揚げたる書を著ししによりて其の名順に衰へたり。宗教に關する自由討究の許さるゝに至れる、及び前の唯理的神學の興起せし時期につきては正確に其の年月を區畫すること能はず。但し此等の諸運動の起るに先だちて謂はゆる自然宗教に關する佛國及び英國の學者等の著述の研究せられたるあり、次ぎて『デルベンヒッテル、フラクメンツ』(“Wolfenbüttel Fragments.”)の著者ヘルマン・サムーエル、ライマールヌ(Herrmann Samuel Reimarus. 一六九四—一七六八)

が一七七五十四年に『自然宗教の原理』を著し同じく六十年『動物の天性』と題する更に興味ある著述を出だしき。後者に於いて彼れは靈魂の不死なることを辨じ、比喩上より論證して之れを確信し少しも疑を其間にもかざりき。彼れ先づ動物の天性と其の宿命との相調和することを説きさて曰へらく、

現世以外を望むことこの吾人に取りて自然なるは、猶ほ下等動物が現在の生活に安んずるの自然なるか如し。彼等の天性は一定の境界の中に限られ、吾人自らの天性は不斷の發達を爲すの能ある點に於いて彼等のと區別せらる、而してかゝる發達に對する希望は吾人の造花主が吾人に賦與せしものなり。

さて吾人は自然界に於いて何處に欺かれたる天性あるを見ることを得るか。或種類の食物を要求する本性を賦與せられながら、其の種の食物を獲ること能はざる動物の例はいづこに在りや。燕が暖國に往かんさて雲を破りて飛び去るは果たして其の天性に欺かれたるものなりや。彼等は終に海の彼方に暖國を見出たすにあらずや。蒼蠅若しくは水生の蟲類が其の殻を棄て、其の羽を廣げて水を去り空氣中に入る時に、彼等は新なる生活に於いて其の生命を支ふるに適應せる空氣を得るにあらずや。いかに。自然の聲は決して欺瞞的豫言を爲すことなし。其は造物に告り玉ふ造化主の招呼なり。而して若し此のことが生物の本能に對して誤りなくば、なごか人間靈魂の高等なる本能に於いて眞ならざるべき。

と。かゝる推理論證を確信することは十八世紀に於ける通俗哲學者及び唯理論者の特質にして歴史若しくは他の外來の教義等は彼等によりて理性が宣告の反響としも見られざりき。但し彼等の目的とせしところは全く消極的なりしにはあらず、其の眞理と認めしもの、例へば神の存在、靈魂の不滅等につきては彼等の之れを信ずること頗る堅固なりしかども、此等の斷定確信を維持すべき根據に至りては甚だしく獨斷的なりき。且つ所謂自然神學に就きて彼等が説きしところの多くは極めて淺薄に且つ單に樂世的に偏して、天地に於ける暗黒の方面を見ることなく、又其の自然神學の證明の基礎ともいふべき論理をすらも精密に吟味することを爲さざりき。カントの如き思想家の出で、自然神學者等か信仰に關して堅く保持せる證明を説破し去らんことなどは本より此等唯理論者の豫想し得ざりし所なり。彼等の一般に取りし消極的傾向は凡べての奇怪なる出來事を拒否し若しくは説明し去らんといふにありき。而して萬事を拒否するよりは寧ろ説明し去らんとせる此等の企圖は往々にして笑ふべき結果を來したり。彼等の開化を衒ふに熱衷せるや光を温熱より分かち、彼等が以て宗教に代へんとて案出せ

し冷やかに知力的に且つ倫理的なる組織は感情と想像とを兩つながら其の中より排除せり。最高の詩歌に於いて見出ださるべき詩的直覺凡べての人民の迷信等は彼等によりて唯空虚なる小説として取扱はれ、哲學的思索は中に凡庸ならざる或物ありやとて嗤笑せられ、伯林なる書肆の主人ニコライ若しくはドクトル、パールト (Dr. Bahrdt. 一七四一—九二) の見て以て眞理と爲さざるものは全く無價値のものとして捨て去られき。

天啓に重きを措かずして吾人の理性其のもの、萬能を信じ、凡べて靈妙、奇異なる事物をば全く拒否し若しくは説明し去らんとせる此等唯理派の傾向特色は、他の更に消極的なりし神學著述家等に就きても、正當に言ひ出でらるべきものなれど、^{エーラー、ラング、リッス}初めの唯理論者等は何れの方面より見るも嚴密に一派を成せりといふこと能はず。例へば上に擧げたるドクトル、パールトの如きは殆ど孤立して激烈なる諧謔的宗教論に従事せし著作家なりき。蓋し當時の唯理論者には高等なる者と下等なる者との兩派ありて、一千七百六十四年に『唯理的基督教綱要』を公にせし井ルヘルム、アブラハム、テルネル (Wilhelm Abraham Teller.) 一七三四—一八〇四) 及び學識

高遠にして當時に於ける最も秀でたる説教家の一人に數へられしヨハン、フリードリヒ、エルサレム (Johann Friedrich Jerusalem. 一七〇九—八九)等は高等派に屬する録々たる唯理論者なりき。(エルサレムが晩年をはかなうせし其の子の自殺はゲーテが『エルテルのわづらひ』をものするの因となれり)。

初めの唯理論者等の中少數の思慮ある人々は一派の消極的評論及び其の奉ぜる特殊の真理の外に多少明瞭に相一致せる意見を有せり、其の意に以爲らく實行の宗教の心髓は其の由りて廣まりし凡べての傳說的(世俗的)形式と區別せられざるべからず、而してまた組織的正統説若しくは堅固なる教會より何等の補助を受くることなくして維持、布及せらるべきものなりと。

教會史の方面に於いては一の浩漭なる著作、ヨハン、マテウス、シュレーク (Johann Matthias Schröckh. 一七三三—一八〇八)が『基督教會史』の半ば此の期に成れるあり、此の史は全部三十五冊にして一千八百三年に完成しき。ヨハン、ローレンツ、モスハイム (Johan Lorenz Mosheim. 一六九四—一七五五)の名は人をして國語を用ふること、反對せる學者の僻見のなほ當時に存せしことを思ひ起こさしむ。彼れは有名なる

説教者にして獨逸文にも堪能なりしかど、其の主要なる著述『基督教會史』をものするや獨逸語を斥けて羅典語を用ひたりき。ヤイロブ、ブルツケル (Jakob Brucker. 一六九六—一七七〇)また羅典語にて『批評的哲學史』を著ししが、此の書は主として其の考證の該博なることによりて推重せらる。

上に述べたる歴史的並に教訓的著作は其の特質としておほむね時の改革的傾向を表現せり。蓋し當時恰も佛蘭西に其の勢を高めつゝありし過去に満足せずして新なるものを求むるの傾向は同じく獨逸にも存したれど、件の傾向はやゝ靜穩なる形を取りて國文學革新の事業に現れたり。此等多くの革新的事業の中全躰より見て最も文學の發起に功ありしは廣き意味に謂ふ美學(詩歌美術)に關する理論及び批評をも含めていふの方面なりき。クリスタ、アン、ルド、ギヒ、リス、ニュー (Christian Ludwig Lisow 一七〇一—一六〇)は十八世紀の最初に出でし批評家の一人にして時の小作家に對して多くの諷刺的批評をものせしが、其の文章の純粹なると雄健なるとによりて世に知られき。少しく彼れに後れて出で『美學』の創立者として其の名の後世に知られたるをアレクサンデル、ゴットフリード、バウムガルテン (Alexander

Goethe Beungarten. 一七一四—六二)とす、彼れは當時獨逸に勢力ありしライプニツ、
 ツ、ザルツ学派の學者なり。先きにライプニツが其の哲學に於いて知識を説くや
 其を別かちて感覺的知識(或は混雜せる知識)及び概念的知識の二つとなし、後者
 を研究するを論理學と稱せしが、ザルツがライプニツを繼承して其の説を組織す
 るや、概念的知識に就きては大著述を爲したれども遂に感覺的知識を論せざりき。
 パウムガルテンは此の缺點を補はんとして感覺的知識を論ぜる一書を著し『美學』
 ("Aesthetica")の名にて之れを公にせりエステテカとは感覺的知識の論といふほど
 の義にして美學の名稱は初めてこゝに出でたり。彼れ美を解して以爲へらく美
 とは感覺の眼を以て漠然と完全を見るの謂ひなり、而して完全は道理(概念)の眼に
 は眞として現はれ、感覺の眼には美として現る、美は眞或は善と異なるに非ず、唯之
 れに對する知識の明瞭なると漠然たるによりて或は眞となり或は美となるの
 みと。彼れの説は英國のベークの感覺説に對して唯理説フシヨリスムと稱せらる。彼れの弟
 子フリードリヒ、マイエフシヨリスムン(Friedrich Meier. 一七一八—七七)其の師が『美學』の出版と殆
 ど時を同じうして『美術の第一原理』を著しき。少しくパウムガルテン等に後れて

ヨハン、ゲオルク、スルツェル(Johann Georg Sulzer.)一七二〇—七九)の『美術理論』著し、
 此の書は已にポードメル及ブライトン、ゲル等の唱導せしものに比して幾何の
 進歩をもなさいりき。此等の理論的著作はもとより國文學の興起に資する所な
 かりしにあらねど、其の所論おしなべて形式的また獨斷的なりき。彼等の唱へた
 る理論は最良の美術品を賞鑒し解剖せる結果として成り上げられるにあらず、其の
 規則は美術文學の實際的研究に基きて定められたるにもあらずしておほむね心
 あての論評たるに過ぎざればなり。

レスニングの述作は上に挙げたる小批評家の其れらとひとしなみに見らるべくも
 あらねど、彼れが友にして書肆を業とせしクリストフ、フリードリヒ、ニコライ(Chris-
 toph. Friedrich Nicolai. 一七三三—一八一)は此等美學の小作家と同じ列に班せら
 るべきものなり。彼れが書肆として、及ひレスニングの友として文學にいたせる功
 績は遙かに彼れ自らの著作によりて爲せるものゝ上にあり。彼れの編纂出版せ
 る『バルレス、レットレスの圖書』(一七五十七年版)、レスニングの寄稿せる『文學信
 書』(一七五十九年—同六十六年)及び五十六冊に亘れる『一般の獨逸圖書』の如き

何れも當代文運の發達に少なからぬ裨益を與へき。彼れが書肆として文學に盡くせる功勞はかくの如くなりしかど彼れ自らの著述に於いては彼れは哲學に對して淺薄なる攻撃をなせる笑ふべき高言者として自家を暴露するに過ぎざりき。彼れは自ら容易に了解すること能はざる凡べての論述(例へばカントの著述の如き)に對しても容赦なく其の嘲笑的批評をもし而して自家の所説を以て常識上最終の標準なりとなせり、但し彼れが論評の志かく苛酷に激烈なりしも一つは其の晩年に起りし文學革新的運動の彼れを激せしめしによれることを許さざるべからず。ゲーテが『エルテルのわづらひ』のいたく持て嘶されて多感的氣風の一世を風靡するやこの諷刺的耆書商は之れに對して『エルテルのよろこび』を出だしぬ、是れゲーテを嘲らんが爲めにあらずして時の多感沈鬱的氣風の流行を防遏するの道を講ぜるなりき。蓋し其の名聲漸く衰へゲーテを領袖とせる少壯詩人の盛名を成すに至るまで生き残りしはニコライの不運なりけり。彼れはゲーテ等の粗暴なるを嘲笑して『肥滿男物語』を出だしたれど顧られざりき。彼れが多く著作中最も善しと稱せらるゝは『獨逸瑞西旅行記』にして彼れが文學及び政治に對

する意見は其の中に記されたり、また其の著『Sebalduß Nohankir』に於いては主として正統説及び敬虔主義に反對せる意見を述べたり。彼れの思想は深遠高大ならず、其の評論諷刺又た妥當、鋭利ならず、淺薄なる諷刺家と云ふ稱は大躰より見て彼れに對する正當なる批評なるべし。十八世の終り十九世紀のはじめハマン、ヘルデル、ゲーテ等が新時勢に伴ひて其の羽翼を伸ばし、に至りてはベルリンの書商の如き批評家は老朽陳腐また人の之れを顧るものなかりしなり。但しニコライが名聲の衰頹はゴットシニエドの如く迅速ならざりしと雖も、其の初めの盛なりしにも似ず其の終りのはかなかりしは一なりき。

レッシングを除き、上に述べたる批評家等は其の才能よりいふも其の學殖より見るも共に能く美術詩歌の理論をもつるに足るの資格ある者にあらざりき、彼等の定義、規則、批評は要するに形式的にして根據なく、且つ其の素養未だ美術品を賞鑒し詩篇を讀破するに能はざるに早くも天才の作物を是非せんとせり。此等紛々たる小批評家が心あての濫評に汲々たりし時に當たり貧困に苦しみ逆境と戦ひながら渺たる一介の身を以て美學的批評の新學派を建て、考古學若しくは言語學

の一隅に果敢なき名残を止めたる枯骨に生命を與へんと企てたる者あり。彼れは手初めに古代彫刻の論をものせしが、其の著述は常に美學的理論並びに批評の上、新時期を畫せるのみならず、今日に至りてもなほ言語學の研究と開聯して棄て難き趣味を與ふるものあり。之れを誰とかなす。ヨハン、ヨアヒム、

ギンケルマン (Johann Joachim Winckelmann)

即ち是れなり。ギンケルマンは貧しき靴工の子にして一千七百十七年アルトマルクなるステンダルに生まれき。家甚だ貧にして其の少壯なるに當たりては辛うじて生計のたつきを得たるほどなりしが、此の窮乏艱難の中に處しつゝも彼れは斷えず自家の修養に餘念なかりき。三十一歳の時ドレスデンの圖書館に雇はれて秘書官兼圖書掛助手となりしが、同館の美術品展列室に藏せる多くの寶物は彼れが研究を助くると少なからざりしも、古代美術の歴史を考覈せんとの彼れが志望はこれにて満足すると能はざりき。古代美術史の研究是れ實に彼れが畢生の大志願大目的にして此の目的に達せんが爲めには何等の事物をも犠牲にせんと心がけたりしが、當時古代美術の名品はほむね羅馬府に集まりしを以て羅馬

は彼れに取りて世界の中心と思はれたり。故國を去るに忍びされど、迫り來たる困乏の苦しみに堪へやらず、且つは年來の宿志を達するの便を得んが爲め羅馬府に於ける最大なる私立圖書館の持主君牧師パシオネー (Passionei) の圖書掛たらんとせしが、此の志望を遂ぐべき一の條件は其の信仰を變へざるべからざることなりき。ギンケルマンが希臘古代彫刻の美に關する堅固なる信仰の外に何等かの信仰個條を奉じたりしかは甚だ疑はしく、且つ彼れの朋友は彼れを目するに無信仰者を以てしたれども、彼れは表面上プロテスタント教を奉じたりしを以て、此の條件に對して躊躇すること數年、心苦しくも、彼れの語を用ふれば、終に意を決して羅馬教會に歸依し伊太利人となりぬ。此の改宗によりて彼れは大君牧師アレクサンダー、アルベニーの保護を受くるを得たり、アルベニーは羅馬に於いて最も多く美術品を藏せる一人にして、そのとき恰も其の別墅に於いて熱心に古美術品の蒐集に従事したりしが、朋友の禮を以てギンケルマンを遇したりしも、其の彼れに與へし報酬は甚だ僅少なりき。されど職務の餘多くの閑隙ありしを以て彼れは孜孜として其の大著の材料を蒐集せり。一千七百三十六年彼れは羅馬府古蹟局

の長官に任ぜられ之れによりて當地に來遊せる貴人等を導きて多くの古蹟を巡覽せり。かくて彼れが名聲は噴々として獨逸伊太利の古物學者間に傳へらるゝに至り、曾て彼れを冷遇せし獨逸の學者等、またあまた、び切なる意を致して其の故國に遊ばんことを請ひぬ。ボンケルマン幾たびか躊躇せしが、再び故郷を見んことの懐かしさに一千七百六十八年伊太利の彫刻師カプゼビを伴ひて羅馬を發し其の故國に向かひぬ。テコロッセ山に至れる時彼れは忌まはしき前兆ありしに意氣沮喪して切に伊太利に歸らんとを望み、同行者の勸誘によりてやうやく思ひ止まりしも一時は羅馬に歸らんの一念に心激して理性をも失ひたらん様なりき。維也納に行ける時、同行の彫刻師は彼れに説くの到底無益なるを覺りて彼れに別れぬ。彼れこゝにて女帝マリア、テレマアに謁して數多の金貨を賜ひ、エニスに向け發船せんとて、トリステに旅しぬ。トリステに行く途上、或は旅宿に於いてともいふ、彼れは伊太利人にして其ころ放免せられし兇徒アルカンジョリと相知りしが、女帝の恩賜や兇徒の心を惹きけん、一千七百六十八年六月廿八日彼れは遂に五箇所の重傷を負ひて兇徒の刃に倒れぬ。アルカンジョリは直に逮捕せられ十四

日にして死刑に處せらる。

ボンケルマンが羅馬に在りし時に脱稿して一千七百六十四年ドレスデンにて出版せし大著『古代美術史』の中に含まれたる思想は一千七百五十五年に公にせし彼れが最初の著作『希臘の繪畫及び彫刻の模倣に對する意見』に於いて未熟なりながら已に其の萌芽を藏せり。彼れが大名を成せる此の大著の出現は古代美術の歴史に於いて及び其の批評に於いて實に新時期を畫しき。其の發行せらるゝや忽ち全歐に喧傳せられて希臘の彫刻に關する唯一の歴史、また唯一の批評として受け容れられ、其の該博なる考證と雅致ある文體とによりて大に一般世人の稱讃を受けたるのみならず、古代の美術が時の社會、政治及宗教上の組織に對する關係に就きて詳細に論評せるふしの如きは實に古物學の研究に新生面を開きたるものと稱せらる。一部の美術史別かちて四篇となし、第一篇に於いて初めに總論を掲げ次ぎに希臘美術の興起、發達に裨益を與へし諸々の事情を説明し、第二篇に於いて希臘美術の精髓といふべき特質を説き、第三篇に於いて其の發達及び衰頽を叙し、第四篇に於いて美術品製作の上に於ける機械的作動を論じ、最後に古代の繪畫

に關する記事をものして其の論を終へたり。彼れは先づ温和清閑なる氣候を以て希臘の美術家を秀逸ならしめし外來的影響の一に數へ、更に一段の注意を以て道徳上及び知識上に於ける希臘國民の特質及び其の政府組織が大なる影響を美術の進歩に與へたるを論せり。ギンケルマンの古代の希臘人を賞揚するや殆ど其の崇拜者とも稱すべきほどにして、彼等の特質を叙し其の教育修練を説くや一個曖昧の點を止めざりき。彼れは其の著に於いて希臘人の特質につき樂しげにまた明かに説き出で、曰はく、古代の希臘人は如何に精神上の修練と身軀上の修練とを調和せしめたるか。各種の尊ぶべき性情が如何に彼れ等が教育の組織特に公會的饗應によりて發達せしか。天才と稱せらるゝ人々が如何に比武競技の會に於いて桂冠を獲んことを競ひしか、また(後に僧侶等の卑しみ初めし)肉躰を蔑視することにつきて何事をも知らざりしか。プラトーンは曾てイスマミアの競技會に於ける角力者たりき。ピタゴラスはエリスに於いて賞與を得、また曾てイッラメネスの訓練者たりき。エリスに於ける最も秀逸なる勝利者の一人イノーティムスの彫像はいたく希臘人に崇拜せられき。希臘人の能力は一部の勞力にのみ

従事することによりて其の發達を限らるゝことなかりき。マルクス・アウレリウス帝は道徳哲學に就きて教を一畫師に受けきと。此等は『古代美術史』の著者が崇拜の情を以て古代希臘人の特質に就きて叙述せし事實の二三なり。彼れが古代希臘人のおしなべて美術を尊べることを、及び私情によりて美術家及び美術品を左右せざりしこと等につきて叙述せる所の如き特に近代の世人が、美術に對するおはくと對照すべきものなり、曰はく、

希臘人が一般に美を品騰せしや、其の一大結果として美術家は其の保護者の野心慾望を満足せしめんが爲めに作することを望まれずして寧ろ一向に天才(美術家)の本分を確守し一般人民の聲によりて褒貶獎勵せられたり。而して此の人民は野卑無教育の匹夫に非ずして最も賢明なる人々の指導に従ひしがゆゑに彼等が美術品に對する判断は一般に公平にして競技美術家に與ふる名譽また正當に頌かたれき。フィディアスの時コリンスに於いて(デルファイに於いての如く)繪畫展覽會を開き適當なる審判者を置きて之れを審査せしめし時、神才と呼ばれしフィディアスの親族なる一畫師がカルシスのティモゴラスといふ者に打ち負けて賞與を争ひたることあり、かゝる秀逸なる審判者の前にエーテイオンといふ一畫師が歴山王ロクサナと婚姻する圖を出だせる時之れを判せしプロクセニデスといふ審判者が其の作を愛賞して自らの女をエーテイオンに

與へしことあり。彼等の間には秀逸の名譽が不公平に大家と稱せらるゝ者にのみ與へらるゝことなかりき。またサーモスの博覽會に於いては「アキルネスの武器」を盡ける幾多の齒幅の中有名なバルラシウスの「テイマンテイス」呼べる一競争者のに勝を制せられたることありき……

希臘の美術は主として最高なる事物例へば宗教的思想若しくは人生の高尙なる發達等を表現するものせられて、瑣細なる玩弄物を作り或は富者が私宅を裝飾する料となるを許されざれき。蓋し雅典府の盛時に於いて富有なる市民は自らは程よく質素に裝飾せる家屋に住しながら公共寺院に於いて莊嚴美麗なる彫像を安置せんが爲めに多額の寄進をなしたり。ミリタイアデス、テモストクレス、アリストタイデス及びシモン等、此の國に於ける勇將名士は其の邸宅を華美にして、市民間に自ら高うすることゝ爲さざりき云々。

古代希臘の彫刻に關するギンクルマンの理論は其を理想的なりといふにあり。彼れは古代の美術家は天地の意向及び其が個人に於ける表現を研究したりと説き、また美に關する一般の觀念を基礎として凡べて現存する形骸及び作動を取り扱ひたりと論じ、かくして最美なる古代彫刻の位地安固にしてすはり善く、素朴にして餘情擲すべきものあるを説明し、凡べての形象がよく暢健なる輪廓に支配(統

一)せられ、作動を現す時に於いては靜寂なる威嚴の具はれる所以を説明せり。ギンクルマンが希臘の古美術に關する理論及批評は實に彫刻の方面に大なる影響を及ぼせるのみならず又古物學の研究に新精神を與へたり。レスシングが其著『ラオコオン』の中に説き出でし最良なる思想のうちにて此の最初の美術史家に啓發せられたるもの亦少なからず。彼れが古希臘の社會組織と美術とが密着に關聯せることを論じたるふしの如き、實に美術に關してのみならず、半ば文學に就きても當てはめらるべきものにして、又近世の文化が向かひ行く理想を暗指せるものあり。其の意に以爲へらく希臘の文學は生活(ゾッペン)の文學なり、其は一般國人の生活、進歩及び嗜好と密に相關聯しき。詩人、史家、畫家、彫刻家等の其の作をもつするや人民の一階級、一社會の爲めにせずして國人一般の爲めに作せり。プラトーンのうち建てたる最高の哲學すら純粹に抽象的なるものにあらずして一般人民の同感と社會の嗜好とを織り込めたるものなり。彼れ等が形骸上並に智力上の諸性能は相調和してともく、に發達しきと。尙ほ曰はく國人は詩人、史家若しくは音樂家を作らんが爲めに犠牲に供せられずして、詩歌、哲學、歴史、繪畫、彫刻等凡べての

美術は寧ろ人間性能の最も完全に最も美はしき發達を生ぜんが爲めに用ひられ
 き。此くの如きものは凡べて希臘の文化に通じたる特質なりと。

クロッブストック、レスニング及びギーランドの述作は十八世紀の文學と十九世紀
 のとを結び付くる橋梁ともいふべきものなり。クロッブストックは一の大なる觀
 念即ち基督教國民詩聯合の理想を表現せり、而して假令彼れが其を表現するとに
 於いて失敗せりとするも、其の失敗は多くの尋常なる成功に比して遙かに高尚な
 る價值ありと云はざるべからず。レスニングは詩歌と冥想との結合といふことを
 基礎とせる國民文學の理想を發揮し、美はしき文章を以て其の理想を表白せり。
 ギーランドは其の主題の多様なりしと、其の文辭の明晰にして流暢なりしとの故
 を以て時を同じうせし群小作家の班を援けり。彼れは又高等なる社會(特に獨逸
 の南方に於ける)の描寫に成功せるの故を以て其の著作はまた歴史的價值を以て
 推重せらる。以上の三文豪は其の當時に於ける勢力及び後世に及ばし、影響の
 大なるものあるを以て、特に章を改めて其の性行及び著作を敘述すべし。

第三章 クロッブストック レスニング ギーランド

フリードリヒ、ハットワープ、クロッブストック (Friedrich Gottlieb Klopstock) は一千七百
 二十四年クエドリツブルクに生れ、シュルプファルテの學校に學びき。此の學校は索遷
 に於ける最も善き古文藝學校の一にして、彼れの此の校に在るや嘗に希臘羅馬の
 諸作家を研究せしのみならず、またタッソ及びミルトン等の著作にも涉獵しき。
 一千七百四十五年彼れは更に其の業を修めんとしてエーナに行きしが、此處にて
 彼れは散文もて其が大作の叙事詩『メシヤス』の一部分の筋書をものし、翌年にはラ
 イプツェルに行きて當時有力なりし定期刊行の文學雜誌『ブレームエル、バイトレーゲ』
 (Bremer Beiträge) の寄稿者等と交りを訂し、同四十八年には『メシヤス』(此の詩は六
 たり)の最初の三篇を同雜誌上に公にせり。彼れは匿名にて此の作を掲げしか
 ども、其のクロッブストックの作たることは直ちに知れ渡りぬ。瑞西の批評家ポード
 メル此の作を歓迎して自らの詩歌論を實現せるものとなし、切に意を致して彼れ
 のツューリヒに遊ばんことを請へり。クロッブストック、ポードメルを訪ひて瑞西に止
 まること數月、後に彼れは教師たらんことを求めしが、偶々デンマルク王フリードリヒ

五世より少許の年金を給せられたるにより、デンマルクの首府コペンハーゲンに到りて一意其の大作の叙事詩を成さんことに力めたり。彼れが此の旅行を爲すやハムブルグに停まること數日、こゝにていみじき文學上の技倆ある若き婦女メタ、モルレルと相知り、やがて偕老の契りを結び、爾後琴瑟相和して幸福なる歳月を送りしが、一千七百五十八年に其の妻を失ふ、や彼れの切なる哀は目も當てられぬ有様なりき。其の後クロッブストックは王より受くる年金により生計の煩ひなくて専心詩作に従事したりしかど、彼れが叙事詩の廿一篇を終はるに至るまでの進行は甚だ遅緩なりき。彼れが『メシヤス』の稿を起し、は齡僅に廿一歳の時なりしが四十六歳に及びてやうやく其の稿を脱しき。第三、四の兩篇は一千七百二十五年に出で、次きなる六篇は其の後七年を経て公にせられぬ、而して最後の五篇の一千七百七十三年に出づるや世間の之れを見ること甚だ冷淡なりき、蓋し作者が作の結構意匠につき豫定の考案なくして筆を下せること益、明かなるに至りたればなり。例へば一篇の骨髓ともいふべきメシヤス(救主の苦難及び其の死に關する記事は全篇の半ばを占むるに至らず、而して此の部分に於いては連続せる物語

的趣味なくして長々しき述懐及び對話によりて埋められたり。クロッブストックの名聲は此の作によりてやがて歐洲全土に喧傳せられしかど、其の詩はおほむね全躰として讀まれざりき。多くの人の愛誦せしは主として最初なる十篇にして件の十篇は實に此の叙事詩の最も優れたる部分なり。

一千七百九十二年クロッブストックは其の最も親密なる朋友として久しく交りを結びし寡婦と婚し、後ハムブルグに退隱して靜かに其の晩年を送り、一千八百〇二年遂に其の幽居に逝きぬ。其の葬儀は官費を以て盛大に營まれ、アルトナに近きオッテンゼンの寺内先妻ソタの傍に葬られたり。古來獨逸の詩人にして未だ曾て彼れの如き盛大なる葬禮を受けたる者あらず、其の日ハムブルク及びアルトナに於ける、あらゆる寺院は鐘を鳴らして哀悼の意を表し、百二十六臺の馬車は其の柩を送れり、今日第二のシェイクスピア起るるとも之れに過ぎたる禮遇を受くるを得じ。其の有徳にして信仰の厚かりしこと、其のいみじき天才を具へて燃ゆるが如き熱誠ありしことは當時に於ける幾多の事情と相應してクロッブストックの名をして衆人敬仰の府たらしめたり。彼れの當時に出でたるは猶ほ自から耀く星辰が旭日

未だ出でざるうば玉の夜半に現れたるが如し。實にや、當時獨逸の詩歌は其の形跡に於いては已に見るべき發達をなし居たれども、なほ其の内容を欠きて見るべき意義精神の其の中に發表せられしものなかりき、而してクロップストックは在來發達し來たれる形式をして更に變化趣味多からしめたと共に之れに與ふるに偉大なる意義精神を以てし獨逸の詩歌をして國民的また基督教的たらしめたり。彼れ弱年の頃より自家の天才を信ずること深く、かくて大膽にも『メシヤス』といふが如き高上なる詩題を取るに至れり、而してかゝる高上なる叙事詩をもつてせんとの彼れが慾望は彼れの性格をして愈、高からしめしが如し、蓋し彼れは常にものし得べきあらゆる題目の中最も高尚莊大なる題目に於ける叙事詩の作家たらんと欲して其の徳性品格の修養に専心したればなり。されど彼れは決して街詩的の學者に非ず、また世を捨て慾を絶つゝの隱者にもあらず、其の作は眞實胸に溢るゝ熱誠の結果なりき、而して作の全篇に行き亘れる精神は宗教的にして獨逸文學の特質の上に深く大なる影響を與へしものなりき。彼れが『メシヤス』を作するの考案を立てたるは早く一千七百四十五年に在り、其のシムルプホルテの學校を退く

時叙事詩の性質及び特色につき告別の演説を爲すや明かに後に大名を爲せる叙事詩を作せんとの意をほのめかせり。最も莊高なる題目、宗教心に對して最も高貴なるもの基督教的信仰の中心たるもの、救世主の苦惱、死、蘇生、升天、此等は實に彼れが當時より描寫せんと志し、題目なりき。かくて彼れは初代の基督教徒及びヒューマニスマニスマ等の叙事的作物、九世紀にもせられたる救世主に關する作、十五、十六世紀に現れたる宗教的劇詩、十七世紀の叙事詩、抒情詩並に散文、及十八世紀の聖樂等を涉獵して其作の地を成しぬ、而して其の負ふ所の最も多かりしは聖書の傳説に據れる作の中最も高大に最も成功せるものといふべきミルトンの失樂園なりき。地獄に關する細密なる叙寫、惡魔の勸誘、惡魔間意見の違異、惡魔等が容貌を變ずることによりて懲罰せられしこと、惡魔及び神使等の飛舞逍遙する宇宙の通路、及び篇末なる最終裁判の記事の如きはまさしく彼れのミルトンに負ふ所なり。されどクロップストックはミルトンの例に範りて自ら益すると甚だ多からざりき。ミルトンが地獄の記に次ぐに樂園を以てし、樂しき風物を以て慘憺たる情景を救へるに反して、クロップストックは筆を天國の光榮に起し、終りに見苦しき地獄を叙して吾

人をして嫌厭の情を起こさしめ、前者が枝葉の記事を延長せしむるを避けて常に首尾の一貫、全篇の統一、趣構の發展等に注意せしに引きかへ、後者は些末の描寫にかゝづらひて本末の調和、全篇の統一を亂し、また傍觀者の感情を雜へて、敘事發展の糸筋を攪せり。蓋しクロップストックの才は抒情的にして敘事的に非ず、彼れが『メシアス』の中に描き出だせる人物、惡魔及び天使は何れも特質個性といふべきものを具へず、其の動作の甚だ乏しきに加へて心たゆまるまでに冗長なる獨白——まかも其の性格を現すべきものなき獨白——を爲せり。此の詩篇(寧ろ幾多の詩の聯續といふべきもの)の最も善き部分は叙狀及び譬喩に於いて見ることを得、されど此等は其れ自身に獨立せる生命ありて引き離したるものとしていみじき價值あるのみ、全篇の調和に於いて加ふる所なし。例へば彼れがサタンのユダスを誘惑せんとて疫病の如く近づきぬることを記せる條に曰はく

かくて惡魔(人を殺す疫病にも喩ふべき)は眞夜中ごろ、

なべて寝しづめる都府に降り來り、

人民は皆睡れり、唯こゝかしこ

燈火かゞけて學生の書讀める、

またをちこちに紅色の酒酌みて、

善き友のれもせて語る、或は木陰の小亭に、

靈魂不死の希望を語れる(あれど)、

嫁くごやがて寡婦となりし新婦等のわび歎くべき、

世の母の孤兒抱へ號泣きつべき、

やがて來む悲しき日をば誰れひこり夢みもせて

云々と譬喩の延長せる讀者をしてユダスとサタンとの事を忘れしむるに至るものあり、而して全篇の中かくの如きもの決して二三のみならず。されど其の部分につきていふ時は初めの諸篇の中其の譬喩敘景の巧妙にして雄健なる筆力、斬新なる創意の歎稱すべきもの少なからず。聖靈が夢心地なるユダスを誘ひてメシアスの重もだてる從者に預かたるべき美はしき地上の光景を示せる條に次ぎて背反者に配分せらるべき土地の有様を叙して曰はく、

狹隘なる不毛の地、半丘崩巖充ち満ち、

荒廢して人跡絶え、荊棘いやか上に繁り、

烏婆玉の夜は長へに泣く寒雲を翻ひて、

地上を蔽ひ、荒涼たる岩かゞの裂目には

三冬の積雪絶えずもかゝる、
汝と共に此の寂寥を忍ぶべき永切の宿命うけし
夜の鳥は暗所を飛びちがひて
雷火に裂れし樹間に泣き叫ぶ、
此の荒地ぞ、是れ、ユダス！汝の所領なる、

と。叛逆者が其の謀を案出して其を實行せんと決意する條に至るや、其の萬有を
睥睨せる倨傲なる狀を叙して曰はく、

默せる驕慢をもて

サタンは眼下に彼れを睨下し、大派越え

恐ろしく駭駭の上に高く飛び、雲間より

波間見おろしめ、破船、屍骸

散り布きて充ち満ちたる其の波間を、

と譯文拙けれど、彼れが抒情的筆力と巧妙なる叙景とを、かすかにも認め得べきか。
さばれ趣味ある叙景雄健なる對話が其の實際に存するより更に多く存在すども
叙事詩としての立場より見る時は其れらは『メシヤス』の價値を増すに足るべきも
のにあらず。蓋しクロップストックは如何なる詩人も失敗せざるを得ざる所に失

敗せるなり。詩才は吾人の心作用の中に就きて最も高上なるもの、一なり然れ
ども其は決して最も高上なるものに非ず。詩人の想像力が如何に秀逸非凡なり
どもクロップストックの撰べる如き題目を取るに至りては失敗せざること困難なる
べし、此等の詩材はあほむねの詩才を超絶すればなり、シエラーの彼れを評せる語に
曰はく、クロップストックは實に叙事詩作家の假面を被れる抒情詩人なり。彼れが徹
頭徹尾抒情詩人の分を守らず、また例へばアンゲルス、シレショウスの如く基督の苦
難の同情的註釋に専心せざりしは惜しむべしと、當たれり。

クロップストックの才は要するに抒情的なり、而して其の詩の最も善きものは短歌及
び讚美歌特に其壯時の(即ち彼れが古代詩歌の韻律を研究して語句の换位倒置を
爲さとりし以前の)作に於いて見ることを得。其の短歌の最も巧妙なるは到底翻
譯すべからざるものあり蓋し其の價値のあほむね形式の上に存すればなり。彼
れが其の友に寄せたる哀歌及び短歌の多くは餘りに多感的なれども、是れ當代の
作家に行き亘りし通弊なりき。其れらの詩中に涙もろく感深き語句の多きや嘆
息、號哭、泣きはらせる眼等の語句がさにもあらぬ無主義些末なる凡べての場合に

用ひんとて備へちかれたるの觀あり。されど其の友誼及び戀愛に關する短歌の中には此等のかよはく多感的なるものゝ外に多くの高尚なる雅作あること勿論なり。

クロップストックの作は獨逸文學の興起に與りて力ありし多感的思想の煥發に最初の動機を與へたるものなり。彼れが詩歌に於ける特殊なる技術は感情を喚び起す力に在り、彼れは人性の根底を盪動する甚深不可言の情緒を現さんと力め、而して此の點に於いて幾分か成功せり。彼れはまた、たゞの言語が其の響きの妙力によりて人を動かすこと章句配合上の効力に優るものあるを知り簡勁なる數語によりて能く最も人を感ぜしむべき自然美を描きたり。

クロップストックが宗教心厚くして其の詩歌を作するや世間的の事に觸るゝこと稀なりし故を以て多く成功の機會を逸せしは彼れの爲めに惜しむべきことなり、例へば愛國的詩歌の如き彼れが之れによりて更に廣く通俗なる範圍に訴ふべき詩形なりき。其の壯なるヤクロップストックは其の宗教的熱情と共に父より受け繼げる愛國の熱情の燃ゆるが如きを覺え、この熱情は一千七百四十九年フリードリヒ

大王を頌せんともものせられたる『戦争の歌』(Kriegslied)となりて現れき。此の歌は現實の生活に關し現實的熱火に充ち滿ちたるものにて普漏士王に、崇拜的頌讚を捧げしものなりしが、此の種の思想は長く彼れの保持する所とならず、クロップストックが詩人としての熱情欲望はやがて臣民としての愛國心を抑壓せり。蓋し彼れがフリードリヒに待ちし希望破れて大王は國民詩人等(國語にてもものせし詩人といふほどの義)を保護すると能はず却りて佛國の自由思想家等を禮遇したりしを以てクロップストックはこゝに國王に蔑視せられたる獨逸國詩を興し國王及び自由思想家等に嘲られし宗教の爲めに盡くさんと堅く決心せるなり。かくて彼れは活きたる現實を見捨て材を死にたる過去に取りて其の愛國的熱情を描き出ださんとし『戦争の歌』は新にHenry the Fowlerに獻げられ、而してシュルキの將軍アルミニウス(Arninius)は短歌及び劇詩によりて頌せられたり。加之彼れは古代の詩人を模倣することを止め、普く知られたる希臘神話に於ける鬼神の代りに北方神話に於ける神々を用ひて一劇詩を成せり。此の神々の名は當時何人も知らざりしものにして彼れは註釋をもて其を書中に説明しき。彼れはタシタスの記載せる

語バルディウス (bardius) なる古チートン人の鬨聲は古昔バルツ(詩を作りて自ら誦吟せし古の詩人)のものせる戦争歌に關係ありとし、而してかゝるバルツのことはケルトの詩中に見ゆるを以て彼等はまた古代の獨逸にも在りけんとして、此の獨逸の古代史に基ける劇詩を命名して『バルディエ』(Bardiete)と云へり。彼れが一千七百五十二年にもせし短歌『Hermann und Thusnelda』(ハルマは「バルディエ」の主人公なり)は問答牒の物語歌にして彼れが傑作の一なりしが、一千七百六十九年、一千七百八十四年及び全八十七年に順次に其の稿を脱したる『バルテ、テ』の三篇『Hermann's, Schlacht: Hermann und die Prinzen, 及び『Hermann's Tod』は場の上に上す劇としては全く用なきものにして唯其の最初的一篇のみ多少詩歌的意匠の見るべきあるのみ。要するにクロップストックが劇詩の注意せらるべき價值あるは其の企圖の善良なる點に在り、即ち摸倣を斥けて國民的獨逸劇詩を創せんとせる企圖に在り。

クロップストックが文學上の經歷は一見甚だ奇異なるが如くなれども、其作はほほむね當代に行き亘れる傾向を表現し、また多くの作家に摸倣せられたり。彼れが古風シカ的短歌は、ギゼーケー(Giseke)ラムレル(Banler)ゲッツ(Götze)及時を同じうせる多く

の青年詩人等に模倣せられ、彼れが無韻の韻律の自由なる運用はグーテによりて學ばれたり、又彼れが聖書によれる叙事詩はツィリヒの詩人に繼續せられたり。クロップストックは其の生時に於いて已に多くの摸倣者を得、また多くの影響の時を文界に與へたれど、巨細に其の性行及び著作の影響を知らんには彼れが死後の文學に顧みざるべからず。彼れの叙事詩はやがて讀まれずなりにき、されど其の愛國的熱誠と基督教的感情とは依然存留して文士の頭腦に入れり、彼れ自身の生涯は善く文人の行ふ所は其の教ふる所と調和せざるべからずといふ信仰と一致しき。彼れは詩歌を遊戯と見做すの論を破らんと力めたり、彼れが自國の古英雄、古神話を取り來たれる企圖は詩歌の上より見れば不幸にして終に失敗に屬せりきと雖も、此等は正しく彼れの獨立の氣象及び愛國心の厚きを證する者なり。古來何人も自國の言語を愛するとクロップストックに過ぎたるはあらざるべし、彼れは其國語につきて誇稱し過ぎたるに似たり。彼れ曰はく、現存する凡べての國語をして獨逸語の界に入らしむる勿れ、其はタシタスが我れ等のとにつきて作せし上古に在りし如く今も其まゝに存す——獨立して、混ざると又並ぶべきものなくと。

彼れはかくの如く國語を愛せしより其の短歌の一つに於いて烈しくフリードリッヒ二世が國詩を顧みざりしを難じき。但しクロッパストックは深く王が心づくしの存する所を知らざりしを以て其の非難は當を得たりといふことを得ず、王は國民の存立が國文學の興起に先だゞざるべからざることを以て正當に之れに答ふるを得べくまた佛蘭西及び埃太利の隱謀は王が國詩に對して冷淡なりしことの辯解となりぬべし。彼れはまた大に當時の懶惰放肆なる諸侯伯を嘲笑しまいたく自由を愛して熱心に亞米利加の獨立戰爭に謳歌し、佛蘭西革命の宣言に歡呼せり。其の短歌の一に曰へらく、あはれ、汝佛蘭西人よ、余若し曾て我が國人が汝の例に従ふを警めたりとも、願はくは余を宥せ、今や余は汝の例に倣はしめんとして彼等を懲慝しつゝありと。彼れが意氣昂として此等痛快なる詩をもせしは其齡已に六旬に達せし時なりしが、彼れは其の後尙ほ長く生きのび、佛の革命に對する希望の破れたるを見て深く悲しめる色ありきとぞ。彼れが此の希望の失敗を詠ぜし短詩は熱情溢るゝばかりなれども寧ろ粗笨にして散文的なるの嫌ひあり。ヘーゲル曰はく、クロッパストックの偉大なるは本國、自由、戀愛、友誼及び宗教に對する

彼れが思想の上に在り。或方面より見れば彼れの詩才は當代に存せし幾多の事情によりて制限せられたり、されど熱誠にして丈夫らしく且つ獨立を尊ぶの性格より見るときは、彼れはシルレル前に其の比を見るべからざる人物なりと。是れヘーゲルが其の抒情詩論講義の結末に於いてクロッパストックを評せし語にして彼れは明かに抒情詩の方面に於いて彼れの價值特色を認めたるなり。要するにクロッパストックの偉大なるは抒情的方面に在りて、其の獨逸文學にいたせる功勞は國民的といふことに着眼したる點に在りとす。次ぎに述ふべきは國民文學の鼓吹者、大批評家

レスニング

なり。ゴットホルド、エフライム、レスニング(Gothold Ephraim Lessing)クロッパストックに後るゝこと五年、ギーランドに先だつこと四年、一千七百二十九年一月二十二日を以て上ルザティアなるカールメンツに生れき。父はルーテル派教會の牧師なり。彼れの學業は一千七百四十八年マイゼンなる古文學院に於いて始められ、一千七百四十六年にはライプツィヒの學校に入り、次いで一千七百四十八年にベルリンに遊

びき。この七年間に於いて彼れの涉獵攻究せし所は頗る廣大なりしかど、其の胸中には猶ほ閑日月の存するありて此の間演劇に對する鑑賞眼を養ひたり。一千七百五十三年より同六十年に至る八年の間彼れは重にライプツィヒ及びベルリンに住し、同六十年にはベルリン府の學士會員に選舉せられしが、間もなくシレゾア朝廷の顧問に任せられてドレスラウに逗留せり。任地に在りし間レッシングの生涯は前とは異なりて讀書に専らならざりしかば、彼れは全く學問を抛ちて博徒となりぬなどあらぬ世評にかゝりて、多少の令名も此等の訛傳の爲めに打消されたる趣ありき。されどドレスラウに停まれる五年の間に彼れは劇詩『ミンナ、フォン、バルヘルム』(“Minna von Barnhelm.”)を草し、また其の他の作の準備を爲せり。一千七百六十七年には國民的演劇を打建つるの企畫を助けんとてハムブルクに行き有名なる劇評雜誌『ハムブルク演劇評論』(“Hamburgische Dramaturgie”)をものせり。彼れが此演劇革新の希望は終に失敗に歸せしが、會、ザルフェンビュッテルの圖書館員たるべき委囑を受けしかば、彼れは喜びてハムブルクを辭しぬ。此の大圖書館に藏せる書籍はレッシングの志業を助けて大に其の眼界を擴くしたり。一千七百七十六

年彼れはさきにハムブルクにて相知れる可憐なる寡婦と婚したりしが、契り永からず、一千七百七十八年に其の妻との死別は彼れが生涯に於ける最も大なる悲嘆の一なりき。其後彼れは唯理學徒ラショナルリストライマールスがものせる斷篇を出版せしが、此の事端なくもレッシングをして神學に關する論争の埒内に入らしめ、彼れの晩年は頗る之れが爲めに累はされたりき。彼れまた宗教上の寛容に對する自家の所見を公にせんが爲め劇詩『ナタン』(“Nathan”)を草して一千七百七十九年に出版し、一千七百八十年には『人類の教育に關して』の論文を公にせり。後者は今日に於いても猶ほ自由神學主義の爲めにものせる論說の最も明瞭なるものとして珍重せらる。彼れが晩年の精勵と其の烈しき論争とは大に其の健康を害し、其の快活にして交際のなりし氣風は全く亡せ、多くの烈しき病魔に襲はれたる後、一千七百八十一年二月十五日遂に不歸の客となりぬ。此の偉大なる批評家の彫像は一千七百九十六年ザルフェンビュッテル圖書館の側に建てられ、更に巨大なる他の彫像は一千八百五十三年にブルンヌブリックに建てられたり、されど彼れが真正の紀念碑といふべきは十九世紀を賑はし、最良なる獨逸文學なりとす。彼れと時を同じうし若しく

は彼れに後れて出でたる獨逸の大詩人の著作にして半ばレスニングに負ふ所なきものならずといふも誣言ならず。彼れの全集は初め一千七百七十一年より同九十四年の間に於いて出版せられ、更に善き全集は一千八百三十八年以降同四十年の間に出版せられたり。

レスニングの性行は其の在世の間及び其の死後に於いて幾多の狹量的非難を受けたれども、其が真正の品徳行爲は其の著作及び書翰によりて明かに知ることを得べし。特に其の書翰の示す所によれば其の兄弟に友に、朋友に信なりしこと明かなり。文學的改革者としては彼れは當代に充ち満ちたる偏狹なる書齋若しくは抽象的又専門家的なる大學教授等と其の選を異にし超然時表に卓立して其の鋭利周到なる評論の筆を揮ひき。但し彼れが論争の激烈に過ぎたることありしは事實として許さるべからざれども其の徹頭徹尾公平なる真理の探求者の本分を守り、其の批評が破邪顯正を主眼として人物の攻撃を目的とせざりしは疑ふべからざるなり。

レスニングはクロップストックの長へに若かりしに似ず弱冠にして早く已に成熟の期に達し、またクロップストックが發達の遅々たりしに反して迅速なる發達をなせり。

レスニングの生涯は確實なる進歩發達の生涯なり、而して多方面なりながら散漫ならざりし彼れの攷究は彼れが富贖なる性質の中より漸次に新しき能力を開き出だせり、其の知識涉獵の該博にして、まかも獨創の見ありしことに於いて、彼れ亦アラストテレーヌ、ライアニッツ等と並べ稱せらるゝに足るべし。

レスニングの最良なる述作は之れを大別して劇詩、批評及び訓話の三種となすことを得べし。蓋し彼れは創作批評の才を兼ね、創作に於いても決して人後に落ちず特に其の劇詩の如きは獨逸文學の精華と稱へらるゝものなれども、其の本領にして、また其の國民文學の鼓吹者と稱せらるゝは要するに其が批評の方面に在るを以て、予は少しく詳かに彼れが批評事業を叙すべし。彼れの批評は文學、美術、教育、神學等の諸方面に於いて枚舉に遑わらざるばかり多かれど、其の重要なるは美術論と劇詩論となり、語を換ふれば『ラオコオン』と『ハムブルキッシェドラマツルギー』と是れなり。

レスニングは古來の批評家及び論争的作家の最大なる者の一人なりき。屢引用せ

らるゝ彼れが有名なる語に曰はく、

人間の價値は眞理を有することにあらすして、寧ろ眞理を追うて鞠躬する誠實なる苦辛に在り。吾人の力を擴大にするは眞理を有するにあらすして其れを得んとして探求する所に在り。人間に於いて漸次に生長する美性は獨り此の力あるのみ、而して眞理を有するにこそは却て人をして驕らしめ愈らしむ。神若し右手に一切の眞理を持し左手に活潑なる究理心を握りて其の一を撰べば云はば、左手なる究理心には常に迷誤の恐れありとの附言あるも、予は恭しく左手の方に跪きて其の賦與を乞はん……

と、以てレッシングが生れながらにして批評家の資格を具へたるを見るべし。彼れは自らを明かに其の反對者の地位に置くの能を有し、而して反對者の論に加ふる精密なる解剖をして自家の論旨を發展するの用を爲さしめたり。彼れが批評の体裁は自家の思想を將て作物に蔽ひ被らするが如くは見えずして、殆ど我れより持して臨む成見なきが如し、更に言ひ換ふれば彼れが批評の對境に臨める有様は自己の衣を以て對者を包めるが如くにあらすして猶ほ蜘蛛の糸を以て纏へるが如く、之れより彼れに加ふるあるとは見えず。彼れの批評は論理的にして又劇詩的なり、簡に云へば内在的批評なり。もろくの思想がそのづからなる順序に従

ひて相踵いで起こり、相談和し、論争し、終りに最も強き者勝を得て明かに其の勝利者たることを布告するに至る、かくの如きもの即ちレッシングが批評法なり。(このゆゑに當時の形而上學及び美學等を論せる學者の説に於いて普通なりし誤謬の對時はおほむねレッシングが評論の中に見出ださるゝを得べし)。要するに彼れが批評は一二學派の美學說若しくは美術論を根據とし自家の成見を以て作物に臨むことを爲さずして作自身の性によりて其の價値を判するにありき。彼れが批評の眼目とせる三問に曰はく、一、某著作は其の想能く詩歌の本質に合へりや、二、其の想を發展舒暢するの法能く獨逸國民の性情に適する、か、三、其の作に於ける形と想どが能く相渾融して美妙なる一個躰を成し、法則の首尾を貫くありて能く一個の組織を爲すかと。レッシングは常に此の標準によりて凡べての著作を評せるなり。

彼れは理論的及び教訓的著作と詩歌とを混同する批評家の誤謬を指摘すること、を以て其の評論を開き、ポードメル、ブライティンゲル等が賞揚して過分の價値を與へたる訓話(作物語)を貶して其の正當なる地位に墮せしたり。彼れは其の一論文

の緒論に於いて、詩人は(哲學的)系統を有し得るか及び抽象的眞理と感覺的詩語と相容るゝかといふ二問題を研究し、此の二者は抵觸して相容れざるものにして、古來詩形を以て哲學的系統を叙列したる例しはあれど律呂を附したる哲學を以て詩なりとはいふべからず、之れを作れる者また唯韻語排列者たるに止まりて詩人にあらずと説きて哲學と詩歌との界限を明かにしたりしが、また訓話フエーブルの性質、目的及び叙述法を説き、エソプ物語を以て其の上乗なるものとして以爲へらく、訓話に至要なるは其の簡潔にして精確なることなり、其が至美の文飾ともいふべきは毫も文飾を加へざることに在り。エソプ物語は假作動作の物語にして靈活なる實例を以て倫理上の通則を會得せしむるものなり。訓話の終極の目的は倫理の法則にして訓話中の動作は此の倫理的格法を讀者の心目に瞭然たらしむる活例たらざるべからず。訓話と劇詩及び史詩との異なるは、前者は動作を倫理の目的に局せしめて動作以外に目的を置き、後者は動作以内に目的を樹て、動作其のものを主眼とするに在り。即ち訓話は詩歌倫理の兩界に跨れるものなりと。而してレスシンク自らの訓話は著く簡潔にして些の注釋をも要せざるほどに明晰なるものなりき。彼れが摸倣的作家を諷せる最も短き訓話の一に曰はく

猿、狐にいふやう、我が真似ること能はざるほどに伶俐なる動物あらば之れを示せ、狐答へていふ、汝を真似んと思ふほど卑しむべき動物は何處にありや、我れに語れと。

レスシンクはかくして詩歌と哲學との區劃を立て、また純粹の詩歌界より道德主義を却け、さて更に詩歌と他の美術(主として繪畫彫刻)との本領及び其の區劃を論定せんとして一千七百六十六年に有名なる大著『ラオコオン』(Laokoon)を公にしぬ。ギンケルマンが希臘の美術を論ぜる中希臘彫刻の名品ラオコオンに關する一節あり、其の意に曰はく、希臘美術の妙處は高潔にして靜寂なる威嚴の具はれるに在り、希臘の彫像は其の何れを見るも情海波瀾の中に於いて隱然大度量の蔽ふべからざるものあり。ラオコオンの像の如きも其の猛烈なる熱情の中に在るにも拘はず、偉大沈着なる度量の顔面に髣髴たるものあり。其が身軀各部の筋肉纖維は悉く苦痛を現し、唯下腹部の状のみを見ても觀者自らが苦痛を感ずるが如き想ひのせらるゝに、此の苦痛の顔面態度に發する所甚だ激烈ならず、ラオコオンの彫

像はプーショナルが詩中のそれの如く悲鳴をあげずして纔に呻吟の微聲を洩らすが如し。ラオコオンの像に於いては身軀の苦痛と精神の高大と相伴ひて其の全面に充ち、兩者の配合平等なり云々と。レスニングは此のギンケルマンが語を假り來たりて繪畫彫刻等の成形的美術と詩歌との本領界限を論じたるを以て此の書に負はするに『ラオコオン』の名を以てしぬ。

ラオコオンの一篇其の主眼とする所は詩歌及び成形的美術の界限を論じて前者は動作の連続を叙するがゆゑに苦痛の頂點をも寫すことを得れども、繪畫彫刻は唯一時一處の動作を寫すに止まりて永く之れに停住するものなるがゆゑに激甚なる苦痛を寫すべからずといふにあり。其の論の大意に曰はく、詩人プーショナルが希臘の僧侶ラオコオン及び其の子が大蛇と闘ふを寫すや、苦痛に堪へかねたるラオコオンをして聲高き悲鳴を擧げしめられたれども、同じ僧侶の破滅を寫せる有名な彫像に於いてはラオコオンの顔面には甚しき煩悶苦痛の状態なし。古來之れに就きて論ずる者或は彫刻家が詩人の如く大苦痛の狀を寫さざるを難するものあり、或はプーショナルの詩を以て希臘美術の眞意を失ひたるものとするギンケルマ

ンが如きあり。されど是れ皆詩歌と彫刻との異同を辨へず、同一の標準によりて二者を規するの誤りに出づるものなり。シモニデスが畫は無聲の詩にして詩は有聲の畫なりと云へる語及び詩は畫の如くなれと云へるホレオスの言、ともに詩と畫とが人心に感化を及ぼす點に於いて相類似する所あるを示せる名言なれど、二者を混同して其の特質界限をひとしなみに見たるは非なり。近世の批評家が此等の言に泥みて兩者の異同を辨へず、或は繪畫彫刻の狹隘なる範圍に詩歌を局せしめんとし、或は繪畫彫刻をして詩歌の廣潤なる領分を犯さしめんとするは大に誤れり。抑も繪畫の事物を描寫するや其が取るところの手段は大に詩歌の描寫と異なり、詩歌は序を、おうて出來事を、敘述し、行くものなり、繪畫及び彫刻は、共在する物象を表現するものなり、一は空間に於ける形象、色彩を以て事物を摸し、他は時間内に連續する言語音調を以て出來事を寫す、一の材料とする所は眼を以て見るべき物軀なり、他の材料とする所は時間の中に發展し行く動作なり、但し繪畫彫刻も物軀を寫して動作を想見せしむること能はざるに非ず、詩歌はた動作を叙して物軀をも想見せしむるを得ざるにあらぬと、幾多形軀の美を摸し同時に並び存

する諸部分を一目の下に通観せしむるは繪畫彫刻特得の長所にして推移變遷し行く動作を叙するものは詩歌の特色なり。希臘の彫刻家がラオコオンの苦痛を摸するや、其の實際の煩悶に比して顔面の沈靜なるが如きは、彫刻の本性唯之れを然らしめしのみ。詩歌に於いて激烈なる苦痛を描寫することの許さるゝは其れの直に過ぎ去るがゆゑなり、其の繪畫彫刻に於いて許さるべからざるは一状態の永久に住着し居ればなり。フィンケルマンが靜寂なることが希臘古代彫刻の主要なる特質なりと云へるものは是に於いてか理ありといふべし。蓋し繪畫彫刻と雖も連續せる事柄の中の一部を現し觀者の想像を以て其の前後を補はしむることを得ざるにあらず、されど繪畫彫刻の動作を寫すといふはかくの如きのみ、二者の詩歌に類似せるは唯是れ丈なり。また一方に於いては詩人が動作と共に物體をも現し得べく、其の敘述的形様を物體に加ふる時に於て彼れは繪畫彫刻の領分に觸るゝことを得れども彼れは永く一物體の描寫に住着すべからず、語を換へて云へば畫師彫刻家が輪廓、色彩、蔭影等を用ひて詩人よりも一層成功的にもし得べきことを詩人は言語調節にてもせんと試むべからず。今若し彫刻家をして

イソルの詩に倣ひて其の悲鳴を揚ぐるの像を作らしめんか、其の口を開きたる顔面の醜きは更に云はず、之れを見るの初めに於ては、或は觀者の其の苦惱を思ひて同情を起すものあらんも、忽ち其の醜狀を見るに厭きて之れに對する同情は苦痛に堪ふること能はざる薄弱を笑ふの情を變せん。但し口を開きて悲鳴を揚ぐるは苦痛の極に達したるものなり、而して事物の極度は吾人に想像を運らすの餘地を與へず、是を以て觀者は彫像に現れたる烈しき苦惱を見て更に想像を以て之れに加ふること能はず、是れまさしく觀者の想像を束縛するものにして、其の直に倦厭を來たすべき所以なり。且又實際に於いては一轉瞬に變化推移して其の跡を止めざるものも、之れを彫像にもする時は固定不變のものとなるがゆゑに、之れを見るの度重なるに従ひ背理の感を起こさしむること益甚だしく、之れに對する同情の消え失すると共に終には之れを嫌忌するに至るべし。されど詩歌は之れと異なり、イソルが詩中のラオコオンが悲叫したりとて、誰れか其の開きたる口の大なることを想ひ起こさん、誰れかは之れが爲めに其の面相を崩したることを懷はん。詩人は繪畫の如く其の描く所を一瞬間に集むるを要せずして順次

に動作の發展を叙し得るが故に、其の中なる一節を切り離していふ時は或は讀者の感情を害するものありとも、其の推移し行くことによりて若しくは其が前後の關係によりて之れを妨ぐこと難からず。このゆゑにラオコオンをして叫ばしめたるはゾーザルの失敗にあらず、ラオコオンを叫ばしめたるも彫刻家の拙なるに非ず、各自の技術の範圍内に於いて正當なる表現を爲したるものなり。

要するに繪畫と詩歌とは同じ家に住まふ姉妹の如し、されど二者の本領界限は明瞭に區劃せられざるべからず。「若し我れホメーロスが實例によりて其が堅固なる證據の存するを見ずば、我れは我か此の理論を信ずることなかるべし」。ホメーロスの『イリアドス』を見よ。彼れは事件動作の發展に就きては精細なる叙述をなしたれども、物語の中に在る物體に關しては曾て延長せる叙述を爲したることなし。例へば其の船に就きて叙せる所は唯「黒き舟」うつろ舟若しくは「いみじく漕ぎゆく黒き舟」といへるのみ、定着不動の物體に關してホメーロスは其の他を云はざるなり。されど彼れが船に關する動作若しくは動作の聯續例へは漕ぐこと、乗船上陸等をいふや、若し畫家をして其の全體を畫かしめば數葉をものせざるべからざるほどに精細なる叙述を爲せり。彼れがアガメノンの笏を叙するや其が黄金より成れること若しくは彫刻飾付の美なることを描かずして、ゾルカン冶場に鍛へられて以來傳へて終に彼れに歸せる歴史を叙せり。繪畫と詩歌との本領及び界限豈に甚だ明瞭なるにあらずや。

以上はレスニングが名著『ラオコオン』に於ける所論の大略なり。此の書は其の批評法を以て、及び其の精細なる美術論を以て現今なほ世界の珍とせらる。レスニングはかく美術論に於いて功勞あると共に演劇の批評に盡くし、もの亦決して少小にあらず、而して獨逸の文學に影響を及ぼしたる點に於いて其の演劇論は彼れの手に成れる論著中の白眉と稱せらる。此の演劇論は定期刊行の劇評雜誌にして、題名を『ハムブルク演劇評論』(“Hamburgische Dramaturgie” 一千七百六十七年以降同六十八年まで發行)といふ、中に論ずる所の主要なるもの三、即ち佛蘭西演劇の攻撃、シェイクスピアの稱揚及びアリストテレスが詩歌論の解釋に就きての論難主として三一致の論にして、第二と第三とは其の中心たる佛國演劇の攻撃に附帶せる議論なり。

レスニングが佛蘭西演劇に對する攻撃の中、其の鋭鋒の最も多く加へられたるはブルテールとコルネーユとなりき、蓋し此の二大文豪は作家として當代に君臨せしのみならず、其の理論に於いても一世を左右せしがゆゑに、彼等がなせる議論が文學の發達を害すること大なるを以てなり。レスニングとブルテールとの關係は、善かりしにせよ、惡しかりしにせよ、彼れが生涯に於ける重大なる要素なりき。彼等は曾ては室を同じうして相對し師弟に似たる關係さへ其の間に存せしが、後には皆に主張のみならず私交上に於いても相反目するに至れり。レスニング曾てブルテールが著“Siècle de Louis XIV.”(路易十四世の時代)の原稿を、出版に先ちて其の執事より借り受けたりしが、他人に對してこれを秘せざりしゆゑを以てブルテールの意を害し、やがて其の交りは破れぬ。但し此の破裂なくも、彼れは終にブルテールの風下に居ること能はざりしならん、ブルテールが宗教に對する嘲罵か彼れを服するに足らざるはいふ迄もなく、其の多くの弱點が到底此の鋭敏なる觀察者の眼を免るゝこと能はざればなり、要するにブルテールはレスニングを獨立せしむるの楨杆たりしのみ。彼れがブルテールを評せる意に以爲へらく、ブルテール自ら

は佛國演劇の改革者たらんと欲せしならん、されど彼れは實際曖昧なる法則書の著者たるに過ぎずして、創作の才に於いてだに生熟の域を脱すること能はざりき、彼れの英國演劇を言ふや、アッティソンを過賞して甚だしくシェイクスピアを貶したれども、是れ唯影に向ひて戰を挑めるが如きのみ、彼れは誹謗しながらシェイクスピアに摸したるもの少なからず、而して其の摸倣や拙にして到底沙翁の才に及ぶべからざること明かなり。彼れの悲劇『セミラミス』を見ずや、是れ正しく沙翁の『ハムレット』に出でたるものなり。されど曲中の陰鬼をして白晝稠人満座の中に現れしめたるが如き、之れを沙翁が老ハムレットの幽霊を深夜に現れしめ、之れに對する者をハムレット一人ならしめて看者の注意を集注せしめたるに比す、其の巧拙豈日を同じうして語るべけんや、蓋し幽霊の如きは夜陰寂寥の間に現じてこそ觀者の毛骨を悚たしむるを得べけれ、また之れに對する人を一二の少數者ならしめてこそ觀者をして専心に之れに同情せしめ得べけれ。今則ち然らずして白晝に於いてし衆人の前に於いてす、其が觀者の嗤笑を買ふもとより、其のところのみ、ブルテールと雖も全く之れを知らざるにはあらずらんも、唯新奇を衒ふに急なるよ

り此の擧に出でしなるべし。冷淡なる思索家デルテールがシェイクスピアを摸して終に其の皮相に止まれる、憫むべきかな。

デルテール其の悲劇『ザイール』に就きて曰ふ、數多の貴婦人は我が悲劇に戀愛の分子の足らざるを難ず、我れ之れに答へて曰はく、悲劇は戀愛に至適なるものにあらず、されど若し切に戀愛的主人公を望まば、予は此の種の作をものせんこと敢て他に譲らじと、『ザイール』は即ち此の言に則り十八日に作して喝采を博したるものなりと。レッシングは之れを評して曰はく、或批評家は『ザイール』を以て戀愛の真相を寫したるものなりと云へれど、非なり、是れ唯だ痴情的戀愛の表面的描寫に過ぎず、戀愛の悲劇としては予は唯だシェイクスピアの『ロメオ、エンド、ヂュリエット』あるを知るのみ、ブルテールが艶冶郎ザイールをして其の情念を吐露せしむるや頗る精妙なるものあれども之れを『ロメオ』に比すれば殆ど顔色なし、同曲なる嫉妬者オロスマンを以てシェイクスピアのオセロに比するもまた然り、或批評家はデルテールを評して彼れはシェイクスピアの悲劇が人を熱殺する火銃を奪ひ來たれりと云ひたれど、彼れの奪ひ得たる所は唯だ其の一小部分、而も光熱共に薄弱にして煙のみを吐く部分のみ。

『ザイール』が戀愛の戯曲なるに對し、『メロップ』は母の愛を除きては毫も愛情の分子なき戯曲なり。此の作は伊太利の詩人マッフェイの作『メロベ』を改作したるものにして、彼れは卷首に長文を掲げ陽にマッフェイを揚げて陰に自らを賛し、又其の友に送れる書翰及び其の友人間の往復書翰等いづれも此の曲を賞揚せるものを掲げ、更にランデルといふ假設の人名によりて陰に陽に自家を賞賛しき。レッシングは仔細に此の卑怯なる術數を指摘し、ランデルとデルテールとの異名同人なることを暴露し、此の佛國の文豪は一の虚言者なりと斷じ、『メロップ』の脚色は希臘のイリピテス之れを案じ、マッフェイ之れを改めたるものにして、デルテールがそを踏襲せる跡の顯然たるを難じ、さてランデルの言を擧げて三一致の論に及びて曰はく、『ランデル』はマッフェイを難じて曰はく、マッフェイの戯曲には往々齟齬と齟との間に聯絡なくして舞臺に空隙を生じ、又其の人物の出入に些の理由の存せざることあり、是れ現今に於ける最下流の作者に對しても許すべからざる重大なる過失なりと。レッシング之れに對して曰はく、是れ果たして重大なる過失なるべきか、假令且らく

其の言に従ふも此の最下流の作者にだに許すべからざるもの果たして佛蘭西の作家に稀有のことなるか。但し佛蘭西人は一定の方式に従ふことを以て得意とすれども擅に規則の範圍を定め、之れに曲從するの餘り却て之れを守らざるに劣れることあるも佛人の常なり、ゾルテールは特に此の術に長け、其の意に任せてほしいまゝに美術の方式規律を左右するの妙を得たれども其の不調和なる或は自家撞着なる失態を演ずること亦少なからず。彼れが戯曲『メロップ』の舞臺をメロップの宮殿に置きたるが如き是れまさしく佛人の謂はゆる場所の一致に合せざるものにあらずや。既に場所の一致といふ、宮殿の中に於いても其の一部に限らざるべからず、若し又宮殿の全部を舞臺となし得べくんば一市、全國を舞臺とする亦た可なるべし。コルネーユは場所の一致に關する法則を擴めて單一なる都市は其の範圍を超えずとせり。さればゾルテールが其の『メロップ』に於いて或は正殿或は女王の室等屢、局面を變更せるは必しも難ずべきにはあらざれども、彼れは須くコルネーユが同一の幕に於いては頻繁なる變更を爲すべからず、同一齣に於ては更に不可なりといへる注意を守るべかりしに、之れを輕視して同一齣内に

於いて屢、舞臺を變更せるものは是れ豈場所の一致てふ法則と全く相反するものにて非ずや。時の一致に至りては更に甚たしきものあり、コルネーユは此の法則に關して一晝夜を三十時間まで延ばし得ることを許したれども、『メロップ』に叙する所は到底三十時間内に結了し得べきものにあらず、彼れが幾多の纏綿せる事變を無理にも短時間に收めたるは場所の一致といふ法則に合ひたりと云は、いふべし、されど其は單に此の法則而もほしいまゝなる法則に合ひたるのみ、其の精神は業に已に逸せるなり。コルネーユは齣と齣との聯絡を以て詩歌の裝飾なりとは云ひたれども之れを須守の規則とするに足らずとせり。ランテル(即ちゾルテール)が此の裝飾の欠けたるを以て最下流の作者にだに許すべからざる過失とせるもの、之れをコルネーユの説より一步を進めたる卓論といふべきか、はた戯曲の本領を忘却せる愚論といふべきか、此の疑問の決せられざらん間はコルネーユの説を捨て、ランテルに與すること能はず。人物出入の理由に至りても亦ゾルテールとマッフェーイとの間に著き徑庭あるを見ず、ゾルテールは曲中の人物をして一々登場退場の理由を明言せしめたれども、唯口して之れを言はしめたるのみ、人物をし

て之れを實際に履行せしめ、事件性格の發展を貫徹せしむる點に至りては未だ多く成功したる所なきなり。

佛蘭西人が時と所との一致を重んじてそを動かすべからざる法則となしなから便宜により多少之れを左右したることかくの如し、是れ規則を遵奉する者に非ずして、之れを蔑視しながら猶ほ之れに對する忠實を粧はんとするものなり。且つ彼等は時、所の二一致を以て當代希臘人より傳へ來たれる規則なりとすれども、其の實は然らず、場所の單一に就いてアリストテレスは一言も述べたることなく、時の一致に關しても彼れは單に叙事詩よりも短き時間を用ひ、能ふべくは太陽の一廻轉する間に其の局を收むべしと云へるに過ぎず、最も優れたる希臘の戯曲家等亦多く時、所の一致に注意せざりき。要するに戯曲に欠くべからざる要件は動作の一致(Unity of action)。現今の謂はゆる性格の一致といふに略、相似たりといふことにして他の二つは此の要件に附加せられるものに過ぎず、佛國の戯曲家が之れを忘れて却て此の附加物に重きを置けるもの正さしく戯曲の精神を誤れるものと云はざるべからざりと。此の三一一致説は佛國文學の流行と共に一時は獨逸の文

界を風靡したるものなりしが、之れが排斥に對してはレッシングの辯難最も多くありしものなり。蓋し三一一致の説はもとコルチーユの主唱せし所、而して其の基つく所はアリストテレスが詩歌論の誤解に在りき。レッシングがアリストテレスの論に根據し、秀逸なる希臘の戯曲家及びシキソピア、カルデロン等より引證して佛國批評家等の妄論を打破しつゝ、一方に於いて自家の説を打ち建てたるは、其がコルチーユに對する攻撃に於いてなり、此の爭論は詩人グライゼの『リチャード三世』の批評に其の端を開きぬ。

レッシング曾て『リチャード三世』を以て當時の文壇に於ける傑作の中に數へたりしが、其の少なからぬ欠點をも擧げたる中、アリストテレスの悲劇論に據りて主人公リチャードの性格を論じて曰はく、此くの如く憎むべく厭ふべき暴虐無道の怪物はアリストテレスの論旨に合ひたるものといふべからず。アリストテレス曰はく、悲劇は觀者の同情と恐懼とを惹き起すべし、而して至善の人と至惡の人とは此の目的に合せずと、それリチャード三世の如きは人面の惡魔ともいふべきものにして吾人に同じき所なき者なり、されば吾人は目のあたり其の地獄に陥りて

苦難を受くるを見るも少しも之れを悼むの情起ることなく、又さる災禍の吾人の身にふりかゝらんことも憂へざるべし、是れ此の戯曲が悲劇の真意に合はざる所以なり。かゝる戯曲をして秀逸の名あらしむる獨逸現時の劇界は實に果敢なきものなれども、百年以來歐洲に於いて最上の演劇を有すと自稱し、また現今獨逸文界の歎美摸倣を受けつゝある佛國も實は上乘の悲劇を有せず。但し佛蘭西人に真正の悲劇を作すべき能力なきにあらず、若し彼等にして已に上乘の悲劇を得たりと自信することなかりせば、其の秀逸なる作家等は已に悲劇に於いて最高の名譽を擔ふことを得しならん、彼等がコルチーユ、ラシーン等を得て無上の悲劇作者を得たりと信じ、摸範を之れに取りたるもの、是れ佛蘭西悲劇のはか／＼しき進歩を見ざりし所以なり。就中コルチーユは其の創作に附加するに偏狹なる學理を以てしたるがゆゑに、其の詩歌の發達を害したること頗る大なりき。彼れがアリストテレーヌの詩歌論に對して加へたる牽強附會なる解釋の要に曰はく

(一)「コルチーユはアリストテレーヌが「悲劇は觀者の同情と恐懼とを惹き起すべし」と云へるを解して曰はく、然り、然れども此の二條件が必しも常に同時に起ることの必

要なるにはあらず。同情若しくは恐懼の一を起せば足ることありき。コルチーユは例を自己の作に取りて之れを主張せり。

(二)「コルチーユはアリストテレーヌが悲劇は同情と恐懼とを同一の人物によりて起すべし」と云へるを解して曰はく、能ふべくんば誠に可なり、されど此の兩感情を喚起せんが爲めに多くの人物を用ゆるも可なりき。彼れはまた自己の作によりて之れを辨せり。

(三)「アリストテレーヌは以爲へらく悲劇は觀者の同情と恐懼とを喚び起して其の心の全体を洗淨せざるべからず」と云ふ。コルチーユは之れに附會して曰はく、悲劇は觀者の同情を喚起して以て其の恐懼を喚起し、而して此の恐懼によりて同情せられたる劇中の人物の不幸を招く基となれる情と同一の情を洗淨すべしと云々、是れアリストテレーヌの既に非ずしてコルチーユの私意なり、コルチーユは此の主義によりて悲劇を作し佛國の悲劇亦之れに據れり、是れ彼れ等が真正の悲劇を得る能はざる所以。

(四)「アリストテレーヌは以爲へらく、悲劇に於いて些も罪なき善人を不幸に陥らしむべからず、慘恒見るに堪へざればなり」と云ふ。コルチーユは解して曰はく、然り、かくの如くんば苦惱する善人に對して同情するよりも若惱を興ふる人に對して憎惡を感ずること大なるべし、而して作者の描寫至らざる時は此の憎惡憤怒の念同情を壓して終に悲劇の

眞意を害し観者をして満足せしむること能はざらん。されど詩人にして若し此の兩感情の配合を適宜ならしめ有徳者に對する同情の感をして惡人に對する憎惡の念より強からしむる時は有徳の人を不幸に陥らしむるも不可ならず。前者は慘憺見るに忍びざるが故に不可なりと云ひ後者は憎惡の念が同情の感を壓するがゆゑに不可なりといふ是れ正しくアリストテレスの意を曲解したるものなり。

(五)アリストテレスは不徳なる人物は同情をも恐懼をも喚起せざるが故に悲劇の主人公たらしむべからずと云へるに對してコルチーユは曰はく同情を喚び起すこと能はざるも恐懼を起すべきこと明かなり、蓋し觀者の中其等の不徳を悉く爲し得べしと信する者あざざるべければ、之れより生じたる不幸を見て恐懼の念を起すものあらざらんも、其等の不徳の一部が我れにも存するを思ひて其の不幸の我れにも降り來たらんことを恐るべければなりき。是れ恐懼とアリストテレスが悲劇論に謂はゆる心情の洗淨さを誤解せるものにして自家撞着の謬論なり。

云々かくて佛蘭西劇を排斥し、シェイクスピアを稱揚し、アリストテレスの眞意を辨ぜるもの、是れ彼れが『フムブルキッシュ・ドラマ・トールギー』の大略なり。但しレッシングは決して唯消極的に佛蘭西劇を排せるにはあらず佛の喜劇に對しては

十分に其の秀逸なることを稱せり。要するに彼れが評論の骨子を成せるはそれが獨逸國民の性情に合ふや否やといふに在りき。

レッシングは『ラオコオン』の卷末に於いて劇詩が諸種の詩歌の中最も高等なる旨を説いて曰はく、凡べての美術は直接に自然を表現することを目的とせざるべからず、而して唯だ言語を用ひて間接に自然を描寫し表現し得る所の詩歌は演劇に於いて高く直接表現の域に至り、人生を眞實に摸倣する程度に上ることを得と、以て彼れが演劇に對する趣味の如何ばかり深かりしかを知るべし。彼れは已に訓話の性質を論じ『ラオコオン』に於いて敘事詩の本質を説きしが詩歌の一部門なる演劇に對して理論的基礎を與ふことは彼れに取りて遙かに重要なることなりき。彼れは眞正の摸範として訓話に於いてはエソプ物語を、敘事詩に於いてはホメーロスを取りしが、演劇に於いて彼れの指導者となりしは理論に於いてはアリストテレス、實際に於いてはソフォクルスなりき。彼れが眞正の演劇を説くや、佛蘭西派と共に最も重きをアリストテレスの所説におき、又當時隆盛を極めて彼れ亦其中に養はれたるザルフ學派の哲學に左袒して正確なる定義を一切の

理論の基礎となし甚だしく之れを重んじたり。アリストテリースが悲劇論に於いて少なくとも彼れが之れに對する解釋に於いて、レスシンクは自ら演劇の眞髓に觸れたりと信じ、又此の定義はソフオクルスの戯曲と全く一致すと見たり、更に奇異なるは彼れがシェイクスピアの戯曲がアリストテリースの要求に全く相應じたりと見たることなり而して彼れが此の判断によりて吾人は獨逸人に類似せる國民(英國人)の文學が如何ばかり彼れに重んぜられたるか、又彼れの鋭利なる批評眼がいかに假面を透ぼして骨髓の眞を突き、種々の外觀の裏に眞天才を辨じたるかを見るべし。彼れ以爲へらく人物の性格よりおのづからに流れ出づる避くべからざる結果として人力の如何ともすべからざる事件を描寫しこれによりて觀者を驚懼せしめずして其の同情を喚ひ起こすと是れ悲劇の骨髓を成す所以のものにしてソフオクルス及びシェイクスピアの同じく有する所なりと。彼れは此の立脚地よりして獨逸當時の戯曲を批評しゴットシニット、コルネーユ、ラシオン、デルテール等を排斥せるなり。

レスシンクと時代を同じうしたる作家批評家にして彼れの批評攻撃に遇ひたるもの少なからず。上に述べたるデルテール、ラシオン、コルネーユ、グイゼ等に對する攻撃の外、クロップストック、ギンケルマン、ギーランド、ゴットシニット、ホードメル、ブライティンゲル等又其の手強き批評にあふことを免れざりき。レスシンクが一千七百五十八年にベルリンに歸るや翌五十九年より『文學書翰』(Literatur-Briefe)を發行し爾後繼續して一千七百六十五年に至れり。是れ彼れが對話的に又機智に富みたる書翰辭を用ひて時文を評せるものにて、レスシンクを知らんとする者の欠く可らざるものなり。中に就いてゴットシニット、クロップストック、ギーランド等に對する評論特に出色の文字なりと稱せらる。彼れがゴットシニットを攻撃せる意に以爲へらくゴットシニットの謂はゆる演劇の改良は一方に於いては不要の瑣事に關し一方に於ては寧ろ演劇を壊亂せるものなり、彼れ以前の獨逸劇界が卑猥沒理にして腐敗の極に達したる事に關してはゴットシニット必しも之れを看破したる第一の人に非ず、彼れは自ら之れを矯正し得と信じたること、に於いて時流に先たてるのみ、而して其の所謂矯正改良とは自ら佛蘭西の戯曲を翻譯し他人にも之れを奨勵し、在來の演劇を改めて佛蘭西風の新演劇となさんとしたること、是れなり。而して佛蘭西風

の演劇が獨逸國民の性情に適するか否かは彼れの問はざる所なりき獨逸國民の性情は佛蘭西人のよりも寧ろ英國人の趣味に傾けり高莊幽凄なることの獨逸人を感じしむること優雅溫柔なることの彼等を樂しましむる比に非ず今ゴットシマは殺伐蕪穢なりながら猶ほ此等高大沈痛雄壯等の分子を具へたる我が在來の戯曲を排して之れに換ふるに我が國民の性情に適はざる佛蘭西風の戯曲を輸出せんとす是れ豈に獨逸の劇壇を壞亂せるものに非ずやと。語往々にして危激に亘れる所あれど獨逸國民の性情に適せざるを以て佛蘭西劇を斥け又英獨二國民の性情の相合することを説ける所は千古の卓見なりといふべし。ギョランドが其の特長を捨て、歧路に陥れるを見ては曰はく彼れの長所は輕妙艶麗の文致に在りて未だ莊高雄渾熱情等を寫し得るの境に至らず然るに自家の長を捨て、ポードメル、フライティンゲル等瑞西學派の所説に投じクロツプストツクの鑿に倣うて基督教的情感を詠出し多感的文字センシティブの排列を是れ事とす思はざるの甚だしきなりと。クロツプストツクが其の盛なる感情に驅られ架空の想像を逞うして模糊茫漠たる畸形を描くを見るや彼れ又之れを指摘して忌憚する所なかりき。第一流

の作家に對して嚴酷に又精密に批評せよとはレスシングの固く保持せる主義なりき。

レスシングのラオコオンを公にするや、間もなく羅典學者、史學の大家にして『古代寶石の用』を著したる教授クロツツ(Kloetz)之れを批評せりしがレスシングは之れに答へて、評者が『古代寶石』の著を攻撃し、該博なる學者クロツツのいふに従へば不正當に且つクロツツに對する數多の攻撃文を草せり、此等は後に輯められ『好古的書翰』(“Anti-quarische Briefe,” 一七六八—六九)の名を以て出版せられたり。彼れがクロツツに對する攻撃文の調子は甚だ酷にして、其の書を批評するに當たりて著者をば詐欺を事とする放恣なる酒屋として記せることあり。但しクロツツは倨傲にして罵詈を事とする批評家なりき。

以上述へ來たれるはレスシングが批評事業の概略なり、之れによりて其の全豹を知るに足らざるはもとよりなれど其の一斑は窺はれつべし。約して云へば彼れは平淡なる描寫を特長とする詩人の熱情的或は超絶的詩歌を作することを斥け、ギョランドの例の如き、ゴットシマが獨斷的なる詩歌演劇論を排し又ポードメルの

詩歌論、クロップストックの叙事詩に於ける感情を喜ぶ傾向と美術的形式の欠乏と及び教話作者の卑俗に又散文的にして詩歌を説教の壇となさんとすることを難じたり。彼れが此等の述作は表面上もほむぬ消極的なれども其の眞實の企望は決して嘲弄的なるにもあらねば又破壊的なるにもあらず、彼れは打ち壊すと同時に建設せり、彼れはシェイクスピアが非凡の才を稱へて讀者の注意を惹き又奴僕的摸倣を斥くると同時に大に古人の大作を尊重すべきことを説けり。一言にして蔽へば彼れは獨逸の文學に與ふるに活き／＼たる精神を以てせるなり。ヘーゲル曰はく世界に於いて成されたる凡べての大事業は思想の力を通ほして成されたるなりと。レスシンクは此の言に強固なる證據を與へしものなり。翻りてレスシンクが創作を見れば此の點に於いても亦彼れの一世に卓絶せるものあるを見る。彼れの戯曲は其の正確なる手腕によりて描かれ、其の目ざしたる企圖は常に保持せられ又到達せられ、其の趣旨結構は常に明かに發展し行き曾て枝葉の描寫に走りて全篇の統一調和を害ひ或は趣旨の進行を澁滞せしむることなかりき。彼れが戯曲の場面は概ねいみじく組み立てられ、其の滑稽も亦輕妙に、其

の人物性格は多少時流に投じたる場當たりの氣味なきにあらねどおしなべて善く描かれたり。要するに彼れは假令其の創作に於いて第一流の作家たること能はずとするも其の精細銳利なる識見を用ひ幾多の得難き傑作を出だして其の主張を實にしたるもの蓋し又當時獨逸の文界に於ける刮目すべき現象なりと云はざるべからず。レスシンク戯曲をもつするや長く觀者嬉笑の具に供する娛樂的の作を以て満足せず、其の戯曲をして觀者に道德的感化を及ぼすべきものたらしめ、又之れによりて其の父に對し彼れが唯だ浮きたる目的に向かひて生涯を捧ぐるものに非ざること證せんとせり。かくて彼れは其の『フライガイスト』(『Der Freigeist』)に於いて氣高き神學者と尊ぶべき自由思想家とを並へ出だして自由思想家の教會に對する癖見が如何にして矯正せられしかを描き、『デー・エー・デン』(『Die Yuden』)及び『デル・シヤン』(『Der Schatz』)に於いて又世教に裨益する底の主意をものせり。されど彼れは決して詩歌を世教道德に隸屬せしめんと欲したるにはあらず。

レスシンクが主要なる戯曲の最も初めに現れたるは一千七百五十五年に出版せら

れたる『ミス、サラ、サムソン』(“Miss Sara Samson”)なり。此の作は彼れがメデアの希臘古話を近世化したるものにして其の注意せらるべきは主として當時に於ける中流社會の實狀を描寫せる點にあり。浮氣なる遊冶郎あり、其の初めに相愛せる婦人をふり棄て、他の女と逃走せり、されど彼れの意其の女と結婚せんと欲するにはあらずき。捨てられたる女は怨恨して彼れを追ひ、彼れを難詰し、其の兒を殺さんと嚇し而して終に其の競争者たる女を殺しぬ。之れを『ミス、サラ、サムソン』の梗概とす。彼れが此等の卑しむべく恐ろしき人物を描くや之れに被らすに英吉利人の假面を以てし、而して英國演劇例へばリルローが『倫敦の商人』の如きに倣ひて此の劇を成せり、篇中人物の對話には凡べて散文を用ひ而して其の對話は沸くが如き感情に充ち往々讀者をして顔を背けしむるに至るものあり。此の戯曲は獨逸に於ける中流社會を主題とせる悲劇の嚆矢にして、レスシングが之れをもつるや、此の種の戯曲は大に流行を極め、凡べて之れと類を異にするおほむねの戯曲を壓倒せり。蓋し彼れの始めたる此の新戯曲の盛行せるには種々の原因ありしが、作家が切に自然に忠實ならんと望めること、彼等が近世の中流社會若しくは貴

族社會の人物を描けるものが古代の君王侯伯の運命を叙せる作に比して遙かによく觀客の感を惹くべきを信せること及び彼等が當時流行せる佛蘭西風の擬古的悲劇を排斥せんと望めること等其の重なるものなりき。されど此等中流社會を主題とせる戯曲は不幸にも一方に於いては感覺の描寫に墮落し他方に於いては平凡なる事柄を寫すの弊風を生ずるに至れり。

『ミス、サラ、サムソン』はレスシングの生涯に於いて及び彼れが詩歌に於ける發達の徑路に於いて一期を畫せるものなり、而して世間が此の作に對する喝采の聲猶ほ彼れの耳邊に囁々たるに當たり、彼れは他の更に高等なる戯曲をもつての希望を懷いて一千七百五十五年の秋ライプチヒに歸りぬ。

一千七百六十三年レスシング『ミンナ、フォン、バルンヘルム』(“Minna von Barnhelm”)を公にす夫の作は獨逸の劇壇に現れたる最初の眞國民的戯曲と稱せらるゝものなり。此の作は材を七年戦争に於ける事柄に取れるものにして舞臺は伯林におかれ、事件は該戦争後間もなき出來事とせられたり、而して作中に現れ來たる人物はまた從來の劇に於けるが如く希臘人若しくは英吉利人の名を負はず又模型的類型の

塊にあらずして個人的性癖を具へ作者の経験によりて描かれ作者の同情を寄せたるものなりき。レスシンクは狭苦しき愛國心に就きては何事をも知らざりしが如く此の曲の全躰を貫ける調子は索遜に對しても普漏士に對しても兩ながら偏する所なかりき。其の梗概に曰はく、主人公テルハイムは普漏士の士官なり、彼れ戦争の當時索遜の貧村より軍資を募るの任を受けしが貧民を憫み自らの財を抛ちて其の負擔に換へたり。戦息み平和成りて後彼れは敵に對する此等の不當なる所爲を非難せられ、罪せられて軍人としての大不名譽を受け又甚だしき貧苦に陥りぬ。されど彼れの行爲は戦争の當時に許嫁しおきたる索遜の婦人ミンナの尊敬を得たるのみならず、其の他の人々にも亦いたく歎稱せられたり。ミンナ今や彼れを助け彼れと運命を共にせんとて進み來たりぬ、されどテルハイムは彼れ女をして彼れの不名譽と貧困とを共にせしむることを肯せざりき。ミンナは初めには理を説きて彼れの決心を酬さんとせしが其の甲斐なきを見て更に自らの困窮なる有様に陥り又保護し呉るゝ人を要すと詐り説きて切に其の意を酬さんと力めたり而して遂に彼の女の志望の達せしことはいふまでもなし。之れを一篇の梗概とす。此作が示す所の趣意は甚だ明瞭而して人物の性格、動作の發展亦頗る其の宜しきに合ひ(第三齣に於いて動作の進行は少しく澁滞したる趣あれど)又枝葉の小事件は一篇を貫ける大旨意の進行を助けて巧に運用せられたり。唯だ惜しむべきは作者が後再び此の種の戯曲をもせざりしことなり。次きに現はれたる彼れの主要なる作『エミリア、カロッティ』は全く之れと其の躰を異にするものなりき。

レスシンクがザルヘンピュッテルの圖書館に長たるや専ら諸典籍の涉獵に其の心を凝らしたりしが、ハムブルク演劇が彼れに與へたる印象は猶ほ盛に其の心上に活動し又戯曲の理想原理等を究むると愈、密なるに従ひて之れを作物の上に實現せんと欲すること愈、切なりき。此の結果として現れしは一千七百七十二年に出版せられし有名なる『エミリア、カロッティ』(『Emilia galotti』)なり。此の作は一千七百六十年以前に己に立案せられたるものにして彼れはゾーニアの古話に據りて之れを組み立て彼れが血氣盛なりし壯時にもせざる他の悲劇の如く之れに於いて自由を謳歌せんと欲せしか後に國事を劇とするの考案を捨て、舞臺を近世伊太

利の一小邦に變じ前案を近世化し改竄して此の作を成せり。此の作をものせる彼れの旨意は當時到る所に見られし腐敗貴族の罪惡及び暴虐の暴露に在りしが、其の文と意とは簡勁なる又寫實的なる筆法によりて大に力あるものとなりき。其の梗概に曰はく利己心強き君主あり其の非道猛烈なるや自家の欲望を満足せしめんが爲めには其の臣下の生命を物の數とも思はず。彼れ其の熾なる色情に驅られて思ふまゝに淫慾を逞うし一人の婦女を見捨て、は之れを狂せしめ、又新に嫁したる婦女を得んが爲めに許嫁の新郎を逆殺せり、而して其の新婦は其の身の辱しめられんよりは寧ろ死せんことを欲し、其の切なる望みにより其の父遂に彼の女を刺して汚辱より彼の女を救へり。劇中に現るゝ人物は何れも巧妙に描かれたり、性急にして一徹短慮なる、而も自らの性急短慮なるを憂ひて深く省み戒めたるエメリヤの尊ともむべき老父オドアルドが、弱く用心深からず又多少壓抑せられたる母、温順正直にして男らしき新郎、愛嬌あり貞淑にして世なれず又甚だ臆病なれども女子の貞操につきて固く決心せる新婦、優美にして才智あり美術に就きては能く畫師と議論を上下することを得、又其の他の高尚なる學術にも通

したれども自ら凡べての法律制度の上に在りと信じ凡べて其の欲望する所を遂げんとし淫行暴虐を逞うせる君主、彼れが最初の犠牲にして半ば狂したるオルシナ、專制的習慣に浸潤して正義名譽の觀念の全く消滅し、其の淫行の奴隸となりたる彼れの侍従マリテリ等、此等の人物は凡べて眼のあたり見るが如く描き出され、動作の進行發展はた彼れが『ドラマトゥールギー』の要求せし如く、おのづからに各自の性格より流れ出でたり。但し其の趣構は豫め構設せられ而して諸の人物、唯だ其の趣構を成さんが爲めにもなされたるの趣あり、又エメリヤの老父は其の娘を刺して暴虐者を殺さざる點に於いて非難せらるれど、猶ほ其の趣構性格の間斷罅隙なく發展して之れを場へのぼす上の難點をも難なく切り抜けたるもの皆、レッシングの天才を證するものといはざるべからず。彼れは『ミンナ』に於いて自家が喜劇の大家たることを證せると同じく、『エミリア、ガロッティ』に於いて其の悲劇の大家たることを證せるなり。『エミリア、ガロッティ』の作者として彼れは獨逸新劇壇を教ふる真正の師となれり。

『エミリア』の一篇、其の結末エミリア最後の段より傷ましきはなし。清淨無邪氣な

るエミリアは暴戻なる君主及びマリネルリが詭計のわなに陥りて免るゝ術なく
なりし其の時父オドアルドは其の女としばしの間會見することを得たり。此
の時彼の女を其の凌辱より救ふの道は唯た一あるのみなりき。

オドアルド、法律公義の假面を被りて——あはれいふもいまはしや——暴虐人等が
我が國より汝を裂かんぞ意志ふきは、一グリマルザイの家に汝をつれ行かんぞたくむき
は……

エミリア、彼等が妾を裂き行かんぞおもふ父上は仰しやる、我れを彼處につれ行
くぞや？彼等は意志ふき父上はのたまふ、あはれ我等に意志なしとあなづる如きかの
振舞！

オドアルド、それ思へば我れは氣も狂ふ心地がするぞエ。我れは之れを取つて(ヒ
首に手をかけ)二人の中一人は刺し殺し呉れん。

エミリア、刃を妾にかし給へ、父上。

オトアルド、イヤ、これは玩弄にする針ぢやないぞ。

エミリア、それを借し給へ、いかで借し給へて。

オドアルド、サ、遣らう、サ。

(ヒ首を渡す、エミリア取りて其の身を刺さんとするトタンオドアルド、刃を奪ひ
取る。……)

エミリア髪飾の薔薇を取り切れ、に裂き苦々しき調子にて)

エミリア、ア、ア、古へは其の女を助けんさて女の腹に刃をさほし再び生命を興へし
父もあつた。さりながら其れは古りたる物語！かゝる父も替ても在りしに、今や其の
如き人は一人もないか！

オドアルド、エ、少なくともまだ一人は在る(エミリアを刺し)神よ！あさましき
我がこの行ひ。(エミリア父の腕に倒る)

エミリア、傷め害はるゝ前に薔薇の花を破り去れる、其の手に接吻させて、父上！

(君主及びマリネルリ登場)

國君 淺ましき跡たらく。これ、エミリア——者共、誰れが彼の女を傷けたのサヤ

オドアルド、エミリアは仕合せて御座ります——ハイ全く仕合せて御座ります。

國君 (オドアルドの傍近く進み寄り)恐ろしや、こは何事ぞ。

マリ子ルリ オ、

國君 恐ろしの父や。其方を致したのサヤ。

オドアルド、下拙は薔薇の花が、吹きすさむ嵐の爲めに害はれぬ中に摘み取つてやつた
ので御座ります。これ娘。そうぢやないかいの。

エミリア 父上様、あなたではありませぬ妾自らが……

オドアルド、そうぢやない娘——此の世を去る今はの際にそんなと言やるなよ。それは
其方の父サヤ——其方の憫れな父サヤワイノ。

(エミリア死す。オドアルド一徐に屍を床上に移す)

いでや閣下此處へ御進みなさりませ、ようこれを御覽あれ、閣下は有ふれた悲劇同様下拙が自ら我が胸を刃に刺して相果つるご御待設けて御座りませう。さりながら其れは閣下が下拙の心を知り給はぬと申すもの——此處に(ト劍を抛ちて)こゝに赤になつた劍が、下拙が犯せる罪の證人に成つて居ります。イザこれより牢獄に——次きには宣告を受けん爲め閣下と共に法廷に、さて後に——彼方に行きて——あらゆる人間の裁判をさせ給ふ、かの全能なる判官の前に現れん……

暴虐なる侯伯及び腐敗せる貴族社會に對する攻撃の半ば此の悲劇の裡に隠れたること知るべし。

レスシングが戯曲的才能は未だ此の劇に盡さざりき。『エミリア』現はれて後七年、一千七百七十九年に於いて彼れは更に其の最後の戯曲『賢者なたん』(Nathan der Weise)を出だしぬ。劇場の實際に通じたること彼れをして『エミリア、ガロッティ』を草せしめたるが如く、神學上の論争は彼れをして『ナタン、デル、グイゼ』をものせしめたり。彼れは此の戯曲に於て寛容主義を主張し而して彼れが『サラ、サムソン』に用ひ、又其の當初の企圖には反しながら猶ほ『エミリア』に於いても襲ひ用ひたる散文

體を捨て、律語體を撰び最も高尚なる題目に被らすに莊重なる形式を以てし一視同仁の大慈愛の福音に律呂の妙力を加へんとせり。此の戯曲の主題は彼れがブルテールと交れりし頃『猶太人』といふ喜劇に於いて曾て一たび之れを試みブルテールも亦多少の思想を彼れに供せしものにして、其の大骨子はポッカッチが『三つの指環』の物語より來たれるものなり。この物語の梗概に曰はく、

土耳其王サラアン錢を要することありて、使を遣ふる猶太人に送り尙ほ彼れをして逃るゝ路なからしめんが爲めに『難題』を設けて猶太教、回教、及び耶蘇教の中彼れが何れを眞正の宗教として奉ずるかを脱かしたたり。富めると共に極めて謹慎なりし猶太人は直に之れに答ふるに先だち一の物語を述へんとを請うて曰はく、昔し東方の邦に寶石の指環を贈せる人ありき。此の指環には恭しく之れを帶ぶる者は神にも人にも愛せらるゝといふ奇異なる徳ありき。之れを持せる人死に臨みて其最も愛せる一人の子を呼びて指環を與へ、さて嚴かに命して曰はく、汝死せんさする時必之れを汝自らの子にして汝の最も愛する者に與へよ、決して汝が子等のあらゆる生得の權利に由りてすることなかれ。斯くて此の寶環は代々最も愛する子に傳へられたり。最後に此の寶環を有せし父は三人の子を持ちしが、何れも温良誠實の徳ありて父の彼等を愛すること亦差等なかりき。かゝれば父は其の子の一人にのみ此の寶環を與ふるに忍びず則ち之れに摸して父自らだに眞偽を辨別し得ざるばかりなる他の二環を作りて

之れを三子に分ちぬ。父の死するや三人の子は何れも同一の請求をなし、かども誰れもて何れか眞に家傳の寶環なるかを知り得るものなかりき。猶太人は之を三つの異なる宗教の場合に應用せり、サラアンは其の譬喩の眞理なるを認めて其の請を容れ、其の求むる所を得、爾來朋友として猶太人を遇せり。

ポッカッチェが此の物語は十一世紀の頃には西班牙王の事として持てはやされ十七世紀の頃には三人の兄弟はピーター、マルチン、及びジョンの三人とせられ種々に附會せられて傳播したりしが、レスニングは之れを用て十一世のに於けるが如く寛容主義を表さんとしたるのみならず之れと共に廣く仁愛の福音を傳へんとせり。されどポッカッチェのレスニングに供せる所はさまで多からず後者の前者に假りたりと見るべきは第五齣の意匠及び猶太人ナタンの性質が幾多の試験にあひて遂に勝利する危急の場とに過ぎざりき。レスニングが此の戯曲に於いて描ける猶太人ナタンは彼れが猶太人の友モーゼス、メンデルスゾーンの如く賢明善良なる者なりしが、彼れは更に趣味多からしめ又觀者の感を惹かんが爲め、其の妻及び七人の子が耶蘇教徒の爲め同日に殘殺せられ、自身も亦虐待せられて悲嘆に沈める者としてナタンを描きし。されどナタンは基督教の教旨に一致せり、彼れは又其の

敵を愛し、基督教徒の子を養ひ、而して此の養女たるレハは土耳其王の姪基督教徒の武士テムプラルの妹となれり。基督教徒と回々教徒とはかく家族的關係によりて結付けられ、而して一の猶太人は血族上の自然的關係によることなく、唯だ其の氣高き品徳によりて彼等の間に迎ひ入れられたり。

此の戯曲に於ける人物の行爲は『エミリア、ガロッティ』のに於けるが如く凡べて各自の性格よりそのつからに流れ出で、而して其の人物は活如として特殊の個性を具へたり。此の曲中に於ける人物の多くは彼れの親交し精察したるもの、模寫なるらし。ナタンは彼れの友モーゼス、メンデルスゾーンに似たる商人又哲學者なり、彼れは悲歎と克己の精神とによりて其の心を清め、又最も高き歎美を受くべき品徳を具へたり。彼れは廣く旅行して、而して賢明に富みて、而して吝かならず、彼れは實に指導者として哲學者として又朋友として比類なき人物なり。彼れが其の善しとし理想とする所の者に向かひて進むや細心なれども憶することなく、又惡人を除くの外凡べての者に向かひて其の寛容主義を擴張せり。彼れが養女レハ、レスニングの繼女マルヘン、ケーニヒを本として描けりと思はるゝを養育するや

質朴に誠實なれよと教へ、其の熟練なる薫陶法によりて彼の女が天性の純粹無邪氣なる有襟を保たんとせり。かくて彼の女の小どもらしきや成人に至りても戀愛に就きて毫も知る處なく戀人の彼の女に對する切なる訴も更に其の心に通せざりき。誠實敬虔なる彼の女の愛情は悉くナタンの一身に集注し而して彼れを以て眞實の父なりと信じたり。曾てナタンが他に在りし時恰も危険なる事の彼の女の身にふりかゝりしことありしがゆくりなくもテムプラルに救はれ而してナタンが歸りて彼女の迷夢を覺ますまでは救助者を天人と思ふほどに恍惚たりき。テムプラルは公明正義の武士にして、唯だ猶太人ナタンに對してのみ倨傲なる振舞をなしたりしもナタンの爲人を知るや否や其の感情は直に消え失せたり。蓋し彼れは若氣の情熱に驅られて無分別なる所爲に出でナタンを危うし又自ら若々しき悔恨に苦しむに至れるなり。サラテンは軍人若しくは事業的人物に於いて屢見るが如き情熱的且つ神經質なる人物なり。彼れは容易に激すれども之れと共に又容易に忘れ去るを常とす。彼れは其の兄及び妹を敬すること甚だ厚く、彼れの熟知せざる實際向きの事業に就いては常に謹慎利發なる妹の指導に従

ひたり恐らくレッシングが其の妻の指導に従ひしが如く。されど彼の女の彼れに及ぼせる影響は必しも善良ならず、而して彼の女が彼をしてナタンに對して取らしめたる行爲は彼の女及びサラテンの不信用を買ふものとなりき。ナタンの友デルフィッシュは質樸に善良に氣高き人物なり、彼れは乞丐とまでなりたれどもナタンは之れを呼びて眞正の王と稱せり、彼れは又土耳其王の出納役となりしも遂に逃れ出で、此のいまはしき職を去りき、レッシングが此の滑稽的人物(デルフィッシュ)を描くやメンデルスゾーンと相知れる猶太人の數學家に本つけるが如し。ナタンに養女を介せし執事又おなじくいまはしき職にありしが後には基督教會牧師に事へて信心深き生活を爲せり、彼れ亦ナタンの親友となり、彼れを尊敬して「神かけて、足下は基督教徒なり、而して世には未だ曾て足下よりも善き基督教徒あらざりき」と稱へき。

『ナタン』に於ける此等の人物は凡て多少意識的にナタンと同一の見を有せり、但だナタンは彼等の中にて最も賢明に且つ最も之れを言ひ表すに適せる者なりき。レッシングの示す所によれば此等の意見は彼れ自らが初年よりの意見、尙ほ詳しく

云へば彼れが初めに伯林に寓居せる以來の意見なり。曲中の主要なる人物は凡べて特殊の一宗教に執着することに反對し、又信仰及び國民性の異違を通ほして人性に普通なる基礎を求め、而して善良なる行爲を以て人生の最大目的と考へたる點に於いて凡べて相一致せりされど彼等は又凡べて有神論を確持し神の世界を支配することを信せり。此の信仰は實に彼等を導ける所の主義なり。彼等は又唯だ一人を除く外凡べて高尚なる若しくは卑劣なる動機によりて彼等が正しと信したる道に背離し、而して曲中の主なる事件は此等の失錯より起こりき。曲中此等の人々と對照する人物としてはエルサレム教會長及びレハの乳母ダーヤあり、二人は共に神に至るべき唯一の道を知れりと自稱し、而して教會長(レッシングと神學論を闘はしたるメルヒオル、ゲーツェを滑稽的に描けるものと見るべきは徹頭徹尾其の意見に基きて立てたる教會に全世界を驅り入れんの準備を爲せり。『ナタン、デル、ゾイゼに於いて相異なる國民性及び宗派は人生に遍通なる根本的性情によりて結び付けられたり、かくの如きものはれ人類の救濟法としてレッシングが夢想せる所のものにして、而して此の平和的精神は作の全軀に行き亘りて喜ば

しき趣味あらしめたり。さて又樂しき人物及び樂しき出來事と眞面目なる及び感動を惹くべき人物事件とは此の曲に於いて相交錯し、而してかく人世に於ける光明及び暗影の兩方面の相參差せしことが此の曲をして唯だ、一氣高き感情寛大なる行爲等の純理想界にのみ躡せしめずして人生の實境に觸れ一般世間に讀まらるべき曲たらしめたり。

レッシングが戯曲の主要なるは上に述べ終りぬ。此の他彼れの著作として記憶すべきもの政論的著作には『エルンスト、ウンド、ファルク、ゲスブレーヘ、ロートル、フライマウエル』(Ernst und Falk, Gespräche für Freimaurer) 一千七百七十八年出版あり、神學論には『アンテ、ゲーツ』(Ante-Goeze)あり、哲學的論文には『人類教育論』(Erziehung des menschengeschlechts) 一千七百八十年出版あり、又歴史哲學に關する彼れの述作の如きは重大の價值あるものなれども此等皆此の小文學史に於いて詳論すべき限りにあらず。要するにレッシングは文學評論家、劇詩家又哲學者として共に一方に卓絶し其の人物性行又頗る高尚なるものありき。感情若しくは知識的理解を第二とし行爲を以て人間眞正の目的なりと見、有徳の行爲を以て眞正の宗教的生命に

觸るべき唯一の道となし、報酬若しくは名譽に關せずして義務を行ふことを道德上の理想となせるが如き彼れが主張の重なるものなりとす。

クロップストックは詩人なりき、されど彼れは詩歌術の規則に就きて知ること甚た少なかりき。レスジンは高義に謂はゆる詩人ならざりき、されど彼れは真正の又偉大なる批評家なりき。若しクロップストックの詩才にして常にレスジンの批評に導かれたらんに『メシマス』よりも大なる作が彼れが手により出て、獨逸の文壇を飾りしならん。クロップストックとレスジンは要するに改革者なりき、『メシマス』の作家は獨逸近世の文壇に於いて高上なる熱情を詠する第一歩を爲し、『ラオコオ』の著者は深大なる思想を技術の美と結び付くる第一歩を爲せり、二者は實に熱と光と言ひ換ふれば生命と秩序とを國文學に與へしものなり。前者は文士の價値ある高上なりといふ意味にて題目に其の力を用ふべきを教へ後者は如何にものすべきかを示せり、前者の詩人的天才と後者の批評的能力とは其れ自身已に獨逸文學を飾りながら、之れと共に次ぎ起こる者をして更によく同じ文壇を飾らしむるの手引きをなせるものと云ふべし。

井ーランド

の思想は全く彼等と異なりき。彼れの考ふる所によれば詩人の天職は主として讀者を娛ましむるに在り、而して此の要求を充たさんが爲めに彼れは第一に調和的ならざるべからず、委しく云へば其の主題と文體とを其の時世の好尚に調和せしめざるべからずと。蓋し井ーランドの小説をものし初めし當時には上流社會多數の好尚は猶ほ佛蘭西風なりき。數十年このかた獨逸の文學は著く發達し其の軀制亦た見るべき進歩を爲したれども此等皆當時の貴族社會に適するものならざりき、而して彼等朝廷及び上流社會に愛讀せられんが爲めに最も重要なるは第一に其の主題を變更することなりき。井ーランドは此の主題の變更の必要を認めたり、而して彼れは優雅に又活き／＼と散文及び律語詩をものしつゝ、其の識見を廣め又其描くべき題目の範圍を擴張せり。彼れは古代中世の文學及び近世歐洲の小説より夥多の材料を借り來たりて之れを上流社會の好尚に適する様に取り扱ひたり。クロップストックの熱誠及び基督教的情操は彼等上流社會に取りてはくどきに過ぎたりき、彼等がクロップストックの誇張的なる而して時としては紛亂

せる書き振りを嫌ひたること亦故なきにあらず。レスニングが描寫の躰裁に就きては特に非難の加へらるべきなし、されど此の批評家は其の本領とする所の緻密なる思索にありしより讀者をして(娛)しましむるよりは寧ろ(寧ろ)思考せしめんと望めり。是れ已に通常の讀者殊に當時の上流の讀者に取りて堪へらるべきことにあらず、加之彼れは貴族社會の喜び迎ふるが如き題目を取ること拒むの過誤に陥れり。高尚なる題目を選び情熱を尊ぶクロツプストック一流の作、時尙に逆らひて國民の固有性に合はしめんとして多少理窟が、れるレスニング等が著、此等は共に當時上流社會に於ける多數の讀者の注意を惹くべきものにあらず。ポイランドは此等の偏見を看破して彼等上流社會の嗜好に適する作をものせんとせり。彼れは半ばヒュティスト風の教育を授けられしかども其の作するに當たりてや此等の羈絆を脱しまた題目の選擇及び其の描寫に於いて些も束縛を受くることなかりき。かくて彼れが作の文躰意匠及び描寫に於ける新特色は直に當代文士をして一驚を與せしめたり。嚴酷なる批評家すら猶ほ其の異才を稱へき。

クリストフ、マルティン、ポイランド(Christoph martin Wieland)はルーター派の教會に屬

する牧師の子にして一千七百三十三年ビーレラ、ハ市に近き一小村に生まれき。彼れがマグデブルク近傍なる學校及びト、ーピングン大學に學ぶや廣く佛國及び英國の書籍を涉獵し、又希臘羅馬の古文をも讀みて傍ら律語詩をものしき。彼れの詩歌に熱心なりしやゾーリヒのポードメルと相知るを得て其の家に止まること二年其の間おほむね高尚眞面目なる題目に就きて律語詩を作することに従事せり彼れは手初として『サイラス』(Cyrus)と題する叙事詩を作し次いで『アブラハムの吟味』と題する他の叙事詩を成したり。此の時に當たり彼れは表面上敬虔主義を奉じ『基督教徒の情感』と題する書を著して純文學に對して嚴酷なる評論を爲し、が其のゾーリヒを去るに及んでは全くポードメル及び他の先輩等の教示を忘れたるが如くなりき。其の後彼れがビーレラ、ハに居を定むるや上流社會の紳士等と交りを結ぶことを得、而して該の社會の多くの人々の好尙が事々に敬虔主義及びポードメル等の唱ふる所に反することを見たり。是れより彼れは専ら其の心を佛蘭西の小説に傾け又英吉利の文學をも研究して流暢なる筆にシェークスピアの戯曲數種を譯し、又獨逸の文壇には極めて新奇なる躰もて小説を作す

ることを始めたり。かくて一千七百六十四年彼れは『ドン・シル・ギョ・フォン・ロザル
ン』(Don Sylvio von Rosalva)物語を作り中に於いて敬虔主義を主張する學者を嘲弄
し今は此の主義を呼ぶに狂信の名を以てしき、蓋し彼れは當時猶ほ詩歌を教訓に
資するの主義を持したれども、之れを持すること最早眞面目ならざりき、蓋し彼れ
は此の時に於いて已に程よく導かれたるエピクロス派の快樂主義を喜びたれば
なり。かくして彼れは當時に行はれたる敬虔主義等諸々の獨斷説を遊戯的に攻
撃し其の著『アスピシア』(Aspasie)に於いては棄世禁欲の敬虔主義が終に感覺主義
に陥るべきことを暗示せり。彼れが此等の意見は、ギョランドの詩神ポエジックは其の尼寺
風の服を抛げ棄て自ら流行婦人の如く装へり」と評せられたるほど斬新に且つ活
き／＼と寫し出だされたり。レッシングは滑稽的に之れを評して、ギョランドの詩
神は天を見すてたり」と云ひき。

一千七百七十二年ギョランド、ヴォイマルに行き某公爵夫人の子の師傳となる。彼
れ此處にて『ドイツ・メルクル』(Teutsche merkur)といふ定期刊行の文學雜誌を創刊
せしが此の雜誌は直に獨逸文壇の木鐸と認められ爾來永く其の勢力を持続しき。

彼れの晩年に至りては其の名聲と讀者のおぼえとは昔日の如くにはあらざりし
も猶ほ精勵して文筆に従事し而して已に其の『ムザリオン』(Musarion)及び『テル・ノイ
エ、アマデウス』(Der neue Amadis)一七七一出版に現されたる傾向は引きつゝきてヴ
イマルに及び同じ市の邊りに永住せる間にものせる散文小説に現れたり。ギョ
ランドはヴォイマルにて數多の詞友と交遊し豊かなる生計を營みつゝ、高齡に至る
まで著作に力を注ぎたりしが一千八百十三年終に八十歳の高齡を以て歿す。ゲ
ーテ其の葬に臨みギョランドの性行に就きての頌辭を述べたり。ギョランドが
ゲーテと交るや其の雅量才智を感じ且つ意氣の投合せるより厚く感勸を通じた
り、フリードリヒ・ヤコビは其の關係を記して「當時の文士にしてゲーテの盛名を忌
まざりしは唯だギョランド一人ありしのみ」と云へり深く稽査する時は、此の評言
全く中れりといふべからざれども此の一特性は慥かに彼れが善徳の一たりしに
相違なしギョランドの著作に精勵なることは實に驚くべきものありき其の初年
の作を措きても一千七百七十二年以來彼れの作りしもの『オベロン』(Oberon)、『Sto-
ries and Fairy Tales』、『Wintermärchen und Sommermärchens』あり、其の他彼れの散文小説

『アガトン』("Agathon" 一七六六—六七)『ディリアブデリテン』("Die Abderiten" 一七七一)『アリスティポス』("Aristippus")及び七十歳の後にものせる二篇の外幾多の流麗なる律語の作あり、而して此等何れも彼れが文筆の好標本たるべきものなり。一千七百九十三年及び其の以後に於いて彼れは其の全集四十三巻を纂めて之れを公にせり。彼れは又多くの創作の外ホレースの書翰及び諷刺文、ルツィアンの全著作、シセロの書翰、アリストファネスの喜劇數種及びシエークスピアの戯曲幾篇を翻譯せり。

吾人の思想には深きを銜ひて實は深からざるものあり、廣からんと企てし眞に廣しと云はるべからざるものあり、ギーランドは深奥ならんと企てしこと稀なるが故に比較的の第一の缺點に陥ることなかりき、彼れは寧ろ屢、冗長の弊に流れんとせり。彼れが寫す所の旨意の明瞭にして且つ理解し易きこと少しく密ならんとして之れを繰り回すや、やがてくどしと感せしむるほどなりき。彼れは嚴酷ならざりきと雖も其のものする所多く教訓的にして往々彼れ自身が物語の半ばに出て、讀者の興を破ることあり、彼れは上にも云へる如く讀者を娛ましむるを目的

としたるが故にさほどに事物に熱衷することなかりき若し其の熱心なりしことありとせば其は敬虔主義より起る忌むべき傾向を讀者に告ぐることなりき。彼れは此の主義に従へる學校にて嚴かなる教育を受けしが其の作するや當時彼れを教へし教師をも見逃さずして假藉なく之を攻撃し其の學校の過ちを暴露せり。即ち其の詩篇『ムザリオン』『ディークラツィオン』("Die Grazien")及び "Lamented Love" の如きは彼れが其の中に於いて繰り返し禁欲厭世の風を非難せるものにして最後の詩篇に於いては戀神と美貌とが天國より追放せられて共々に下界に來たりしが、天國も此の二人なくては寂しく物憂く感せられたるが爲めに彼等は直に喚ひ返されきと記せり。『ムザリオン』はギーランドが初年の他の作に比し贅長ならず、グーテが壯時に愛讀せりといふものなり。而して中に寫す所は幼時嚴酷なる教訓を受けたる青年ありて一旦社會に背きて隱遁したるも直に其の性質の隱者たるに適せざるを悟りぬといふに在り。律語にてもものせる他の作『デル、ノイエ、アマデス』に於いては遊戯的に知識と美貌とを一身に兼備せる者の容易に見るべからざることを寫し、而して篇中の主人公はかゝる完全なる者を幾歳か空に求

めたる後終に平凡にして小賢しき妻と婚しぬといふことを描きたり。此の結末は冗長の嫌いあれど物語中の目貫と稱せらるゝ所なり。

『アガトン』は論争的なると共に教訓的なる散文小説にして意匠の發展と行文と往々冗長にして讀者を倦ましむる所あり。非ーランドは此の作に於いて彼れが幼時の記憶に浸み込みたる嚴酷なる主義を排斥し嚴酷てふことに對して嚴しき攻撃を爲せり、而して此れ等は茲に古哲學の教授に托して寫し出だされたり。其の筋に曰はく希臘の少年アガトン、デルファイにて哲學を授けられ、後にディオニシオスの朝廷に仕へ其處にて曾て教師に授けられたる道德的理論が全く實行すべからざるものなることを悟りぬ。此の物語の與ふべき教訓は往々にして直接に作者の口より與へられ小説としての妙味を殺ぐこと少なからざるものあり。前には道德を害ふとて嚴に情愛的文學を排斥して後に自らエビクロス派風の快樂主義を取り前にはポードメルの教を奉じて後にザルテール等の爲を襲ひ前に敬虔主義に熱衷して後に娛樂的文學に身を委ねし非ーランドが心機の一轉變してより彼れが後者の脚地に立ちて如何に前者を嫌惡攻撃せるかを見るべし。

非ーランドが著作の中無上の傑作にして巧妙を極められたりと稱せらるゝは『オペロン』なり。彼れが此の結構大に趣味豊かに變化多き作をものするや先づ夥多の書籍を涉獵し之れに於いて取るべき文辭韻律の如何に就きて亦精細なる研究を爲せり。其の材料は彼れが佛蘭西の小説圖書館、シエイクスピア、及びチコーサーに於いて見出だせるもの、結合より成り而して三つの離れ／＼の要書——沙翁が『眞夏の夜の夢』に於ける妖怪ホルドールの武士ヒーオンの奇異なる所行及び冒險及び氣高き戀愛及び情熱信仰の話は巧に一團として結び付けられたり。殊に一篇の樞軸ともいふべき主人公ヒーオン及び女主人レツニアの冒險譚はオペロン及びティタニアが相争ひて後に和睦する物語と密に相融和し其の意匠趣構は複雑なるにも拘らず頗る明瞭に寫し出だされたり。此の作の優れたる所多きか中にも目のあたり見るが如き活々たる描寫起こり來たる事柄の花々しきこと人物性格のおのづからなる發展等は『オペロン』として歐洲近世の文學に於ける有数の傑作たらしむる所以のものにして之れを讀む者一部々々の面白き節にのみ停留せず我れ知らず回より回に進み行くを常とす。此の作は其の調子より云へば徹頭

徹尾眞正の叙事詩にしてこれに於いて彼れ自身の性質は其の壯時の作に於けるが如く彼れ自身の直に又あからさまに現れ出づることなく、其の諷刺も著く適切となり、其の人情を叙し或は解剖するあたり特に甚だ穩當細密なるに至れり。『オペロン』はかくて世間歡呼の裡に迎へられき。レッシングは歎美の辭を以て之れを迎へ、ゲーテの如きは「黄金が黄金にてある間又水晶が水晶にてある間、『オペロン』は長へに嘆美せらるべし」とまで稱揚せり。されど一方にはかくも歎稱の聲の盛なりと共に他方には之れを貶せし苛酷なる批評家なかりしにはあらず、而して貶者の主意は此の作を以て唯だ、奇怪にして確乎たる主意なきものとし、作者は唯だ中古の奇怪なる物語及び神仙譚を思想的に、諷刺的に寫し出だし、輕快なる書き振りによりて喝采を博せしに過ぎざといふにありき。

『オペロン』の公にせられたるは一千七百八十年に在りき。ギョーランドはこれより先、一千七百七十四年に『アプテル人』(『Die Abderien』)と題する諷刺的時代小説をものせり。此の作も亦彼れが傑作中の一に數へらるものにして能く彼れが特長の輕快洒脫なる文牀に相應せる題目を選べるものなり。『アプテル人』は獨逸に於

ける當時の状態と彼れ自身の上にて起これる出來事とを織りませ希臘の假面を被らせて當時の社會殊に其の生地ヒューベラハの事を叙せらしを寫實し、諷刺し、嗤笑せしものなり。アプテル人は賢明なる者として反語的に描き出だされたり。彼等は巨額を擲ちて立派なる噴水器を造り、莊麗なる彫刻を以て之れを飾り、人身ほどなるギナスの立像を高さ八十尺の臺上に安置せり、アプテルに遊べる旅行者に嘆稱せられんとてなり、されど噴水器の邊には些の水だにあらざりき。彼等が背理の所作はこれに止まらず。篇中の最も秀逸なる部分の一をアプテル人が演劇に對する好尚を叙せるふしなりとす。篇中にイノーリヒナスの『アンドロメダ』が樂劇として演せらるゝ所あり。優人の場に臨むや、文句を忘れ或は樂譜記號を忘るゝ者あり、而して勇者を演ずるものは譜を誤り臺詞を誤り若しくは他の戯曲の文句を挿みても大聲に勇ましくだに言ひ放てば必ず喝采を得、美人を演ずる者は笑ふ時にも泣く時にも怒る時にも悲しむ時にも勇む時にも恐るゝ時にも同様に驚の如き細き聲して歌ふに於いては、同一の文句を兩三度繰り返しても必ずも一度、といふ歡呼の起るを常とし云々。されど篇中にて最も面白き部分はア

オアラに於ける大訴訟事件を長々と記せる節にして、こは并ーランドが他の作に於ける佳所と相比せらるべきものなり。叙して曰はく、オアラに唯だ一人の齒科醫ありき、彼れいたく世間に持て囃されて其の術を乞ふもの遠近に多かりしが、彼れは常に粗服を纏ひて場所より場所に旅行しき。或折のことなりき、彼れ病家に行かんとて廣漠たる野原を横される時、驢馬と其れに乗れる持主とを雇ひて其の携へたる小さき荷物を運ばしめたり。時恰も盛夏に當たりて炎熱の堪へ難きに、見渡す限り茫として日光を避くべき木立蔭蔭だにあらざりき、かくてこの齒科醫は疲れたる餘りしばし驢馬の影さす所に憩はんとしき。驢馬の主人は之れを見て齒科醫が驢馬の蔭影を占有せることを咎め、彼れと其の驢馬とが荷物を運ぶことをこそ約したれ、其の影を用ひしむることを約せずと言ひ張れり。かゝれば齒科醫は直に驢馬の影さす所を離るゝか若しくは影を用ふるが爲めに約束外の賃錢を拂はざるべからず。されど齒科醫はしかすることを拒みたるがゆゑに、端なくも茲に裁判沙汰となりぬ。オアラなる知名の法律家等は凡べて双方の辯護に雇はれ、原告と被告とは各、數多の知人の後援を得て烈しく法廷に争ひ而して

オアラ全市の人民はやがて二派に分かれ、驢馬黨及び影黨の名の下に相闘げり。兩派の相争ふことの激烈なりしや、異黨の者卓を同じうして語らざる程なりき云々。并ーランドが此の訴訟の顛末を描くや、其の叙述は實に全篇の半ばを占めたり、されど此の長々しき叙述も此處には特に許されざるべからず、何となれば此の篇の好笑味のおほかたは其の冗長なる所に存し、諷刺の眞意亦た訴訟進行の遅々たるを寫すに在ればなり。

社會及び政治に對する并ーランドが意見は最もよく其の作『黄金の鏡』(Der Golden Spiegel) 一千七百七十二年出版に現れたり。彼れの政治論は其の思想をルノー及びゾルテールより借り來れるものにして、其の形は半ばクレベロンのに眞似たるものなりき。されど佛蘭西革命を見てよりは容易く消極的基礎の上にユートピアを畫くことを止めたり。彼れ曰はく、社會に於ける悪しきことは凡べて壓制及び迷信より起これり、されど此等根本的惡事の淵源につきて彼れは少しも語ることなかりき。彼れは又『ペレグリンヌス・プロトイヌ』(“peregrinus proteus”)に於いて狂熱者を嘲笑せし、而して其の記事は彼れと時を同じうせる熱心なる愛國者ラ

ヴァイテル(Lavelle)に特に關係あるものゝ如し、されどラファエトルが付り難げなる異常の性質に就きては細かに記す所あらざりき。物語はベレグリヌス及びルツィアッがハーデスといふ所に出で遇ひてものする對話の跡に述べられたり、而して狂熱者ベレグリヌスが得意氣に其の生涯の冒險談を爲せば之れを聽き居るルツィアッは輕蔑したる調子にて面白さうに之れを聞き又時々翻弄諷刺するが如き注釋を附け加ふといふが其の趣構なりき。『アリストテレス』は彼れが書翰の跡にものせる小説にしてライヌといふ人物が其の主なる主人公の一人なり。ギョランドは此の小説に於いて彼れが説き古したる例の樂世術を用ひふるしたる調子にて描かんと企てたり、中に於いて實用あると否とは眞理非眞理を分かつの尺度にして快樂は徳行の目的なりといふ趣意を描き出だせり。道徳の事に關しては彼れは常に嚴酷てふことに反對し又特に獨斷主義を排斥しき。其の言に曰はく、人假令齡を重ねることネストルの如くなるを得、七聖人よりも七倍賢明なることを得ども、其の意見を吐露するに當たりては宜しく甚だしく懷疑主義に近しと非難せらるゝほど慎重なる調子を以てすべしと。

ギョランドの作は、おほむね彼れが流暢平易なる文辭を喜べる批評家によりて稱揚せられたり、されど之れと共に彼れが道徳上の意見及び其の作に於ける發表とは派を異にする作家批評家等によりて嚴しく難ぜられき。當時の文士等の中には『ムザリオン』及び『アガトン』等の如き詩歌小説を貶して陳腐野卑なりと罵れるも少なからざりしかど、此等の作は其の稱揚せられし時代に流行せる好尚を活き／＼と傳へたる點に於いても猶ほ捨て難き歴史的の趣味あるは明かなり。ギョランドが作に於いて最も正當に難ぜらるべき癖ともいふべきは次ぎに掲ぐる一批評家の説なり、此の意見を抱持する者僅少の讀者のみにはあらざるべし。ドクトル、フィラル曰はく、ギョランドは彼れの時代の人なり、當時盛に行はれし佛蘭西文學の機巧、甘美なる茶毒に感染せる讀者特に思索を迂濶なるものとし、熱情を笑ふべきものと思惟せる上流社會に對する作家なり。形式上佛蘭西人に屬したる斯かる人民に對してギョランドは彼等の好尚に適する様にいみじく獨逸の文學を導けり。而して彼れが辛うじてクロッブストックに與へられ而して終にレスシンクに與へられざりし稱讚を己に其の生時に於いて得たるもの、一に彼等貴族等が彼

れが作中の材料を嗜好せしがゆゑに外ならずと。是れ此の批評家がギーランドが作に現れたる道徳的傾向に對してなせる非難の嚴しからぬ部分なり。マクス、ミッセル氏の如きは恰と苛酷ともいふべき非難を下して、獨逸の批評家等がローヘンシュタイン(第五期の文學を見よ)に對してなせる嚴しき批判は彼等が今猶ほギーランドの作に與ふる賞讃と融和すること難しと云へり。されど氏はギーランドが何れの作に此の批評の當てらるべきかを明示せざりき。ギーランドが諸批評家に難せられたる此等の傾向は彼れの作に倣へるシマフネル及びハインゼ等の放逸淫靡なる作に於いて愈明かに表されたり。ギーランドは彼等に其の弟子たりと公言せられて迷惑を受けたること少なからざりき。ギーランドが獨逸文學の開發に効せし主要なる寄與は長へに忘れられざるべし。ゲーテが彼れに負ふ所や固より少なからず、ロマンティックまた中世紀を主題とせる彼れが小説に導かれたること少なからざりき。彼れが思索情熱若しくは其の他の健全なる好尚に對する抵抗は當時の文壇に於いて遊戯的、娛樂的といふ分子を文學特に小説の本領より排斥する傾向の盛なるを見たるに起因せりともい

ふべく、此の事は彼れが娛樂的方面にのみ流れたることとの辨解となるべし。彼れは當時に流行せる情熱的及び思索的傾向の作に加ふるに輕快なる作を以てして國文學を多方面ならしめたるのみならず、獨逸文學の行はるゝ範圍を南方の諸邦に廣め又多くの讀者の爲めに其の想像の範圍を擴けたり。彼れの小説を作するや材を多くの淵源に求めたれども彼れは奴隸的に古代の又は外國の文學に摸倣することなかりき。彼れが其の時代小説に於いて古代の——特に希臘の——有様を其の儘に叙すること能はざりきといふ非難も正當のものにあらじ、何となれば彼れは古物學的精密を以て時代小説をもつせんと公言せず又期せざりければなり。彼れが古代の場所若しくは人名を用ひたるは(仙郷の古代物語を用ひたるが如く)其の想像を自由に活動せしめ其の輕快なる諷刺を擅にして當世を描せんとするにありき。『アプテル人物語』に於いて見る如く。

ギーランドが滑稽的、娛樂的の作をもつせしより謂はゆる「激動突進」時代(Sturm und Drang)の詩歌の盛行するにまで、此の間の罅隙を聯ねたるはギーランドか盛名漸く衰へて後尙ほ從事したる翻譯事業なり高齡に達せる他の作家等の如くギーラ

ソドも亦彼れに對して同情を有せざる數多の青年子弟に圍繞せられて其の晩年に至りき。當時謂はゆる「ハインランド」の詩人等(次章に説く所を見よ)は愛國的ならんことを欲して半ばクロッパストックに従ひ謂はゆる「創作的天才の人々」はギョラソドの作を貶して平凡なる摸倣的なる又陳腐なるものとなししが、ギョラソドか彼等と侮蔑攻難を相交へたる有様は次章に述べべし。

1830
1770
60

第七期 (一千七百七十年——一千八百三十年)

第四章

ゲーテが青年時代——宗教政治及び文學——「ストゥルム、ウ
ンド、ドラング」——ハマン——ヤコビ——ヘルデル

六十年の長き歲月を含める獨逸文學の第七期は其の初めより終りに至るまで殆どゲーテが文學的活動の時代にして趣味豊富にして主要なる出來事に充てるが故に章を追ひて其の狀勢を叙述し行かざるべからず。余は此の章及び次ぎなる章に於いてゲーテが其の青年期を過したる時代の主要なる有様及び出來事を述べべし。思ふに此等の叙述がゲーテの想像的著作に於ける最も著き風格を説明すること鮮少にあらじ、何となれば彼れの想像的著作は多少皆自叙傳的ならざるはなく而して其か當時の時勢に關することまた甚だ密接なればなり。

ゲーテ

ヨハン、ゲルノカンク、ゲーテ(Johann Wolfgang Goethe)は一千七百四十九年八月廿四日
グライム、クロッパストック、レッシング等が已に著作を始めたる時に於いてフランクフル
トに生れき。彼れが父方の祖先にて明かに溯り得るはトッリゲンなるアルテル

ンに住みて靴鍛冶を業とせるハンス、クリステイアン、ゲーテなり。ハンスの子フリ
 ドリヒ、ゲオルク仕立師を業としてフランクフルトに來たり住みしが、此處に來
 たるや直に立身し特に一千七百五十年にツム、ブイデンホフといふ旅宿の主なる
 富有なる婦人と結婚してよりは其の家計益上りき。彼れの子ヨハン、カスバルは
 ゲーテの父にして高尚なる教育を受けたる人なりしが、後に法律博士の學位を得
 るに至りたれど平易質素なる生活に安んじて仕官に心を傾くることなかりき。
 彼れ又意志の堅固なる人にしていたく秩序を愛せり。されど其の好尚は古風の
 守舊的にして『メシアス』が『律語』にてもせられざる故を以て詩人としてクロッパ
 トックを視るとを肯ぜざりき。されど其の子アルフガングは其の父に似もやらざ
 『メシアス』を熱愛せる一人にして彼れは嘗に口して之れを讀みたるのみならず
 心よりして其の中なる長文の臺詞を誦しおぼえ、其の姉コルネリア又サタン及び
 アドラメルフの猛烈なる對話を選び出だして彼に助力せり。彼れ後に幼時を回
 想して記して曰はく、我等は篇中に見えたる嘲難及び反嘲を以て甚だ喜ひき、我等
 は迭に其を言ひ放つとを學び、其の機に會ふ度と常に「怪物」及び「叛虐人」等の言葉

をいひかはしきと。又其の頃彼れが劇場を見物せること及び七年戦争の際佛人
 がフランクフルトを占領せし時彼れが佛國の仕官と交通せることなど彼れが少
 時に受けたる影響の主要なるものなり。一千七百六十五年彼れ十六歳の時法律
 を學ばんとてライプツィヒの大學に入れり、されど彼れは法律よりも寧ろ詩歌及び
 純文學の研究に其の心を傾けき。彼れはゴットシニツド及びポードメル等の自負的
 批評文を讀みたりしか終に天才を導くべき業を其の中に見出だすと能はざるよ
 り離りて自家の信ずる所によりて其の才を發揮せんとしき。彼れは此の頃より
 已に實際の事情に觸れて思ひ浮かべたる自家の思想感情を韻律に上すことをは
 じめ後には忠實に詩歌の動機を實際に於いて見出だすといふ自家の主義に従ひ
 たり。彼れ曾て其の友エッケルマン(Eckermann)に告げて曰はく、予が詩をものする
 や曾て氣取りといふ罪を犯せることなし、其の實例を擧げんか、予は曾て佛蘭西人
 に對して嫌惡の詩をものせざりき、其は單に予が佛蘭西人を嫌惡せざりしが故な
 り……予は如何にして我が教育の大部分を受けたる人民を嫌ひ得べきぞ。され
 ど我等が佛人の羈絆を脱せし時には予は神に其の惠を謝しきと。又彼れは曾て